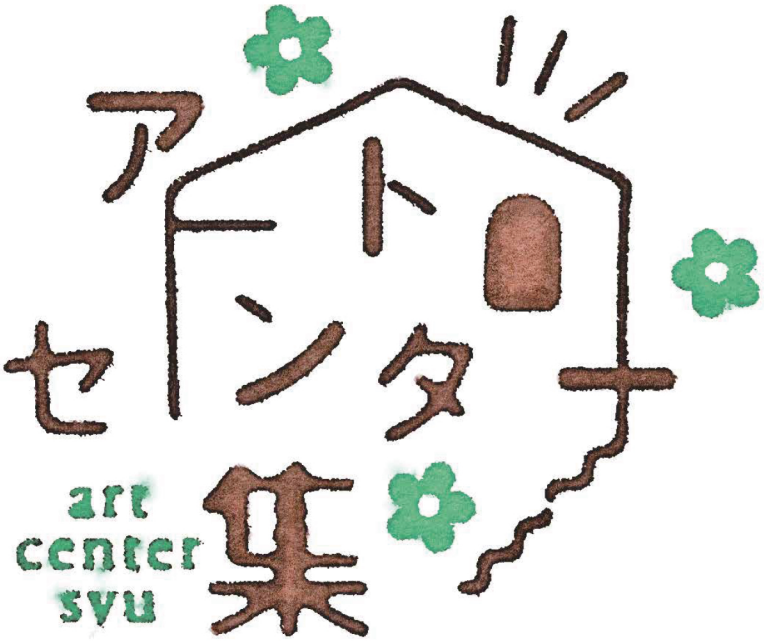
厚生労働省「平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業」@埼玉



報告書

2016-17

社会福祉法人みぬま福祉会

厚生労働省「平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業」@埼玉

アートセンター集 報告書 2016—17

社会福祉法人みぬま福祉会

その根底にあるのは、
一人ひとりが主体的に
生きていること。
豊かに生きている
こと。
楽しく暮らしている
こと。
人間らしく、
生き生きしている
こと。
そのことを
大切にしていること。

工房集は、
「そこを利用する仲間だけの施設としてではなく、新しい社会・歴史的価値観を創るためにいろんな人が集まっていこう、そんな外に開かれた場所にしていこう」という想いを込めて「集（しゅう）」と名付けました。

障害の重い人の表現の可能性を模索し続け、その中から生まれた作品を通じて、多くの人とつながり、関わり、新たな可能性が生まれてきています。

そしてこのたび、厚生労働省による平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業を受託し、障害のある人、その支援者の課題の解決、また情報交換やネットワークづくりの場としてアートセンター集をオープンしました。

「表現すること」は、人間が生きることそのもの。

表現活動を通じて、障害の有無に関係なく、人と人とを豊かにつないでいきます。

工房集は、表現活動を社会につなげる社会福祉法人みぬま福祉会（埼玉県川口市）のプロジェクト名であり、2002年に「川口太陽の家」分場として開設した活動拠点です。

みぬま福祉会は、1984年、施設入所を断られた養護学校卒業生など障害の重い5人の進路保障の取り組みから発足。「どんな障害があっても受け入れる」方針のもと現在、県内5市で11施設と20以上の事業を運営。300人を超える仲間と職員が日々、働き、暮らしています。
詳細は→P8、P56

厚生労働省「平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業」@埼玉　アートセンター集 報告書 2016-17

もくじ

プロローグ …… P02

Ⅰ 事業概要

1 背景　埼玉県独自のムーブメントを基盤に表現と支援が発展！ …… P06
2 理念・方針　みぬま福祉会「工房集」の理念と取り組み …… P08
3 埼玉県障害者芸術活動支援センターを開設！　アートセンター集 …… P10
4 支援者ネットワークを発足！　埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±〇（タマッププラマイゼロ） …… P11
5 事業計画・活動内容　4つの展覧会を軸に表現活動と支援を広めます！ …… P12

Ⅱ 活動報告

❶ 表現の場をひらく　支援者育成公開プログラム アトリエ見学ツアー&インターンシップ研修 …… P15

一人ひとりの表現を仕事に― 場を開き、共に考える ― …… P16
●アトリエ見学ツアー 参加者感想　インターンシップ研修 参加者感想 …… P20

❷ 作品で広げる　TAMAP±〇支援力UPプログラム 作品化の実践→作品展×3＋アーティストトーク×31 …… P21

まずは、作品として外へ ― それが、様々なつながりと変化をもたらす ― …… P22
作品化の実践　目的 Step1→Step2→Step3 …… P23
column アートの芽①作品を発掘するために　中津川浩章 …… P24

1 キックオフ展
「UFU♥SAITAMA±〇キックオフ」展～各施設から11名の作品をセレクト～ …… P25

3 障害者アート企画展
Step2＋ 異なる視点をひとつに 作品選考会 …… P26
第7回埼玉県障害者アート企画展「UFU♥SAITAMA±〇」展～埼玉全域から多彩な表現が集結！～ …… P27
開催に寄せて　中津川浩章・三澤一実 …… P28

4 3ヶ所同時開催展
「UFU♥SAITAMA±〇^{3}（参上）」展～一年の集大成として活動を地域に拡散～ …… P29
アーティストトーク　より深く、見つめるために …… P30
埼玉から未来へ輝きを放つ96人の作家たち …… P34
●作品化の実践 TAMAP±〇メンバー感想 …… P36

❸ 商品でつなぐ　TAMAP±〇支援力UPプログラム 商品化研修→グッズ展＋ライブパフォーマンス×5&ワークショップ×2 …… P37

何のための商品化？ ― みんなで考え、表現の魅力を出会いに ― …… P38
商品化研修　目的 Step1→Step2　開発・改良のポイント …… P39
column アートの芽②障害や福祉を魅力に　杉千種 …… P40
column アートの芽③まず、著作権を学ぼう　岩本憲武 …… P41

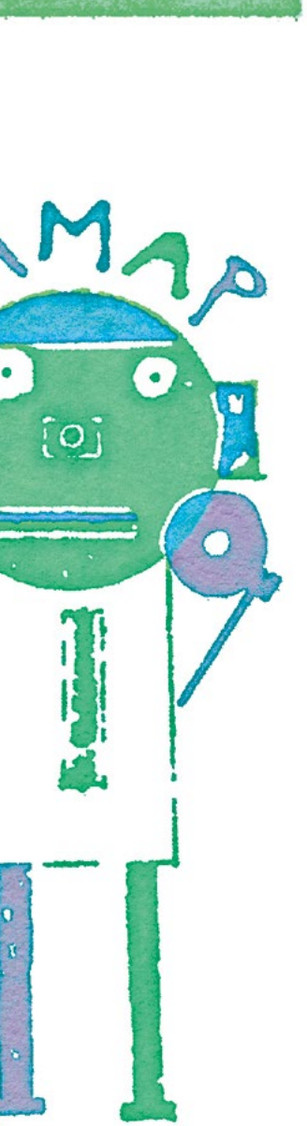
1 グッズ展
「UFU♥SAITAMA±〇ツグズムズ9」展～作家とつながる"出会い"がいっぱい！～ …… P42
ライブパフォーマンス&ワークショップ　より広く、笑顔あふれる …… P43
●商品化研修 TAMAP±〇メンバー感想 …… P46

❹ 社会に問う　支援者育成公開プログラム 第7回埼玉県障害者アート企画展 関連イベント 障害者アートマネージメントセミナー …… P47

さらに広く、変化をチカラに ― みんなで考え、表現の魅力を出会いに ― …… P48
「障害者アートの可能性について」プログラム …… P49
■ディスカッション「アートの本質とは？」　前山裕司・小澤基弘・酒井道久・中津川浩章 …… P50
■基調講演「豊かに生きる・幸せに生きるを考える」　松本哲 …… P56
●障害者アートマネージメントセミナー 参加者感想 …… P62

Ⅲ 事業成果まとめ

1 相談支援　事例・内容分類 …… P64
2 参加者意識調査 …… P68
3 展覧会アンケート×4 …… P70
4 振り返り　協力委員12　TAMAP±〇メンバー26　アートセンター集事務局4 …… P82



埼玉県独自のムーブメントを基盤に表現と支援が発展！

多くの県民が、「特長？何もないよ」と卑下する埼玉県。
しかし、「障害者アート」では、結構、がんばってます！

実は、芸術活動が盛ん！

埼玉県は、全国第5位（平成29年・約729万人）の人口を有し、浦和・大宮・与野の旧3市を合併したさいたま市を中心に東京に隣接する都市として栄える一方、「蔵の街」小江戸、川越など歴史ある街並みや「トトロの森」で知られる狭山丘陵など関東内陸部の緑豊かな自然が残る住みやすい環境にあります。

また、多くの芸術家が暮らし、近年では、故・蜷川幸雄氏が芸術監督を務めた「彩の国さいたま芸術劇場」と「埼玉県立近代美術館」の2大施設を核に、県も芸術・文化の振興に力を入れています。

そんな土壌からか文化・芸術活動の層も厚く、県内の障害者の表現活動やその支援もこの8年、官民一体で取り組む「埼玉県障害者アート企画展」を基盤に飛躍的に発展してきました。ここ数年は、障害者アートに詳しい美術の専門家たちから「全体に作品の質がいい」「個性があり、パワーがあり、イキイキした作品が多い」といった評価を得ることが多くなり、表現活動をする障害者や支援施設も年々増加しています。

さらに、埼玉県立近代美術館では、平成24年、パリのアル・サン・ピエール美術館が主催した「アール・ブリュット・ジャポネ展」の巡回展を国内で最初に開催。平成27年には、文化庁・平成27年度戦略的芸術文化創造推進事業の事務局「心揺さぶるアート事業実行委員会」として「すごいぞ、これは！」展を開催するなど、公立美術館の中でも障害者アートに積極的に取り組んでいます。

官民一体で障害者アート展を継続！

この埼玉県独自の障害者アート・ムーブメントの契機は、平成21年3月の埼玉県障害者芸術・文化懇話会による「障害者アート」振興策の提言にあります。それまで福祉の分野にあり「芸術とは別もの」とみなされてきた障害者の作品の、「障害を乗り越え努力した」面ではなく、「作品の芸術性・創造性」にスポットを当て、正当に評価する環境を整えることで、「社会に新しい芸術観や価値観を創出できるのではないか」という障害者の自立や社会参加の促進、多様性を認め合う社会の実現に向けた、「障害者の自立と社会参加のための芸術・文化を核とした施策への提言」が、知事に提出されました。

この提言を受けて平成21年、県主催の「障害者アートフェスティバル」がスタート。県の福祉部障害者福祉推進課障害者芸術文化担当を事務局に実行委員会を設け、美術・舞台芸術・音楽の催しを企画。その一つとして埼玉県立近代美術館を会場に「埼玉県障害者アート企画展」が始まりました。

さらに同年、県は、県内の障害者を対象に「表現活動状況調査」を開始。これは、送付した調査票に記入・返信してもらう方法で、絵画や造形、演劇やダンスなどの「芸術・文化活動」を把握する実態調査です。この調査では家族や福祉施設職員から見て「これは何？」と思うような表現も含めて回答を求めたことで、予想を上回る返信があり、初年度から380人以上の多様な表現を把握することができました。そして、この調査票が、障害者アート企画展の作品選考の資料となり、毎年、県内に眠る表現を発掘する機会になっています。

ちなみに障害者アートフェスティバルの舞台芸術では、彩の国さいたま芸術劇場で、近藤良平（コンドルズ主宰）と障害者とのダンス公演「ハンドルズ」などを開催。身体表現を得意とする障害者の可能性を広げるきっかけになり、障害者の音楽＆ダンスグループ「IMO楽団」などのコラボレーションも生まれました。

企画展の実践で支援の輪を醸成！

「埼玉県障害者アート企画展」の実施において、最初の2年間は、美術や福祉を学ぶ大学生が参加して、斬新な展示が好評を博しました（3年目は「第11回全国障害者芸術・文化祭埼玉大会」のため開催休止）。しかし、学生だけでは活動が発展しにくいため、平成24年度からは「障害者の芸術活動を支援する人材の育成」に主眼をおき、福祉の現場で表現活動を支援している事業所や施設の職員と学生が、学びながら展覧会を実施する体制に変更。以来、昨年度まで約20名の施設職員等が、アートディレクターの指導のもと、年15回のワークショップで、展覧会のコンセプトやタイトルを決め、美術等の専門家による作品選考にも立ち合い、展示・運営を行ってきました。この4年間の施設職員等によるワークショップ形式での展覧会実践の積み重ねが、本事業のアートセンター開設や支援者ネットワーク構築の礎になっています。

一方、障害者アート企画展の発展と共に、表現活動状況調査の返信も増え、展示数も第1回の173点（20名・8団体）から昨年度・第6回の289点（102名・35団体）に増加。作品が選ばれた本人や家族にとっては、表現が「アート」として評価されて美術館に展示されたことが、大きな喜びや自信になり、また、表現活動をしている障害者にとっても展覧会の存在が励みになって、年々、作品自体もパワーアップしています。さらに、障害のある作家たちの成長や来場者の反響、様々な支援者（家族や施設職員等や地域の人たちなど）の表現に対する意識の変化が、継続して展覧会に取り組んできたメンバー共通の大きな喜びと学びになっています。

人材育成や意識改革が支援を変える

4年間の展覧会の実践で、日頃、福祉の現場（事業所や施設）で障害者の表現活動の支援をしている担当者たちがつながりを深める中、支援における様々な問題・課題も見えてきました。

まず、多くの担当者が、利用者の表現をどう引き出せばいいのか、どうしたら表現が仕事につながるのか…、一人で悩み模索していること。また、「表現活動は単なる余暇活動」とみなされ他の職員や利用者家族からの理解が得られず、現場で孤立しているケースが多いこと。

さらに、新たに表現活動を始めようとする施設職員等から、「うちの利用者には、こんないい作品を描ける人はいない」といった声や、「美術を学んだ指導者が必要か」「どんな道具を与えればいいのか」といった質問が多く寄せられ、表現活動が「特別な人の特殊なこと」「普通ではない凄いこと」「技を磨かせて高めること」のように誤解されていること。そして、「障害者アート」が社会で注目されるようになった一方、展覧会の選考やアール・ブリュット、アウトサイダー・アートといった芸術分野で「高く評価されることに最も意義がある」といった風潮に傾きがちなこと。

そんな表現活動を取り巻く現状を直に感じる中で、「表現活動の意義とは何か」「支援では何が大切か」を考えさせられ、改めて、福祉の実践に基づくアプローチの大切さや難しさを感じると共に、一人ひとりの利用者と向き合い、表現を育み、その魅力を社会へ広げることが、福祉の現場での支援の役割であり、さらに、社会にアートの可能性を問い、新たな価値観を創出することは、障害者の表現がなせる業だと気付かされました。

また、支援をする者同士が、共に悩み、喜び、語り合う中、支援者自身の意識の変化が、利用者をはじめ他の職員や家族の意識にも変化をもたらすことを実感しました。

長年、表現活動に取り組んできたみぬま福祉会では、「工房集」の経験を整理し、伝え広めること、さらには、この8年間の埼玉県独自の取り組みを基盤に、ネットワークを再構築し、より県内に取り組みを広げながら、全国に活動を発信することが、大きな支援になると考え、平成28年度、厚生労働省「障害者の芸術活動支援モデル事業」を開始しました。

厚生労働省「障害者の芸術活動支援モデル事業」

事業1：障害者芸術活動支援センターの設置
[目的]美術活動に取り組む障害者、家族、支援者に対する支援
[内容] 1. 相談業務：美術活動への支援方法、著作権保護
2. 人材育成
3. ネットワークづくり
4. 展覧会の開催
5. モデル事業連携事務局や東京五輪文化プログラムへの協力

事業2：協力委員会の設置
[目的]計画・進捗の確認、事業協力

平成26年度に始まり、今年度は10ヶ所の都道府県で実施されています。

みぬま福祉会「工房集」の理念と取り組み

美術が得意な施設ではありません。
「何もできない」と思われた仲間たちが
自らの表現を仕事にしている施設です。

理念に基づく表現活動

「工房集」は、社会福祉法人みぬま福祉会の一施設であると共に、22施設・事業全体で取り組む表現活動のプロジェクト名です。

施設としての「川口太陽の家・工房集」は、2002年に開設。アトリエ、ギャラリー、ショップ、カフェを兼ね備えたプロジェクトの中心施設です。

プロジェクト「工房集」では、普段からアトリエを公開したり一人ひとりの作品集を作ったり、作品展やグッズ展、ワークショップなどを開催したりと、表現活動を社会につなげる様々な取り組みをしていますが、それらはすべて、表現活動以外の支援にも共通する当法人の理念に基づいています。

社会福祉法人みぬま福祉会は、1984年、「どんな障害のある人でも受け入れる」を理念に発足しました。どんな局面でも「困難や例外的な状況にある人を切り捨てない」ことを大切にしています。

表現活動は、1994年頃、既存の仕事に合わなかった一人の仲間をきっかけに、障害の重い仲間たちの仕事づくりを模索し続けたことから始まりました。今ではアトリエが10ヶ所あり、120人以上の仲間が日々、表現活動をしています。

その表現は、千差万別です。絵画、織物、ステンドグラス、木工、写真、書、詩、漫画、紙粘土…と多岐にわたる種類の中でも一人ひとりの表現は異なり、さらに日常的な行動による積み重ねやジャンルに当てはまらない「これ何!?」と思われる表現もあって実に多彩です。

美術が得意な人を集めたのではなく、むしろその逆で、「何もできない」と思われた人たちの心を揺さぶり、工房集の表現活動を導いてきました。表現によって本人も仲間たちも私たちも家族も地域も変化し、さらに表現を社会に広げることで、人々の意識を変えたり固定観念を覆したりと、さらなる変化をもたらしています。

現在では、年に約30回もの出展依頼があり、国内にとどまらず、海外のギャラリーと独占契約を結んだり、ニューヨークやフランスのギャラリーで高く評価されたりする作家もいて、個々の作品がアートの世界からも注目され始めています。

また、企業の広告、ファッションブランドとのコラボレーション商品など、表現をデザインに二次使用される機会も増えています。

このような活動を長年、現場で積み上げてきたことを評価していただき、「埼玉県障害者アートフェスティバル」では、実行委員として、また、「埼玉県障害者アート企画展」では、ワークショップのリーダーとして、他の福祉施設や美術専門家などの関係者と連携して、県内の表現活動支援にも関わってきました。

関連記事 → P56

工房集 プロジェクト

社会福祉法人みぬま福祉会が表現活動を行なっているアトリエの一覧です。

みぬま福祉会の理念

1. 県南各地のどんな障害をもっていても、希望すればいつでも入れる社会福祉施設づくりをめざします。
2. 入所者は障害の種類や程度、発達段階等が充分考慮され、一人一人のニーズに応じた生活、労働、教育、医療が受けられ、ともに生きる「仲間」として、その自主性が尊重され、人権が最大限に守られるような社会福祉施設づくりをめざします。
3. 社会福祉施設は、その地域の中に存在し、その地域とともによりよい社会づくりをめざし、入所者は地域の人々と助け合いながら、ともに生きることをめざします。

仕事とは、支援とは

みぬま福祉会では、「どんなに障害が重くとも働ける。働くことは権利である」という理念の基、仲間一人ひとりの仕事を模索する中から働くことは、「お金を稼ぐこと」に加え「社会とつながること」「仲間の豊かな発達につながること」の3つに定義しています。

また、利用者も職員も共に社会を創る「仲間」として職員は、障害のある仲間の「できる仕事を探す」のではなく、一人ひとりの異なる主体的な行動や表現に寄り添い一緒に試行錯誤しながら、「好きなこと、得意なこと、その人にしかできないことを仕事につなげる支援」をしています。

そして、美術が得意な人のアートや作業の合間に行う余暇活動の支援とは異なる日々の支援の先に表現活動がある、つまりは、誰もが表現の可能性を持っていると考えています。

このような、福祉の実践に基づく考えや現場での経験を、本事業に活かしていきたいと考えています。

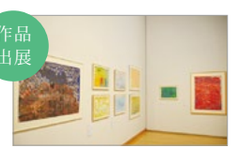
【 川口太陽の家・工房集 】

日常的に場を開き、障害のある仲間、職員、家族、地域の福祉関係者、住民、ボランティア、さらに建築家、アーティストなど様々な人を巻き込んで、表現活動を社会へ広めています。

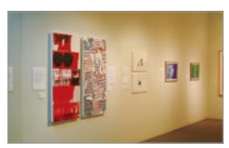
図は雑誌『庭NIWA』2017年1月号より転載
（作図：長崎剛志）

庭は、設立時から関わっている庭師長崎剛志さんの協力を得て今春、リニューアル！

工房設立時、床などを仲間と共にペイントして仕上げた



国内外の美術展への出展



BEAMSとのコラボ商品

雑誌『FRAU』2009年10月号（スカートが採用）

作品集

アートセンター集

福祉と芸術など様々な人や活動をつなぎ、障害者の表現活動の「創る」「深める」「広げる」「守る」取り組みをサポートします！

① 「アートセンター集」開設！

4月、厚生労働省「平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業」の助成を受け、「川口太陽の家・工房集」内に「アートセンター集」を開設しました。

福祉と芸術、施設と行政、作家とファンなど、「障害者アート」を取り巻く様々な人や活動をつなぎ、サポートする中間組織的な役割です。

工房集が長年、福祉と表現活動の取り組みから築き上げた実績（マニュアル化できない実践的なノウハウ）と、県内で表現活動の支援をする福祉施設等が「埼玉県障害者アート企画展」の実践により身につけたアートマネージメント力やネットワーク力を活かして事業を運営。

より多くの人々と支援のチカラを育みながら、障害者の表現活動を広く普及することを目指しています。

② ネットワークを構築！

「埼玉県障害者アート企画展」の4年間にわたる実践で関係を深めた福祉施設・事業所が中心となって「埼玉県障害者アートネットワークＴＡＭＡＰ±〇（タマッププラマイゼロ）」を発足しました。詳細は→次頁

③ 協力委員会を組織

「埼玉県障害者アート企画展」等に携わってきたアートディレクターやコーディネーター、学芸員、教育者、県庁職員、弁護士などの専門家と福祉従事者を中心に12名で構成。本年度は年2回、協力委員会を開き、事業の計画・運営について検討を行いました。各委員の事業の振り返りは→P82

④ 相談窓口を設置

表現活動をしている障害者やその家族、支援者などの「創る」「深める」「広げる」「守る」をサポートする相談窓口を開設しました。ホームページやリーフレットで広報しています。相談支援の詳細は→P64

リーフレット

ホームページ

協力委員　五十音順・敬称略

石平裕一
（社福）昴＆ＮＰＯ法人カウント5代表

岩本憲武
弁護士／モッキンバード法律事務所

大畠宗宏
（一社）埼玉県セルプセンター協議会副会長

荻原和代
埼玉県福祉部障害者福祉推進課課長

小澤基弘
埼玉大学教育学部教授（絵画及び美術教育）
画家

酒井道久
彫刻家、元埼玉県立大学教授

杉千種
ｃｏｎ＊ｔｉｏ（コンサルティング事業）

中津川浩章
美術家、アートディレクター

野本翔平
ＮＰＯ法人ＣＩＬひこうせん職員
行田市議会議員

前山裕司
埼玉県立近代美術館学芸員

宮本恵美
（社福）みぬま福祉会工房集管理者

山路久彦
（社福）みぬま福祉会総合施設長
埼玉県発達障害福祉協会相談支援部部長

埼玉県障害者アートネットワークＴＡＭＡＰ±〇
（タマッププラマイゼロ）

障害者の表現活動を支援している福祉施設職員等が、学びながら力を合わせて表現の多彩な魅力を発掘・発信！

① ネーミング

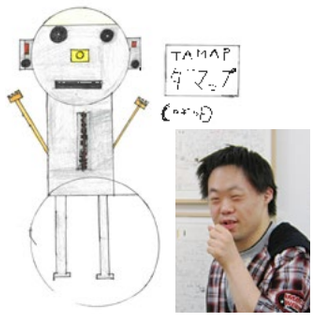
埼玉県は「プラマイゼロだ」という施設の仲間の意見に「埼玉をもっとアップ（向上）していきたい」「県内のつながりをマッピングしていこう」というメンバーの想いを込め、「ＴＡＭＡＰ±〇」と命名。

「埼玉？　特に何もないね」と言ってしまう自慢下手。でも良いところはたくさんある。そんな県のイメージを一言であらわす、

±〇（プラマイゼロ）

謙虚で控え目な中に様々なものを良しとする懐の深さ（ごちゃまぜ上等！）を持ち合わせている。「そんな埼玉を盛り上げていこう」という熱い想いを込めています。

② キャラクターデザイン



10点以上の候補から選ばれた尾崎翔悟さんのイラストをデザイン化

③ ネットワーク体制

・アートセンター集の事務局とメンバーが連携して活動。
・東西南北の支部長が地区の情報等を統括。
・障害者アートのコーディネーターである協力委員が随時、マネージメントスタッフとして活動をサポート。
・適宜、協力委員や行政と連携。

④ 活動内容

〈定例会〉
月1回開催。議事録をとり、メンバーが活動や情報を各施設の職員とも共有。

〈活動〉
事業計画に沿った障害者の表現活動に関する
・展覧会の企画・運営。
・研修の実施。
・情報交換、悩み相談。

さらに、
・活動や作家を知ってもらう。
・まだまだこれからの人を発掘。
・埼玉県を盛り上げる。
・想いをつなぎ、県内、そして全国に発信！

5月、県内の11の福祉施設・事業所から20名のメンバーが集結。埼玉県障害者アートネットワークの第一回定例会を開き、事業の企画・運営会議を行いました。

名称やキャラクターは、各施設等から候補を募り選考。表現活動をしている仲間たちの意見と案が採用されました。

参加団体　平成29年3月15日現在
発足時11団体→現在、23団体

・（医）双里会　多機能型事業所わっくす
・（社福）ウイング　ワーク＆ライクのびっこ
・（社福）川の郷福祉会　おれんじ
・（社福）啓和会　久喜市いちょうの木
・（社福）埼玉医療福祉会　光の家療育センター
・（社福）埼玉県社会福祉事業団　あげお
・（社福）さいたま市社会福祉事業団
・（社福）さその会　多機能型事業所　ぽとふ館
・（社福）昴＆ＮＰＯ法人　カウント5
・（社福）戸田わかくさ会
・（社福）新座市障害者を守る会
・（社福）皆成会　光の園
・（社福）皆の郷　川越いもの子作業所
・（社福）みぬま福祉会　工房集
・（社福）めだかすとりいむ
・（公社）やどかりの里すてあーず
・ＮＰＯ法人　ＣＩＬひこうせん
・ＮＰＯ法人　織の音アート・福祉協会
　織の音工房
・ＮＰＯ法人　なまずの里福祉会
・ＮＰＯ法人　ハーモニー
・ＮＰＯ法人　ゆめたまご
・ＮＰＯ法人　ゆりかご
・川口市心身障害福祉センター　わかゆり学園

Ⅰ事業概要 ― 5事業計画・活動内容

4つの展覧会を軸に表現活動と支援を広めます！

展覧会に、作品化・商品化の支援力を高める研修と作家が主体となるイベントを絡め、表現と活動を普及！

表現活動の普及と支援者の育成を目指し、4つの連動する展覧会（①キックオフ展 ②グッズ展 ③障害者アート企画展 ④3ヶ所同時開催展）を軸に、主に①表現活動をしている障害のある人々、②障害者の表現活動を支援している人々、③障害者アートやその支援に関心のある人々を対象にした事業を計画。TAMAP±〇の連携力や協力委員の専門性を活かし、また様々な人の協力を得て事業活動を行いました。

① 障害のある表現者に関する直接的な支援

■相談事業

表現活動や支援をしている当事者をはじめ行政や企業などからの、表現の支援や普及に関わる様々な相談に応じました。詳細は→P64 Ⅲ事業成果まとめ①相談支援

■4つの展覧会の開催

TAMAP±〇のメンバーが、作品化・商品化の研修で各施設等の利用者の表現やその魅力を発掘し、商品や作品に展開。県の表現活動状況調査で発掘した表現は、福祉（TAMAP±〇）と芸術（協力委員）等の多様な視点を交えて選考。最終的には3地域に展覧会を拡散して、表現活動の普及に努めました。詳細は→P21～62、P70～81

■作家のライブイベント

展覧会の関連イベントとして作家自ら来場者に向けて作品について語ったり、表現の魅力を披露したりする「アーティストトーク」「ライブパフォーマンス」「ワークショップ」を開催。3回の展覧会で延べ38名もの作家がライブイベントに登場！　作品展示と共に本人や支援者に様々な変化をもたらしています。詳細は→P30、P43

② TAMAP±〇の支援力の向上や支援活動の推進

■定例研修会（支援力UPプログラム）

3つの作品展と1つのグッズ展の開催に向け、月1回の定例会に併せ、作品化・商品化の実践的な研修プログラムを実施。商品化研修では、協力委員でもある弁護士を講師に著作権勉強会も行いました。詳細は→P21 Ⅱ活動報告②作品で広げる、P37 ③商品でつなぐ

■4つの展覧会の企画・運営

TAMAP±〇のネットワーク力を活かし、支援のチカラを育みながら表現やその活動を社会に広める4つの展覧会を企画。「第7回埼玉県障害者アート企画展」は、県からTAMAP±〇に主催を移し開催しました。詳細は→P21～62、P70～81

③ 支援者の育成やモデル事業の振興

■支援者育成公開プログラム

◎アトリエ見学ツアー

みぬま福祉会の5つのアトリエを巡り支援の在り方を考えるツアーを、展覧会に合わせ3回開催しました。詳細は→P15 Ⅱ活動報告①表現の場をひらく

◎インターンシップ研修

新たに表現活動を始める福祉施設職員等に、表現活動の現場を体験してもらい、支援の在り方を共に考えました。詳細は→P15

◎障害者アートマネージメントセミナー

「埼玉県障害者アート企画展」に合わせて開催。福祉、芸術、教育、法律、商品化など多分野の協力委員に登壇してもらい、多くの支援者と、表現活動を支援・普及するための視点、著作権の知識、商品化の先進事例などを学び、さらに美術の専門家によるディスカッションなどを通して「障害者アートの可能性」について考えました。また、TAMAP±〇メンバーが活動報告も行いました。詳細は→P47 Ⅱ活動報告④社会に問う

■モデル事業連携事務局や東京五輪文化プログラムへの協力

厚生労働省や、障害者の芸術活動支援モデル事業連携事務局（滋賀・社会福祉法人グロー内）との連携、情報提供など。

厚生労働省「平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業」＠埼玉

事業計画・活動内容

主に4つの展覧会を軸に、様々な人を巻き込み、1. 障害者の表現の普及
2. 支援者等の人材育成　3. ネットワークの醸成 の着実なステップアップを図りました！

※破線は人の関わり

Ⅱ 活動報告

Ⅱ活動報告では、
埼玉県障害者芸術活動支援センター
「アートセンター集」の
4つの展覧会を軸に実施した
支援者育成プログラムのポイントを紹介しながら
活動の内容を報告します。

1 表現の場をひらく
支援者育成公開プログラム
アトリエ見学ツアー＆インターンシップ研修

2 作品で広げる
TAMAP±〇 支援力UPプログラム
作品化の実践→作品展×3＋アーティストトーク×31

3 商品でつなぐ
TAMAP±〇 支援力UPプログラム
商品化研修→グッズ展＋ライブパフォーマンス×5
＆ワークショップ×2

4 社会に問う
支援者育成公開プログラム
第7回埼玉県障害者アート企画展 関連イベント
障害者アートマネージメントセミナー

Ⅱ 活動報告 1
表現の場をひらく
支援者育成公開プログラム
アトリエ見学ツアー＆
インターンシップ研修

支援者育成公開プログラム

アトリエ見学ツアー＆インターンシップ研修

一人ひとりの表現を仕事に

― 場を開き、共に考える ―

「表現すること」は、人間が生きることそのもの。そして、その支援は、福祉の延長線上にあります。一人ひとりの個性ある表現は、その人らしく生きることのできる環境や、それを理解してくれる人々との関わりの中で、育まれていくのではないでしょうか。

日頃、「施設で表現活動をしたいが、どうやって支援したらいいのか」といった問い合わせや「現場を見せてほしい」という依頼が多いことから、アートセンター集では、創作の現場を公開し、共に「支援とはどうあるべきか」を考える「アトリエ見学ツアー」を実施しました。

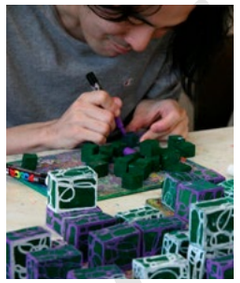
ツアーでは、川口市内の5つのアトリエを巡り、様々な障害のある仲間たちの創作現場を見てもらいました。時には仲間が案内役となって作品や活動を紹介。工房集の理念や一人ひとりの表現と向き合う支援の在り方、それによる仲間やスタッフの変化などを話し、最後にみぬま福祉会後援会が運営するカフェで振り返りを行い、意見や課題を共有しました。展覧会にあわせ行った3回のツアーには、福祉施設職員を中心に約60名が参加しました。

また、創作の現場で一日、仲間とスタッフとの関わりを体験する「インターンシップ研修」も実施。新たに表現活動を始める福祉施設の職員など11名が参加しました。

上と右の写真は別の季節。4人はいつも同じテーブルで
立体、絵、詩…まったく異なる表現を黙々と続けている

日々自分の場所でそれぞれの表現に取り組んでいる

「これしかできないこと」も
繰り返し続けると
思いもよらない力になる。



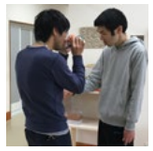
関わりながら待つ。

表現はいろいろ
人によっては手を動かさない時間も大事

仲間も自ら作品を解説

本人の「好きなこと」を積極的に認める。
役割を強要したりしない。

スタッフが仲間たちの
創作の特徴や変化を説明



インターンシップ研修
のーコマ

スタッフに習って研修生
がビニールテープを小さ
く切ってあちらこちらに
ペタペタ…

それを集めては重ねていく

作品名は「スパゲティ」。「スパゲティのようだ」と仲間がいったことから命名。本人は「スパゲティ」といえず「ゲティ」という

アトリエ輪

「川口太陽の家」と一体運営している「アトリエ輪」では、絵画、木工、書、切り絵、立体作品など、様々な表現を「きらっと班」18名の仲間たちが取り組んでいます。仲間たちが自分の表現として「どのように楽しみながらできるか」ということを、スタッフ全体で話し合いながら仲間たちと共に活動する中で、ユニークな作品がたくさん生まれています。

普段から見学者が多い「工房集」の仲間は作品をたくさんの人に見てもらえるのがうれしくて積極的に作品説明に協力してくれる

量や時間の縛りを設けない。
環境づくり雰囲気づくりをしている。

仲間の表現を見て「私もやってみたい!」と様々な表現にチャレンジ

思い思いの表現が混在しながらもどこか共鳴し合って仲間もスタッフも成長している

やりたい気持ちを育てるには、
やりたくない気持ちも大事にする。

見学や研修の最後は、併設のカフェで振り返り

「みんな仕事してるから僕も頑張る」とカフェで描きはじめた仲間をスタッフが紹介

工房集（アトリエ）

「工房集」では、「川口太陽の家」の従たる事業所として「めーべ班」が活動。知的障害のある18名の仲間が、絵画、織り、漫画などの表現を中心に取り組んでいます。アトリエの他に、ギャラリー、カフェ、ショップという機能も備えており、工房集プロジェクト発信の場でもあるので、来訪者が常にあり賑やかです。来訪者に挨拶したり、名前を聞いたり、自分の作品を見せたりと、歓迎ムードが育っています。

同じモノを作ることから
自由に作ることに変えたら、
みんな夢中でおもしろい作品を創り出した。

みな、慣れた手つきでハンダづけ

インターンシップ研修のーコマ
「あおぞら」に入った研修生は仲間に教わりながらステンドグラス制作も体験

本人の「障害」や「能力」ではなく、
「想い」に焦点をあてる。

表現の可能性を模索し続けている中から思いもよらない力強い表現が生み出されることも多い

重い障害のある仲間たちも各々のリズムで、織物や絵画、粘土等の表現に取り組んでいる

表現の可能性を模索する中で生まれた作品「ニギリ」
試行錯誤の末、台座に乗せる見せ方もしてみた

インターンシップ研修のーコマ
スタッフ（右）は「一緒にやってみようよ!」の声掛けを続けてきた中での仲間の変化などを伝えた

川口太陽の家「じゅうに」「サンだいち」「あおぞら」

「じゅうに班」では、重度重複障害のある車イス利用の9名が、織物や絵画、粘土などの表現に取り組んでいます。「サンだいち班」では、重度の知的障害のある17名が活動。障害の重い仲間とも「表現の可能性」を模索し続け、長い時間をかけて表現が形になってきています。「あおぞら班」では、知的障害の仲間が各々のステンドグラスの作品作りに励んでいます。

アトリエ見学ツアー　参加者感想

■仲間の表現活動からの気づき

・それぞれの利用者が自身の作品にプロ意識を持って取り組めていることに感動しました。

・作家一人ひとりの個性があり、また作家同士が刺激を受け作風が変わっていく（いった）様子がよくわかりました。

・作品もパワフルだが、作っている人もパワフル（自由な力）で面白いと思った。

・自分の作品（表現）が多くの人の目に触れたり評価されることで自信につながり、さらなる励みになり生きがいになっていると思います。

・自分の作品を紹介されている時、ニンマリと笑顔を見せたり、自慢げな顔を見せたりする仲間がいて、仲間自身が表現活動を楽しんでいるのだなと感じました。職員と仲間のやわらかな関わりの中で生まれる表現もあるとわかり、職場でも生かしていきたいと思いました。

■スタッフの関わりからの気づき

・個人の可能性を伸ばすという同じ目標をスタッフ全員が持ち、きちんとした形になっているので、すごいなあと感じました。

・利用者が何を生み出すのかを一緒になって悩み考え、楽しむことが大切と改めて認識しました。私たちが手を加えることで本人の作品ではなくなってしまうのではと思っていましたが、できることはやってもらい、できない部分をサポートするという捉え方を聞いて、手助けは悪いことではないと気づくことができました。

・利用者らしさを見つけるにあたり、職員の押しつけ、偏見にならないようにするのが、難しいと思いました。特に重度の利用者や付き合いが長い人に対して「これが好き、得意」と固定観念で決めつけがち。豊かな視点で利用者を見て関わっていきたいなと思いました。

・「作品」にこだわり過ぎて「どうやったら売れるか」をつい考えがちでしたが、それぞれの「表現したいこと」を一番に考え、様々なことを提供していきたいと思いました。

・生活介護の支援でも「その人らしさ」や「社会参加」「生活機能訓練」など、悩むことが多いが、スタッフの利用者との関わりを見て、改めて考えるヒントをいただきました。

・当施設でも頑張ろうと思いました。

■工房集の取り組み全般からの気づき

・様々な人を巻き込みながら文化を作っていることが感じられました。また、親御さんのサポートする気持ちも大きな力になっていると思いました。コーヒーとお菓子おいしかったです。

・保護者の方が「職員は宝です」と話されていたこと、心に響きました。

・作品・商品とその作成風景をライブで見られることが強みや良さと感じた。

・アーティストの話しを聞けるのは、作品への思いを知る良い時間でした。

■福祉施設職員以外の気づき

・一人ひとりが得意・好きなことを職員さんが引き出していることがわかりました。福祉の道を志す学生として大変勉強になりました。（学生）

・それぞれのカタチにならない表現を大切に、心と向き合うことが大事。一人ひとりの時間が流れる空間に、素敵な作品が生まれるのだなと気づきました。（編集者）

・それぞれの個性を大切にし、制作活動を楽しいと感じるために職員の方が心を尽くして考え工夫されている姿に深く感じ入りました。（美術関係者）

・「社会とつなげる」という理念に近づけようという思いが良く伝わってきて刺激になりました。（学校関係者）

インターンシップ研修　参加者感想

■利用者と職員の関わり方や距離の取り方、どのように支援をされ表現活動が展開されているか学ぶことができました。

■工房集で表現された作品は、一人ひとりに大きな違いがありました。これは利用者が選ぶ題材、素材、色、扱い方など、自由に表現ができる環境が整えられているからこそ。一方、興味深いことは、活動班の中で利用者同士が影響し合っていること。絵画、機織りなど個性が認められつつもそれぞれが影響し合い、表現に対する意欲が変化している。無理強いをするわけではなく自分の意思で決めていることは、すごいことだと感じます。たくさんの見学者が来られ、利用者もそれに慣れていることも驚きでしたが、障害者の表現活動が社会で理解され、その強さを社会が認めているような気がしました。

■職員の利用者への対応は柔らかく、とにかく自由で、どの利用者もマイペースが保たれ、そこから生まれるすてきな作品の数々にとても感銘を受けました。これまで既存の作業をどうすればやってもらえるかということを、つい考えがちでした。しかし、工房集では本人のできること（強み）をしっかりアセスメントし、そのできることから活動内容を決めるという逆の発想で取り組んでいたので、とても衝撃を受け、ぜひ参考にしたいと思いました。まずは職員の意識改革からやっていかなければいけないことを知り、その大役を任せられた気持ちです。

■１日通しての感想は、仲間の笑顔がとても素敵だったこと、仲間同士で助け合っていること、職員は常に利用者の作品を尊重していること、皆作品に対する意識（想い）が強く、集中して行っていたことでした。これまで「この場所でこの活動をする」「○時になったら水分補給、トイレへ行く」等、様々な場面で利用者を枠に入れようとしていたところがありました。その考えから、利用者にとっては過ごしにくい環境を作ってしまっていたと反省しました。私自身、このような考え方の変化に気づいたことはとても大きく、今回研修に参加することができて大変良かったと思います。

■職員がメンバーのペースを大事にし、楽しい雰囲気作りを重要としていること、視点を少し変えるだけでメンバーの可能性が広がることを知りました。また、メンバーの課題となる行動についてもその行為そのものの背景を知るという意識を持つことの大切さを知りました。私自身「表現活動」を特別なものと意識し過ぎていました。表現活動に対する考え方は、どの支援についてもあてはまる根本的な考え方であると、感じることができました。

■一人ひとりの強みを引き出し、好きなこと、やりたいことが仕事になっている。自分のペースで仕事に取り組める環境がある。表現したことを評価し、職員間で共有、アイデアを持ち寄り商品化している。表現活動を通して社会への発信、つながりができている。障害の特性に配慮した環境設定がなされている。利用者同士が互いに励まし、刺激し合いながら取り組める環境があり、それらが作品に反映されている。作品が評価されることを共に喜び共感し合える環境がある。職員との関係性も作品作りには欠かせず、いかに利用者の仕事がしやすい雰囲気を作るかも大切。作品作りが目的ではなく、人との関わり、心を豊かにすることの大切さを感じ取れる研修でした。

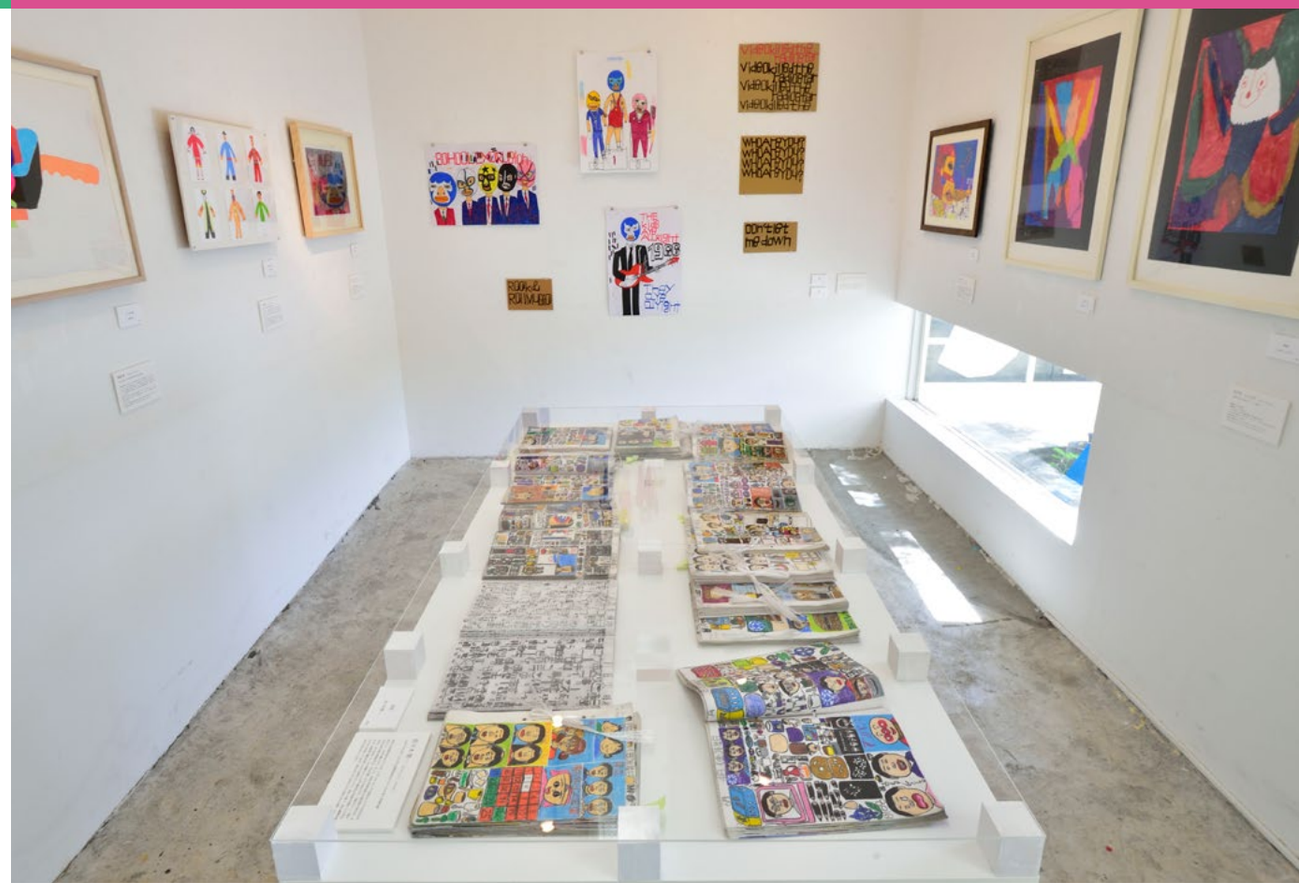
※アンケートより特徴的な感想を抜粋しました。

Ⅱ 活動報告 ❷
作品で広げる

TAMAP±0支援力UPプログラム

作品化の実践

→作品展×3 ＋ アーティストトーク×31



TAMAP±〇支援力UPプログラム

作品化の実践→作品展×3+アーティストトーク×31

まずは、作品として外へ

― それが、様々なつながりと変化をもたらす ―

表現を作品として社会に広めることは、新しい価値観を創っていく第一歩です。何気ない表現にも人の心を動かすチカラがあり、その魅力を引き出し多くの人に届けることが、支援者の仕事ではないでしょうか。

アートセンター集では、その表現の普及と支援力の向上を目的に、4つの連動する展覧会（3つの作品展と1つのグッズ展）を計画。福祉施設等で表現活動を支援しているTAMAP±〇のメンバーが、月1回の定例会で各展覧会の企画会議を開き、協力委員でもあるアートディレクター中津川浩章さんのアドバイスを受けながら、県から主催を委ねられた「第7回埼玉県障害者アート企画展」を含め、すべての作品選考から展示・運営までを協働で行いました。

また、展覧会では、さらに表現の魅力を広め作家と来場者の交流をはかる、作家主体のライブイベントを開催。2つの作品展で行ったアーティストトークでは、延べ31名もの作家が大勢の来場者を前に作品に込めた想いや制作のエピソードなどを語りました。

作品化の実践

目的

・日常の中の表現と向き合う
・様々な視点を交えて表現について考える
・展覧会や展示を通して表現を大切にする

TAMAP±〇のメンバーが、学びながら3つの作品展を開く支援力UPプログラム「作品化の実践」では、単に個人が表現を作品として展覧会で広める技術や知識を得るのではなく、目的にあるような「支援の意識」や、ポイントにあるような「アートの視点」を共に考え学び、それをメンバーが各施設等の職員と共有することで各現場の課題解決をはかる、支援者ネットワーク全体の〝ボトムアップ！〟を目指しました。

【企画会議　メンバー構成】
実施運営者　TAMAP メンバー 11~20名
アートセンター集スタッフ 4名
アドバイザー　アートディレクター 1名
コーディネーター 1名

STEP 1 作品の種を見つける

・一人ひとりの日常を
表現として捉え大切にする。

POINT　キラッとする瞬間、ワクワクする瞬間を見逃さない！これって何？というモノも一つの表現。

毎日、持ってきて見せてくれる帰宅後に描いている絵日記。出来事がコマ割りでビッシリ描かれている。コメントもユーモラス。家には相当ストックされているみたい

いろんな色で描くことが好き。特にマーカーで描くレジ袋がお気に入り。家には袋がいっぱい。捨てないで集めてみた

あらゆるヒモ状の素材を楽しそうにギュッと結んではホイッ…こっそり溜めてみた。素材を用意したら作らなくなったけど…

STEP 2 表現の魅力を共有

・創作の様子などを伝え
一人ひとりの表現の魅力を語り合う。

・各作品展のテーマや会場に合わせ
作品を選考。

POINT　一人ひとりの表現の魅力を様々な視点から探り合う。

その人にしか出せない、その人らしいモチーフ、色彩、質感、造形…
リズム、時間、チカラが伝わる、想いがあらわれている表現…その魅力は様々

UFU♥SAITAMA±0 キックオフ展

― 各施設から11名の作品をセレクト ―

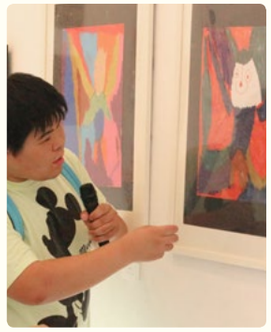
2016.9/1～9/11 @川口市・工房集

TAMAP±0主催の第一弾。「12月の障害者アート企画展に行ってみたい！」と思ってもらえる展覧会を目指し、昨年までの企画展で連携を深めたメンバーが中心となって、各施設等から選出した作風の異なる11名の作品を紹介しました。

アーティストトークには、6名の作家が参加。初挑戦の作家も臆せず、普段とは違う表情を見せ、職員や家族を驚かせていました。また、初めて作品が売れた作家もいました。

身近な人たちからの反響も多く、作家たちの今の様子やTAMAP±0の活動を知ってもらう良い機会になりました。来場者の感想は→P70

来場者522人（アトリエ見学ツアー20名、ワークショップ「いろんな葉っぱを描きます」（庭師長崎剛志さん協力）73名、カフェ利用222人）



来場者数 522人

出展作家 11名

STEP 3 見せ方の検討

・「どうしたら作品の魅力が伝わるのか」アートディレクターを中心に展示構成や展示方法を検討。

・作品と会場に合わせて額や展示台等を準備。タイトル・作者名・説明等のキャプションを作成。

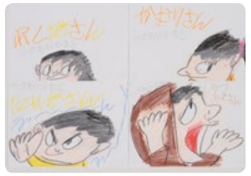
POINT 一点一点大切にしながら来場者が作品と向き合う空間をどう作るか考える。

何点をどう組み合わせどう展示するか、限られた展示空間でどう配置するか、他の作品とのバランスは…時にはタイトルや説明が表現を引き立てることもある

似顔絵の連作は壁面に

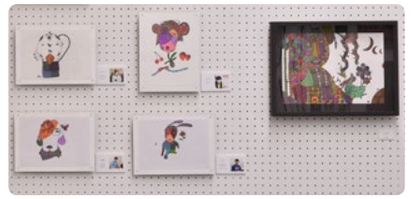
軽やかな作品は上に

数で時間の積み重ねやエネルギーを伝える



数で個性や作風を伝える

すっしりとした綴りは平置きに



展示方法を変えて表現の幅を伝える

columnアートの芽①

作品を発掘するために

アートディレクター　中津川浩章

まずは、よく見ること。感じること。すぐに意味化しないこと。「違和感」を大事にすること。既成の知識や過去の体験だけから結論づけないことです。それから次に、そこに何が表現されているのかを「読む」ことです。そして自分で感じたこと、見たこと、読みとった何かを、ゆっくりと言語化していきます。

そして言語化されたものをスタッフなど関係者と共有し対話していくことです。そうすることによって自分が感じたこと、考えていたことが対象化され、社会的な視線が育っていくことでしょう。作品に対する社会的な視線が育っていくと、自然に作品の意味や価値が自分の感性を通じてわかってきます。すると、展示する価値も的確に把握できるようになります。

また言うまでもなく、自分自身の感性を磨くことは大切です。いろいろな展覧会を見ること。たまには作品を購入してみたり。そうすることで審美眼を養い、作家をリスペクトし、作品の持つ客観的な魅力に気づくこと。そうしたことが障害者の作品理解に、また作品を介した対外的な人間関係においてもきっと役に立つでしょう。

第7回埼玉県障害者アート企画展

UFU♥SAITAMA±0展

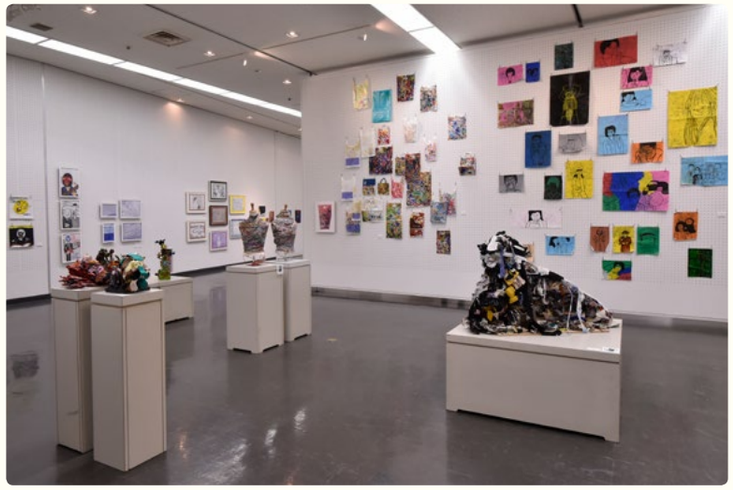
― 埼玉全域から多彩な表現が集結! ―

2016.12/7～12/11　@さいたま市・埼玉県立近代美術館一般展示室1

埼玉が誇る「障害者アート」の祭典。初の民間主催で開催した今年度は、過去最多の425通の調査票から選出した83名・561点もの作品を紹介しました。

常連作家の新作から初めて世に出る作品まで多彩な表現が一堂に会し、埼玉県における表現活動の広がりが感じられる展覧会になりました。また、展覧会に向けて制作された力作もあれば、支援者が発掘した日々の表現の集積もあり、障害者アートの幅広さを伝えると共に「障害とは?」「アートとは?」といった本質的な課題を問う機会にもなりました。

表現活動に関心のなかった作家の家族や施設職員が、作品として展示された表現を見て、目を輝かせたり喜び合ったり、施設利用者等の来場も多く、作家同士が交流する場面も多くみられました。来場者の感想は→P75



また、関連イベントとして障害者アートマネージメントセミナー「障害者アートの可能性について」を開催しました。詳細は→P47

出展作家
83名

来場者数
1313人

■主催　埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±0、
社会福祉法人みぬま福祉会
■共催　埼玉県
■後援　上尾市、春日部市、川口市、川口市教育委員会、川越市、
行田市、熊谷市、鴻巣市、さいたま市、さいたま市社会福祉協議会、
戸田市、新座市、東松山市、三郷市、吉川市、JR東日本大宮支社
■協力　埼玉県立近代美術館、埼玉県アートフェスティバル実行委員会、
con*tio、株式会社ジェイアイシー
■キュレーション　中津川浩章

STEP 2 プラス

異なる視点をひとつに

＋ 作品選考会 ＋

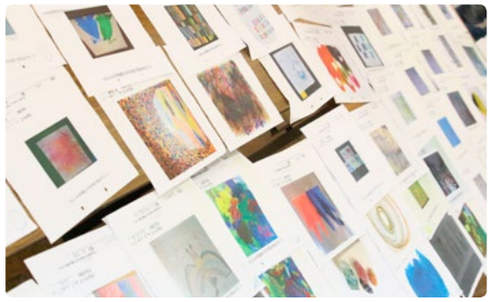
今年、県から主催を移して開催した「第7回埼玉県障害者アート企画展」では、
TAMAP±0メンバーと協力委員でもある美術の専門家たちが、
福祉とアートの視点を交えて作品選考を行いました。

選考メンバー

TAMAP±0メンバー13名
アートセンター集スタッフ4名
アートディレクター中津川浩章（美術家）
コーディネーター杉千種（con*tio）
小澤基弘（画家、埼玉大学教育学部教授）
酒井道久（彫刻家、元埼玉県立大学教授）
前山裕司（埼玉県立近代美術館学芸員）
内田幸男（埼玉県障害者福祉推進課）

POINT　福祉・美術・教育…異なる視点で作品の魅力を語り合う場が、
「障害者アート」や「アート」を考える豊かな時間になる。

1.県が平成21年から続けている県内の障害者を対象にした「表現活動状況調査」の調査票をもとに選考。



平成28年度調査票回答数425名

2.選考委員が同じ持ち票数で投票。選考作品を約半数に。

3.選んだ理由や作品の魅力を語り合い、作者を知る施設職員等は、作品の成り立ちや作者について解説。美術専門家の目と福祉現場の目、それぞれの視点を共有。

4.最終的には展示予定数にあわせて数を絞り込み、出展作家を選出。

開催に寄せて

アートディレクター　中津川浩章

日本の障害者アートはさまざまなプロセスを経て変遷しながら、少しずつ認知され、社会に新しい価値観を生み出してきました。美術教育や知識によらず創造性の源泉からほとばしる真に自発的な表現、を意味するアール・ブリュット〈生の芸術〉の概念はひろく知られるようになりました。アール・ブリュット＝障害者アートではないものの、そこでは障害のある人の作品が数多く取り上げられ世界的な評価を受ける方もいます。

かつて2012年からの3年間、埼玉県障害者アート企画展ディレクターとして県内の各施設を巡り、さらに施設に属さずに自宅で制作している方を訪ねるなどして表現活動調査を行ないました。そこで目にすることができた膨大な数の作品はまさに玉石混交。障害者の表現活動が有する幅の広さと深さを思い知らされました。人材育成とネットワークの構築を目指して福祉施設スタッフや学生らを対象にワークショップも行ないました。そのかつてのワークショップのメンバーが、この展覧会でスタッフとして参画してくれていることを嬉しく思います。

障害者にとってアートとは？表現とは？福祉とは？そんな問いを包括する今回の展覧会。埼玉県全域からセレクトされ83人のアーティストによる561点の衝撃的な作品が展示されました。新たに発掘された驚くような作家。長年ずっと描き続けている作家の深まり。また時を経て独特な変化を遂げた作家。アートと福祉、それぞれからの目線が交錯し越境し、新しい視野が浮かび上がってきます。スクリブルあり、フィギュアあり、綿密な写実、執拗な点描、行為性を積み重ねたもの。――どの作品も、障害があるのに、ではなく、障害があるからこその生きるエネルギーに満ちています。じつに多種多様でありながら共通していえることは、それが一人ひとりの切実な必要性から生まれてきたものだということです。人間が表現することの原点が、ここにあります。

来場者に配布した作家紹介と出展作品を収録した作品集が発行されました。

埼玉県障害者アートフェスティバル
実行委員会 発行

埼玉県障害者アートフェスティバル 実行委員長　三澤一実

第1回障害者アート企画展が2009年に開催され、障害者の自立支援を目指し障害者アートの可能性を追求してきたこの展覧会は、7年目の今年、展覧会の主催者が埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±0、社会福祉法人みぬま福祉会になりました。今まで埼玉県がリードして取り組んできた展覧会づくりのワークショップや商品化セミナーなどの講習会がようやく実を結び、本年、民間の団体が厚生労働省の助成を受けて主催する初の取組となったのです。アートを通して障害者の自立支援を目指している障害者アートフェスティバル実行委員会としては、このような動きは誠に喜ばしい出来事です。これから先、行政と民間との協働で障害者アートフェスティバルの更なる可能性を追い求めていきたいと存じます。また、ゆくゆくはこの企画展が、障害があっても地域社会で普通の暮らしを実現するノーマライゼーションの実現につながっていくものと信じております。

さて、第1回障害者アート企画展の時に、「僕は絵を描くようになって人に優しくなった。我慢することができるようになった」と語ってくれた作者がいました。その言葉はまさに人々がアートによって優しく生活出来るということを証明しているように思っています。それは描く人たちだけではありません。作品を見る人にとっても、作品にあらわされた色彩や形が、作者の声として見る人の感情に語りかけ、優しい気持ちが生まれてくるのです。彼らの作品には一見何を表しているのか分からない作品もありますが、その筆遣いの痕跡や描かれた内容から意味をさぐり、そして作者の思いを感じ取ることができると、一気に作品の魅力に引き込まれていく不思議な強さを持っているように感じます。それは、表現することと生きることを純粋に重ね合わせ、まさに生きるために表現し、表現することで生きている姿が彼らにあるからなのでしょう。本展覧会はそのようなお互いの〝生きる〟を感じあえる展覧会だと思います。

作品集より転載

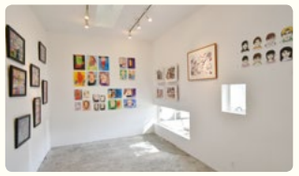
3ヶ所同時開催展

UFU SAITAMA ±0 3 (参上)展

― 1年の集大成として活動を地域に拡散 ―

2017.2/2～2/11　@川口市・川越市・春日部市

障害者アート企画展の出展作家に新しい作家13名を加え、さらに各会場に合わせ作品も一部選び直し、3ヶ所合わせ95名の600点を超える作品を展示しました。



《南部地域》
@川口市・工房集

工房集では、ちょっとディープな作品を集めて紹介。後援会が運営するカフェで寛いだり、平日は併設のアトリエを見学したりしながら、じっくり作品と向き合える会場になりました。来場者の感想は→P79

出展作家15名、来場者329人（アトリエ見学ツアー20名、カフェ利用124人）

《西北地域》
@川越市・川越市立美術館

川越市立美術館内市民ギャラリーにて開催。広い会場に、未来を担う新進作家からベテランまでの多彩な作品を集め、埼玉県の障害者アートの層の厚さ、作品の幅広さや奥深さを紹介しました。

障害者アートと知らずに立ち寄る人や、外国人観光客なども多く、出口では「面白かった」「驚きました」といった声が多く聞かれ、日を改めて見に来てくれる人もいました。年齢層も幅広く、特に年配の人が時間をかけて鑑賞を楽しんでいました。また、14名の作家が参加したアーティストトークでは、会場から人があふれるほど集まり、作家同士や作家とファンなど様々な交流が生まれ、大盛況でした。

出展作家63名、来場者1147人

《東部地域》
@春日部市・多機能型事業所わっくす
喫茶「ゆめいろ」

初の本格的な作品展となる新しいカフェ空間に合わせ、明るくポップな作品を集めました。カフェや併設の福祉施設で働く人たちも、作家と一緒に展示や会場の雰囲気、来場者の反応を感じることができ、カフェの運営自体も盛り上がりました。

また、アーティストトークでも作家の個性が際立ち、温かく楽しいイベントになりました。

出展作家18名、来場者368人（カフェ利用227人）

出展作家
95名

来場者合計
1844人

アーティストトーク
より深く、見つめるために

作家の輝きが、社会を変える

作家が来場者の前で作品について語るアーティストトークには、3ヶ所で延べ25名もの作家が参加しました。

初めて挑んだ作家12名も、作品に込めた想いを自らの言葉で語り、または、創作の様子や作品が生まれたエピソードを説明する家族や施設職員の隣に立ち、みないい表情を見せていました。来場者からの質問も多く、「どんな時に描いたの」「何でそのモチーフにしたの」といった質問の答えにも、作家の個性があらわれていました。また、「ファンなので会えてうれしい」「一番好きな作品です」といった熱いメッセージも多く、照れながらうれしそうにする作家の表情に、みんなが笑顔になり、会場が温かな雰囲気に包まれていました。

作品を介しての様々な交流が、作家と表現を育み、またその変化が、支援者や周囲の意識にも様々な変化をもたらしています。

語り、つながり、あふれる想い

齋藤進さん（わっくす）

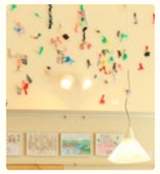
一言でいえば、張り合いがある。世の中には、天使の絵を描く自分のような人間がいてもおかしくないのかな、と思ってもらえれば。人前に立つのは苦手で、これまでの六十数年間ほとんど経験がなかったが、もっと自分の絵について厳しい意見も言ってもらって、それを足掛かりにしてまた絵を描いていきたい気持ちだ。

黒川文子さん

トークイベントに参加して、社会のみなさんへの気持ちの持ち方が変わったように思います。会場にいたみなさんが、わたしのこともあたたかく受け入れてくださっていることを感じ、これからはそのことを忘れないようにして、また、わたしもあたたかい気持ちを持つことを忘れないようにしようと思いました。

永井健雄さん（光の園）

初の参加でしたが、堂々と大勢の前で作品について説明していました。「こんな乗り物が未来にあったらいいなと思って描きました」と話し、作品に対する思いが伝わってきて感動し、その姿はアーティストそのもので誇らしかったです。次の日、担当職員に「昨日、自分は立派でした」と報告したそうです。この経験はとても大きな自信となり、次の作品にも意欲的に取り組んでいます。次は発泡スチロールで立体の美女を作るそうです。



壁面に展示した
様々な素材の様々な結びを
制作した野村さん（右）
言葉では語らないがうれしそう

野村真優子さん（ゆめたまご）

真優子さんは紐を何度も結んだものを制作していますが、彼女にはこれが作品であるという意識はありません。トークに参加したのは、日々何気なく作ったものを「素敵ね」と言ってくれる人がいるのだということを、本人に伝えるためでした。

長時間同じ場所にいるのが苦手な彼女がずっと笑顔で、注目されて喜んでいるように見えました。

展覧会を重ねるうち尖った毒々しい作品から
ユニークな創作へと作風が大きく変化した

横山涼さん（工房集）

2月5日日曜日に川越美術館に行きアーティストトークをしました。たくさんの人が観に来てすごかったです。自分の発表は最後でしたが、うまく発表できました。発表を終えて自分の作品の「ビックホーム」をいろんなところからデジカメで撮ったり、電気をつけたり、消したりしました。あと、白田君や高谷さんの作品、大串さんの作品も撮りました。今度また機会があれば行きたいです。

西川泰弘さん（工房集）

トークイベントは過去にいろんなところでしていたので、今回も緊張せずに話すことができました。絵画活動をしている気分やはじめたきっかけの話しをしました。またその他にホームでの生活の様子も伝えました。作品展でアーティストトークイベントをする障害者アートは、華やかな感覚を持ち、魅力的に感じます。これからも絵画活動を頑張ります。

作品をたくさんの人に見てもらいたい
話しをしたいという想いがトークにもあふれていた

石井章さん

今の一般の方は現代社会が抱えているストレス、本質的な根本を忘れている生活にあきあきしていると思います。そういう中で、私は一般の方たちにもわかる美しい色彩の絵を中心に描いています。私は大人の塗り絵教室をやっていますが、生徒には自由に塗らせています。自分独自の持っている色彩感覚を感じられるようになることで絵画が好きになるのです。

展覧会への出展を重ね両親の意識にも変化
当初は紙袋で搬入していたが、
作品として大切に扱うようになった

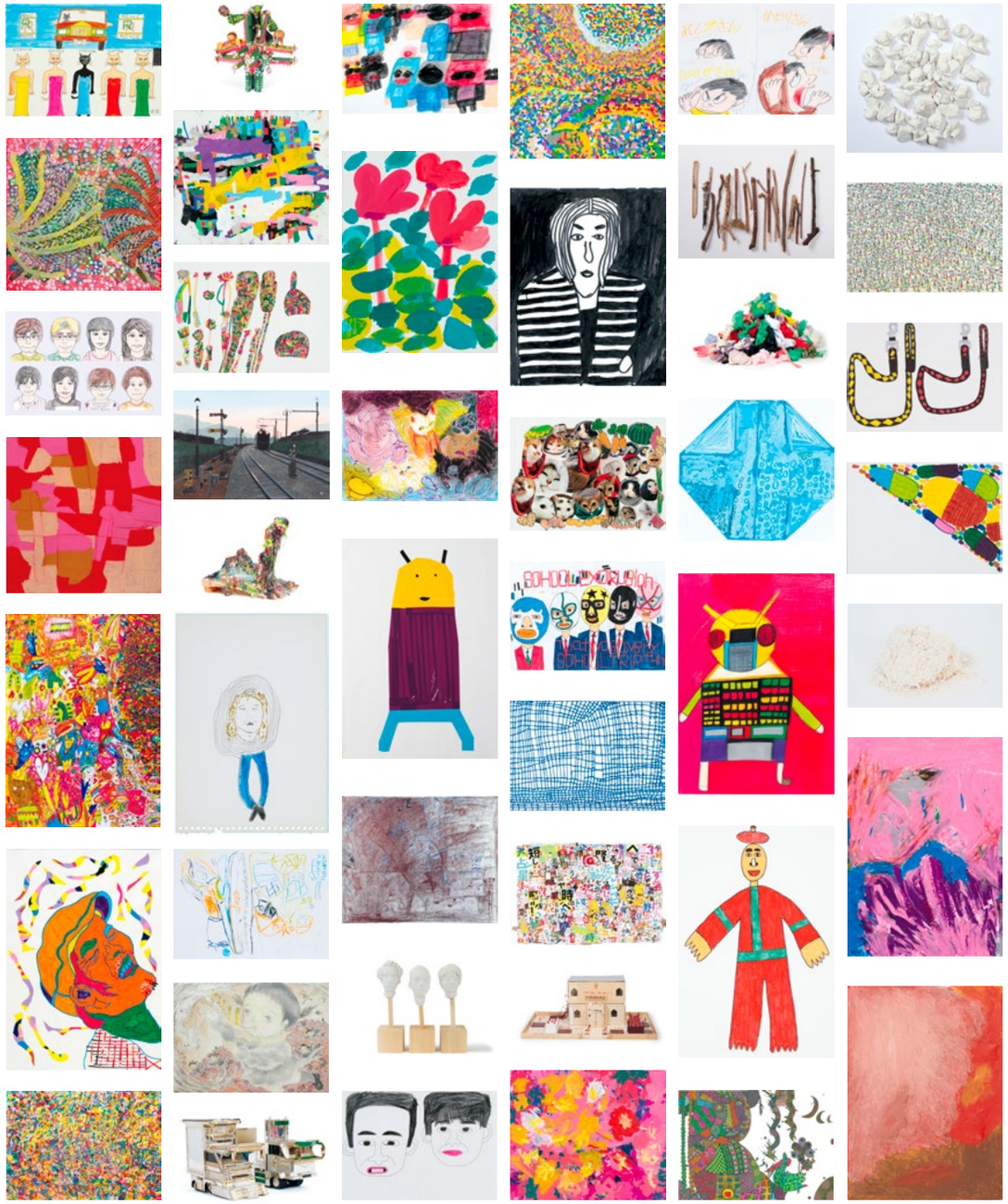
なお丸さん

埼玉県生まれで良かった。埼玉県障害者アート展に参加することで、僕の人生はラッキーの連続です。色々な人に知りあえて、認められて、広がっていきました。アートセンター集主催の障害者アートマネージメントセミナーで「作品作りは、仕事になるのでしょうか?」と質問したところ、4人の先生方から真剣にアドバイスをいただきました。川越市立美術館でのアーティストトークの場に立ち人前で話す経験ができました。これからも作品作りを頑張って行きます。

作家LIVE episode1

突然、似顔絵バトル?!

たくさんの似顔絵を出展した都築敬昌さん。即興で似顔絵を披露した。トークでは話さず歩き回っていたが、集中してパッとモデルの特徴を捉え、もの凄い勢いで描き上げた。するとモデルの髙松由紀子さんも「お礼ね」と、都築さんをササッと描いてみせた。突然の二人の競作と笑顔にみんなもにっこり。

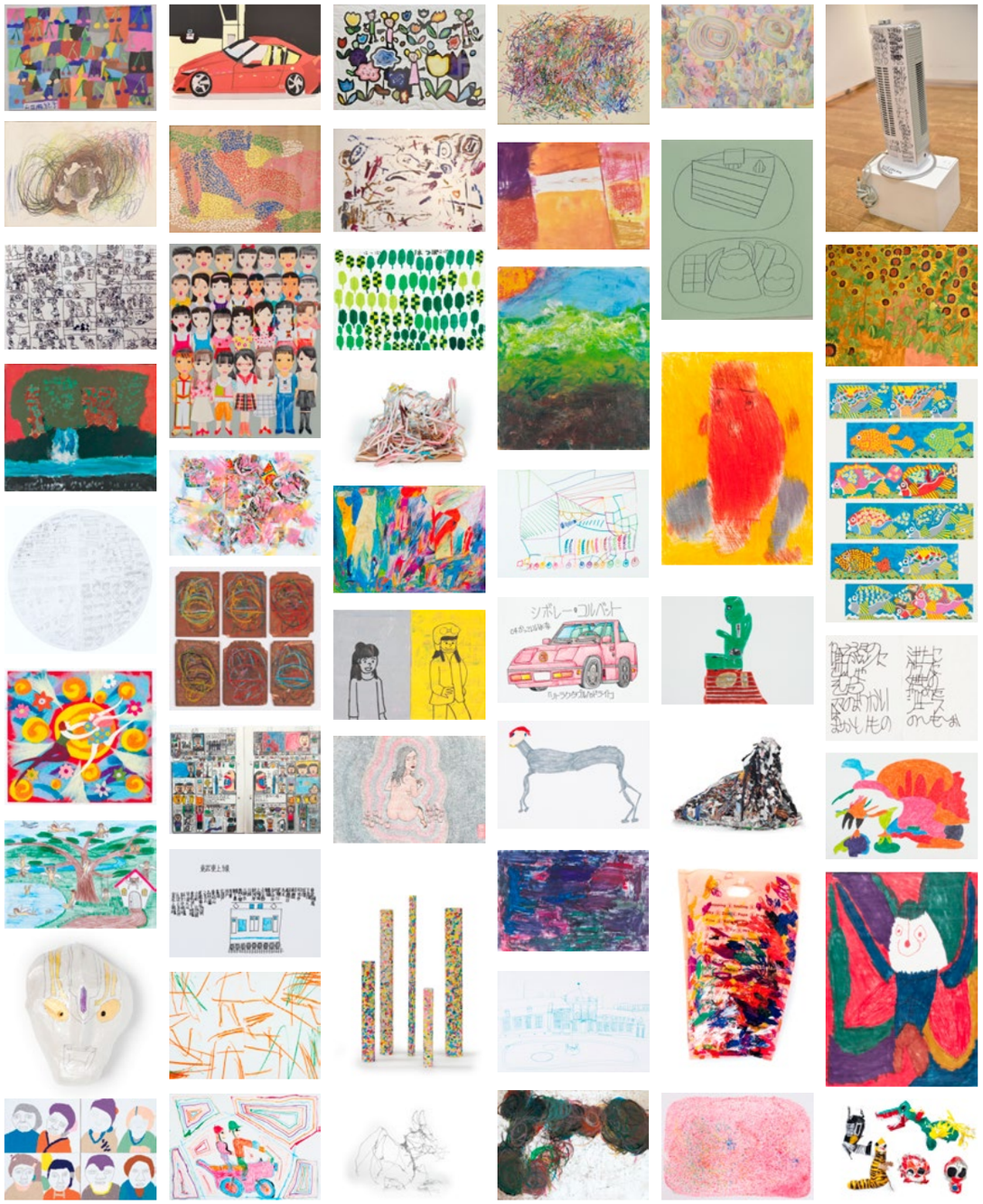


【出展作家一覧】　西川泰弘　佐々木孝志　高橋裕子　東野将大　石井章　ベイビーズ・ブレス　山内功次　杉山良介　熊倉美優　平田佳宏　金谷ゆり　荻原徹　古澤美紀　下山肇　佐々木拓也　さとちゃん　宮原裕美　白田直紀　マスカラ・コントラ・マスカラ　前田聡男　椎橋豊　なお丸　原口めぐみ　川田修　横井雅美　前田貴　大串憲嗣　箭内裕樹　高谷こずえ　黒川文子　小幡海知生　福島尚　佐々木慎一　鳥羽直弥　曽我部竜弥　嶋田怜真　卯月寛　小林春介　石井陸渡　永井健雄　横山涼　神田泰宏　関口広史　佐藤こはる　加藤朋大　小林ちゃん　安田英明　シュウシュウ　後藤友康　高橋創　野本竜士　斉藤勇真　今村明義　田中貴之　須田法子　すずきしょうた　三好進　納田裕加　野口敏久　豊島則幸　山田麻紀子　佐藤祐一　森川里緒奈　風間博　尾ヶ井保秋　ユキウサギ　真由美　吉田大将　斉藤健視　鈴木めぐみ　田中悠紀　簀戸綾子　小田中浩美　EMI　小林カオル　柴可南子　阿部香織　能崎由貴子　平川寛隆　新井貴道　齋藤進　栗原和秀　髙松由紀子　大倉史子　野田勇人　三浦元史　柴田和　ヤマダジュンヤ　都築敬昌　武石トシ子　梅澤勝典　福島香織　八島遼　内藤みひ　野村真優子　Over

作品・作家名とも順不同

ぜひ、埼玉県が誇る！
個性豊かな表現と作家に
会いに来て下さい UFU♥

埼玉から未来へ輝きを放つ
96人の作家たち



作品化の実践　TAMAP±〇メンバー感想

■作品展による作家やその周囲の変化
・自分の作品が展示されているのを見た作家が、数か月描いていなかったのに次の日から描き始めた。
・自分の作品がなかった作家も、しばらくすると、気になる作品をじっくり見ていた。
・今まで作品を見る事が少なかった利用者も、気になる作品をじっと見つめていた。
・作家から「イベント会場などで他の障害の当事者と交流できるのが楽しい」との感想が聞かれた。
・認知の難しい作家が、自分の作品をしっかり認知し、反応するようになった。
・作家が、展示やパフォーマンスを通して活動範囲が広がり、自信をつけてきている。本人だけでなく、家族の自信にもつながっているようで、家族が施設の活動や交流の場に積極的に参加するようになった。

■各施設等内部の変化
・これまでは作品展を見に来なかった職員も興味を持って来てくれた。
・表現活動に関わっていない利用者も含め、大勢で一緒に見に行くことができた。
・昨年はまったく来なかった施設から、2日間で2グループが来てくれた。
・3回目の参加だが、年々みんなを大切にするような空気が施設の中で生まれている。
・職員で額作りをしたのは、大変だったが団結できた。

■定例研修会について
・他法人の職員と繰り返し顔を合わせる中で少しずつ展覧会の運営に必要な団結力やチームワークが育まれたような気がする。
・毎月集まり話し合ううちに少しずつわからないことや知らないことが見えるようになってきて楽しかった。
・企画展の名前を決める作業などで、全体共有ができてよかった。
・専門家の視点は自分の知らない世界を知ることに等しいと感じた。多くの福祉職員に体験してもらうことで地域福祉力向上に寄与すると思う。

■作品選考について
・平等な選考だったと感じた。
・施設の一職員も専門家も一緒になって感性を働かせて選考に携わり、納得のいくものになったと思う。
・年々厳しくなっている。それでも同じ作家が多く、同じ作品が散見された。その点は、全体で考慮する必要があると感じた。
・「上手な人」が選ばれていると感じた。もっと「芸術は爆発だ！」のようなアグレッシブな表現の作品も選出されたらと思う。
・表現活動状況調査票に作品が生まれた背景を記入できれば、より作家の想いが伝わり選考の参考になると思う。

■展覧会準備について
・展示の仕方など詳しくレクチャーしてもらい、施設での展示でも活かせると思った。
・設営の後に作品や作者の情報を共有できたので、来場者に質問された時に説明することができ良かった。
・各施設が市に後援依頼をすることで、これまでは施設内の一活動に留まっていたが、少し違った意識で企画展に取り組めた。市内の関係施設や職員、来館者にも周知を図ることができた。

■展覧会について
・たくさんの作家やその家族が来場していた。
・会場のスタッフがどの作家についても答えられることを評価してくれる人もいた。
・鑑賞マナーなどの取り決めは、一般的なルールを基準にしながらも、ある程度寛容な空気感も保っていなければ障害者アートの企画展としては不自然だと思った。一般的な枠にはまり難い人たちの表現の披露の場では、作品（権利も含めて）を守るということを除いては、ある程度内包されて良いと思う。
・出展作家に、企画展の報告を具体的にできたらいいと思う。来場者が作品を見てどう感じたかなど伝えることで、モチベーションが上がると思う。
・新聞、テレビ、自治体広報への宣伝不足が反省点。
・広報チームを作り取組めればよいのではないか。

■活動全般について
・決定したことの説明を受けて動いていくことが多く、全体で考え作り上げたという印象が薄い。今後は企画・運営段階で他の施設も関わることを考えたらいいと思う。
・全体で集まると発言する時間が少なくなってしまう。各支部の少人数で進めることも一考では。
・参加団体が多くなり、各施設の意向が通りづらい印象を受けた。支部をどう運営するのかが、今後の課題の一つ。
・メンバーがいない市町村へ勧誘活動をし、支部会が開催されたりすれば面白いことになりそうな気がする。
・異動等で障害者アート支援から離れてしまっている職員が、個人的にTAMAP±〇に関われる仕組みもあるといい。
・異動等で企画メンバーの交代があっても、クオリティーが変わらずに運営に入っていける工夫も必要。
・内部の職員間の感性（アート支援への熱意など）の足並みを揃えていくことの難しさを感じる。

Ⅱ 活動報告 3
商品でつなぐ
TAMAP±〇支援力UPプログラム
商品化研修
→グッズ展 ＋ ライブパフォーマンス×5＆
ワークショップ×2

TAMAP±〇支援力UPプログラム
商品化研修→グッズ展+ライブパフォーマンス×5&ワークショップ×2

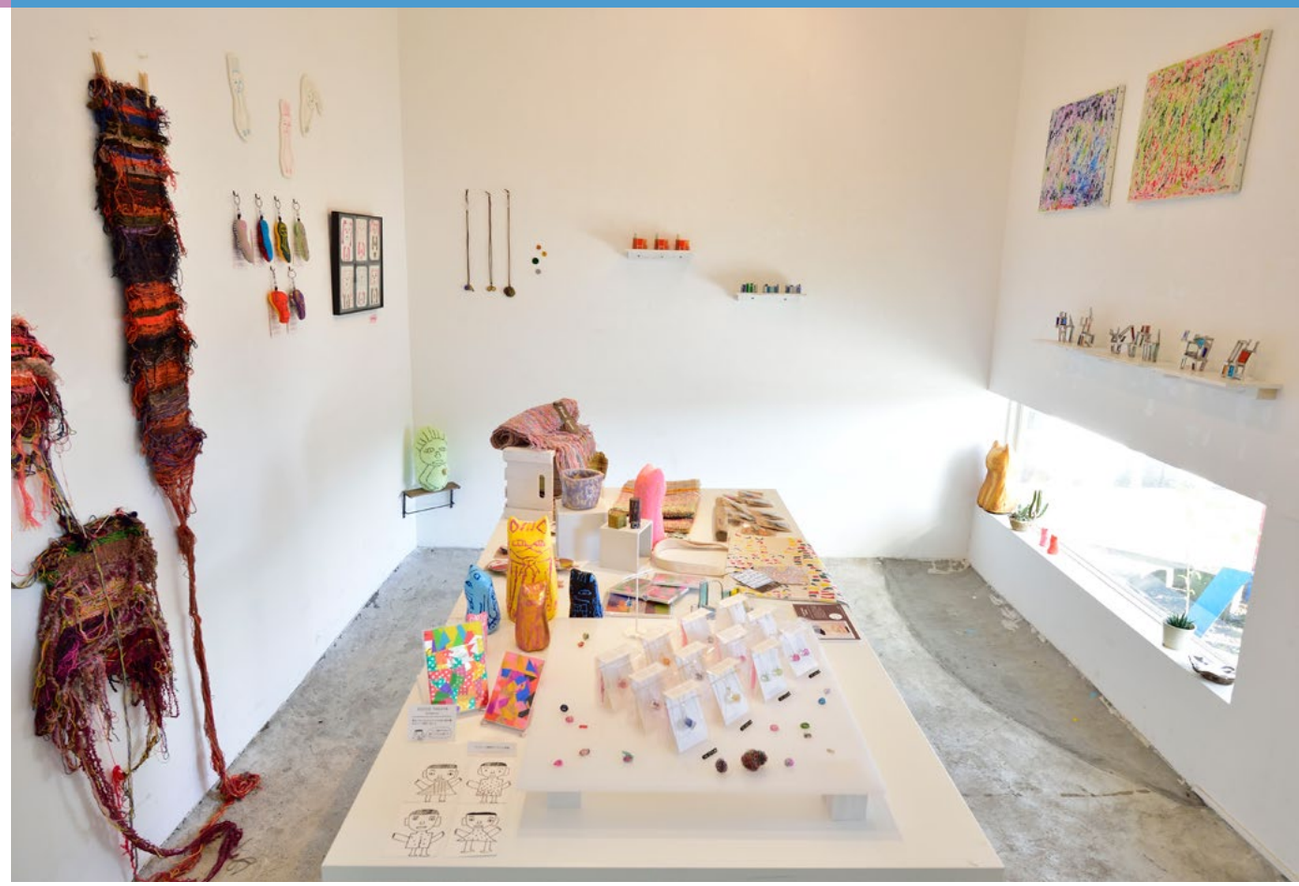
何のための商品化?

― みんなで考え、表現の魅力を出会いに ―

商品化は、表現活動を仕事にするための一つの手段。しかし、表現には、お金には変えられない価値があり、その価値となる魅力を探り高めることが、表現活動を支援する上ではとても大切です。とかく売れる商品を作ることに囚われがちですが、「何のための商品化なのか」を常に考えることで、それぞれの魅力をもって社会に新たな価値観を創出するような力強い商品が生まれるのではないでしょうか。

TAMAP±〇の商品化プログラムでは、その意識化を一番の目的に研修を実施。5月から9月まで月1回、グッズ研修会を開き、施設等で商品化に取り組むメンバーが協力委員でもあるコーディネーターのcontio杉千種さんを交えて意見交換を重ね、各施設オリジナルのアートグッズを改良・開発しました。

そして11月、「UFU♥SAITAMA±〇ツグズムズ9」展を開催。商品の展示・販売のほか、作家のライブパフォーマンスやワークショップも行いました。



商品化研修

目的

- 「何のための商品化なのか」の意識化
- 施設オリジナルのアートグッズの開発及びクオリティーの向上
- グッズ展開（価格設定・流通・商品管理など）の知識を学ぶ

グッズ展に向け、毎月の定例会にあわせグッズ研修会を実施。展示・販売もTAMAP±〇のメンバーが協働で行いました。商品の課題は、研修会で解決するのではなく、意見やアイデアと共に各施設等へ持ち帰り、周囲を巻き込み試行錯誤。また、研修会では、支援環境の悩みなども語り合い、各現場の意識改革にもつながる〝支援力アップ〟を目指しました。

【企画会議　メンバー構成】
研修生　TAMAP±〇メンバー22名
アートセンター集スタッフ4名
アドバイザー　コーディネーター1名

STEP 1 グッズ研修会

各施設等の商品や作品を持ち寄り、作家の特徴や創作の様子、商品の意図や課題などをプレゼン。

POINT 作家それぞれの表現の魅力を様々な視点から考察

みんなで商品の魅力を語り合い、魅力の生かし方、どこを改善したらいいかなど、アイデアを出し合い検討。

どんな表現を、どんなカタチで、
どんな人に、どこで、いくらで…

デザイン、素材、大きさ、配置、色、
パッケージ、ネーミング、説明書き…

POINT 個々の利用者に合わせた創作やモノづくりの支援の工夫など各自が現場で培った知恵を交換

POINT 表現活動の支援体制や活動への理解など現場での悩み・課題も相談・共有

ステップ1と2を
何度も繰り返す

STEP 2 それぞれの施設

研修会で得た課題やアドバイス、知恵を施設内で共有。試行錯誤を重ね、より表現の魅力を生かしたグッズを試作・制作。

POINT 商品化と共に各施設へ表現活動の意義、「何のための商品化なのか」などの意識も浸透

5回のグッズ研修会と施設での試作を繰り返し
オリジナルアートグッズを改良・開発

columnアートの芽③

まず、著作権を学ぼう

弁護士　岩本憲武（モッキンバード法律事務所）

著作者の権利には、「著作者人格権」と「著作（財産）権」の2種類があり、障害者のアート作品をグッズ化する際などには、後者が問題になります。これらの権利は、作品を創作したこと自体によって著作者に生じるので、登録などの手続は必要ありません。

著作（財産）権は、物としての作品の所有権とは別に譲渡が可能であるため、著作（財産）権を他人に譲渡すると、たとえ著作者でも作品を自由に利用できなくなります。そこで、著作（財産）権は譲渡せず、著作物の利用を他人に許諾するという方法がありますが、その場合も、契約書を作成し、事前に弁護士などのチェックを受けて、著作物に対する障害者の権利が不当に侵害されないようにすることが重要です。

TAMAP ±〇の定例会では11月、障害者アートマネージメントセミナープレ企画「著作権はコワくない！」を開催。メンバーなど14名が、岩本先生から著作権について学びました。

開発・改良のポイント

Point.1

何のために作るのか 商品の価値について考える

課題:「おれんじ」では、カレンダーを職員が手作りで制作。「もっと、ちゃんとした商品にしたい」。

↓

何のために作るのか、誰に届けたいのか、どのように使ってほしいか…まずは、目的をしっかり持つことが大事!その目的により構成やデザイン、価格設定、部数が異なること。また、予算や時間などの制約の中でどこまで作れるのか、作ることで表現の魅力は生かされているか…商品化の意義やその価値を考えることが大切!

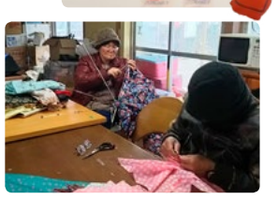
Point.2

表現の何が魅力なのかはもちろん 施設のカラーや強みも考える

課題:「ひだまり」では、窪山さんが描くユニークなイラストの一部をキャラクターとして刺繍した、クッションストラップや人形を制作。でも、布の素材感や縫製がイマイチ。

↓

刺繍からステンシルプリントに変更。施設のリサイクル作業で出る「傘布」を活用したことで、色のレパートリーが増え、よりチャーミングなグッズに生まれ変わった。



Point.3

都度、何が大切かを考えるを考える

課題:「わかくさ」では、ノートのパッケージに各作家のプロフィールカードを添付。「文字数や大きさなどを見直したい」。

↓

表紙の絵を生かすことを第一に考え半透明の紙に変えテキストを整理。

Point.4

施設のつながりをどう活かすかも考える

「いもの子」の技術（木工・印刷）を活かして「工房集」とのコラボ商品を開発。

↓

いもの子で制作する木製絵葉書（風景画）とは趣が異なる抽象画を採用したことで、スタイリッシュなグッズになり加工した木工班も感激!

columnアートの芽②

障害や福祉を魅力に

コーディネーター　杉千種（con*tio）

まだまだ障害のある人たちと同じ街に暮らしていると実感される場面が多くない中、授産製品の販売所は彼らを知ってもらう数少ないチャンスです。もしそこで見かけた商品がいまいちで、その印象が作り手たちのイメージとなってしまったらもったいないなぁと思います。

また、日々臨機応変に対応する福祉の仕事は、とてもクリエイティブです。個人を尊重し合って受け入れ、お互いに成長していける環境を目指すというような、支援の現場で大事にされていることは、広く現代において注目され求められるようになってきているのではないでしょうか。

何のための商品なのか、誰に何を伝えたいのか。これらを思考しつづけることできっと、福祉施設だからこその魅力がある商品、さらには社会へ未来を提案していく商品だって生まれてくるはずです。

施設のモノづくりの現場も、また商品の魅力にも、スタッフ、メンバー、家族、地域の人、遠くのお客さん、どんどん巻き込まれる人が増えていったら良いなと思っています。

UFU♥SAITAMA±0 ツグズムズ9展

— 作家とつながる“出会い”がいっぱい! —

2016.11/1～11/13 @川口市・工房集

表現を仕事として社会に広げる手段は、商品を作ることだけではありません。商品を作ることだけではありません。商品が、作家と人をつなぐ道具だとすれば、その展示・販売は、作家と人を結ぶ「出会いの場」。商品と共に表現の魅力を伝える機会を作ることも、表現を生かす大切な支援です。

そこでグッズ研修の一環として開いた「UFU♥SAITAMA±0 ツグズムズ9」展では、商品の展示・販売に加え、5人の作家によるライブパフォーマンスと2人のステンドグラス作家によるワークショップも開催。また、一部の原画や織物の作品なども展示しました。

研修で改良・開発した商品をはじめ15団体約323アイテムの個性的な商品が一堂に会し、活気ある展覧会になりました。来場者の感想は →P73

工房集を会場に、コーディネーターのアドバイスのもと、壁や棚のほか天井や窓辺にも商品一点一点の「顔」が見えるように展示。クスッと笑えたりホッとできたり…心に響く多彩な個性が主張しながらも調和して、明るく温かなパワーあふれる空間に。

来場者数 720人

出展商品 323種（15団体）
（アトリエ見学ツアー 20名、カフェ利用 262人）

ライブパフォーマンス&ワークショップ

より広く、笑顔あふれる

出会い交わり、未来をつくる

グッズ展で開催した作家のライブパフォーマンスは、ただ作品を制作する様子を見せるイベントではありません。参加者と対話しながら即興で作品を生み出す、ちょっとレベルの高いパフォーマンスです。

今回、5人の作家が、参加者との会話からインスピレーションを得て、絵を描いたり、言葉をしたためたり、漫画を創作したりと、出会いによる表現を披露。来場者も一緒に作家と参加者とのやりとりを楽しみ、笑顔あふれるイベントになりました。初めは緊張していた初挑戦の作家も、参加者と会話を重ね、次第にリラックスする姿が見られました。

また、ワークショップでは、ベテランのステンドグラス作家2人が指導。元気な子どもたちも夢中で色とりどりのパーツを組み合わせ、フォトフレームなどを制作しました。

作家 LIVE episode 2

ぼやきと詩のバトル!?

県内の障害者施設に通う岡崎龍馬さん。最初に見に来たキックオフ展では、アーティストトークで率直な感想を伝え場を盛り上げてくれた。そして今回は、なんとライブパフォーマンスに参戦!「あなたのことをぼやいてみせましょう」と看板を掲げる金子隆夫さんに自作の詩で先制攻撃!一瞬、怯んだ金子さんだが、さすがライブのベテラン。いつもの調子でぼやき返し!突然の白熱したバトルに、また場が盛り上がった。タイプの違う2人だが、想いを綴り伝え合い、とっても楽しそう。

＊後日届いたメッセージ＊

そこは生きた情熱工房だった。皆が創りたくて作っている所。互いに意識しているようないないような不思議な共有空間。私は「工房集」で自由な熱気、悩んだからこそ生まれた個性の翼に触れ、こんな生き方もあるのだと知った。あの笑顔には今までに出会った優しさが表れていた。
「人の色　心くすぐる　美しさ」　岡崎龍馬

5人のアーティストが対話から作品を創作!

「僕がひとつ、あなたのことをぼやいてみせましょう」

工房集　金子隆夫さん

心に沁みる“ぼやき”で大人気!

早いもので、もう12回目を迎えたライブパフォーマンスで、毎回緊張するけど、わざわざ来てくださっているのだからがんばらなくてはと思っています。その相手のことを色々聞いて、その人にあった内容を聞くようにしています。色々な出会いがあって、僕も今まで色々な事があったけど、まだまだ色々な人がいるんだなあと驚くこともあります。毎日書いていた日記がこんなことになるなんて思ってもいなかった。でもやるからには「全国制覇」をめざして毎日コツコツ頑張っていくつもりです。

会話からサッと人柄を捉えた言葉を綴り、似顔絵を描いて“ぼやき”作品完成!

ユーモアと思いやりと含蓄ある言葉が詰まった“ぼやき集”『生きるための名言集』が好評。現在6冊。トートバックは新商品。

11月3日（木・祝）13-15時　参加費1,000円　参加者 6名

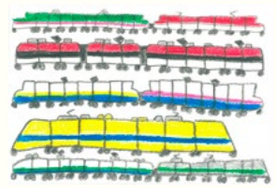
「電車大好き！描いちゃいます」

おれんじ　中村愛之助さん

初ライブながら大盛況!

小さい頃からずっと描いていた電車の絵。この絵が人と人の出会いをつくってくれたことに感謝の気持ちです。自閉症ですが、人が好きな息子の世界が広がるように思いました。最近語彙が増えてきています。今回参加させていただき刺激になったようです。（母）

お客さんに選んでもらった色画用紙に
大好きな電車を描くライブペイントを披露!



11月3日（木・祝）13-15時　参加費500円　参加者8名

「レインボーコミカルライブ」

工房集　関翔平さん

あなたの似顔絵が、漫画に登場します!

今回で2回目となる、レインボーコミカルライブ。なんと今回は、お客さんが7名来たのでそれぞれ特徴が違うキャラクターを7人描いてみました。会話を聞きながら描くのが、とても楽しかったです。自分が書いたキャラクターは次回作以降の漫画で登場するかもしれないので、楽しみにしてください！レインボーフレンズは新作の10巻が発売中です。

会話からお客さんのオリジナルキャラクターを創作。
特徴を捉えたキャラが大評判!

人気のギャグストーリー漫画

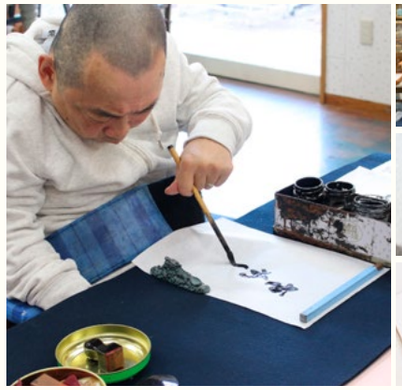
11月5日（土）13-15時　参加費1,000円　参加者7名

「あっぱれ人生！」

工房集　関口忠司さん

素直な言葉を筆に乗せて

日頃からなんとなく耳に残る言葉や身近な人の口癖、ひらめきや思いつきのことばを自分の中に溜めています。ひとたび筆を持てば人当たりのいい笑顔が真剣な表情に変わり、心温まる言葉から何かを考えさせられるような深い言葉まで、力いっぱい書かれたくせのある字で表現してくれます。イベントでは、お客さんとの会話の中からイメージを膨らませます。思わず微笑む言葉のチョイスと関口ワールドの一片をお客さんにも感じてもらえたと思います。（スタッフ）



手にこもる力は気持ちのあらわれ。
作品が完成するのが待ち遠しい。

「カクテル」「リアルタイム」などの
作品集が人気!

11月13日（日）14-16時　参加費1,000円　参加者7名

「誰もがみんなヒゲめがね」

わっくす　ヤマダジュンヤさん

ポップでユニークな似顔絵バックが好評!

リラックスしている表情を描きたい。「来てよかった」と思ってもらえる時間にしたい。そうしながら自分のトークの腕も磨かれて、絵も進化していくのだと思う。

すべての人を「ひげメガネ化」してしまう似顔絵は、もともとこだわって描いていたモチーフをパフォーマンスに活かしたもの。トートバックやスリッポン（布靴）に手描きした「ひげメガネおやじ」グッズは、彼の定番作品。

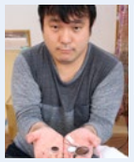
11月12日（土）13-15時　参加費1,000円　参加者5名

2人のステンドグラス作家が子どもたちに制作を伝授!

ステンドグラスのフォトフレームを作ろう!

工房集　長谷川昌彦さん　三羽勇二さん

ステンドグラスの制作過程で出た端材を使って透明なガラスの周りに好きな色・形のガラスを組み合わせてフォトフレームを作りました。普段はアクセサリー作りをしている長谷川さんとランプや小物を作っている三羽さんのベテラン2人が、細かい工程を実演と共に丁寧に教えていました。



正円に削りだされた「ガラスコイン」と呼ぶ長谷川さんの作品を活かし、アクセサリー作家とのコラボ作品も。

切り方や形に個性が出るステンドグラス。2人の指導のもとカラフルなパーツを組み合わせて作品を制作。

11月6日（日）13-16時　参加費3,000円　参加者5名

商品化研修　TAMAP±0メンバー感想

■商品化研修による気づき

・商品を良くするには周囲ととことん意見を交わすことが大事。

・1回出来たら完了ではなく、ベストは何かを定期的に話し合う場を設ける。

・関係者の力量・熱量次第で商品は良くも悪くもなる。

・どんなものを作り、どこで、誰に売るのかを考えることの大切さ。作る過程で商品価値を見出すこと。

・特定の職員だけでモノづくりを考えるのではなく、施設の職員全員でモノづくりを考えることが大切。

・商品は名前やパッケージなど細やかなところまで考える必要がある。

・障害のある人が作っているという事の意義について考えることができた。

■グッズ研修会について

・定期的に開催された会議のおかげで常に意識を高いところにおけた。

・必ず一部を改良して会議に出るという目標を掲げていたため、商品を検討する機会を頻繁につくれた。

・さまざまな意見・アドバイスを受けることで、自分に欠けていた視点や新たなアイデアに気づかされた。

・参考になる意見をもらい、施設間で課題を共有することで、視野が広げられた。

・他施設の取り組みの姿勢に刺激を受けることも多く、モチベーションがアップした。

・商品の見せ方の、具体的なアドバイスがもらえたので、実践しやすかった。

・商品化の照準を考える機会を得て、作家の持ち味を活かしたモノがどう形になるのかを、自分なりに確信できた。

・懸命に取り組んだことで商品に愛着がうまれ、広報活動にも意欲が湧いた。

・話し合われたことを共有し合うことで、利用者も間接的にではあるが参加することができた。

・客観的な意見を取り入れることで、取り組み内容を整理しやすくなった。

・施設外に仲間との関係を築くことで、当事者を主役としたアート活動の方向性や意味について考える機会も増えた。

■グッズ展による気づきや変化

・全く知らない人が純粋に作品を気に入り手に取ってくれるのを見た時、本当にうれしく感動した。今までは、売れる事、収益ばかりを考えがちだったが、本当に商品を気に入って買ってもらう幸せな気持ちを体験し、自分が作品・商品をより大切に扱うようになった。

・TAMAP±0メンバーの後押しで、売れるかもという期待を持てるようになり、他職員や作家に製作協力を依頼でき、売れたことを、関わった人たち全体で喜べた。

・作者が会場に足を運び、周りから声をかけてもらえたことで、普段あまりみられない笑顔で写真に写っていた。

・アートグッズとして製品が売れていくことを知り、製作者の意識も変化した。

・他部署職員にも見学ツアーを組んでもらい、興味を持ってもらえた。

・理事長や施設長も展示会に足を運び、商品を購入していた。

・これまで取り組んだことがない事でも、やればできると職員が感じはじめた。

・商品が売れて実績になった。

■今後の課題・展望

・今後も利益ばかり追求して作者を置いていくことのないようともに進めていきたい。

・制作できる量、職員による作業負担、販売できる数などを考慮して、無理なく続けていきたい。

・価格設定の見直しや作家が関われるワークショップ、ギフトの提案などをしていきたい。

・売れる商品を開発して当事者に還元するためというスタンスにとどまらず、当事者にとってより意味のある活動に大きく広がることを期待している。

・自分の施設のためばかりを考えるのでもなく、新たな参加者にバトンを渡すような気持ちで参加していきたい。

・どうやって他の職員も巻き込んでいくかを考えていきたい。

Ⅱ 活動報告 4
社会に問う

支援者育成公開プログラム
第7回埼玉県障害者アート企画展 関連イベント
障害者アートマネージメントセミナー

第7回埼玉県障害者アート企画展 関連イベント

障害者アートマネージメントセミナー

「障害者アートの可能性について」

○日程:12月10日（土）10:00〜17:00
○会場:埼玉県立近代美術館講堂　○参加費:無料　○参加者:103名

〈プログラム〉

1.オリエンテーション

2.基調講演「豊かに生きる・幸せに生きるを考える」

松本哲（社会福祉法人みぬま福祉会川口太陽の家施設長）

詳細は→P56

3.各論①「福祉施設がつくる商品とは」

杉千種・山口里佳（con*tio）

商品開発の支援をしているコンティオが、ユニークな先進事例をあげながら、
福祉商品の魅力や意義、可能性について話しました。

4.各論②「著作権はコワくない!」

岩本憲武（弁護士／モッキンバード法律事務所）

障害者アートの権利に関する基礎知識、権利を守り
創作活動を支える方法ついて話しました。

5.TAMAP±〇活動紹介「埼玉県内の施設間のつながり、広がり、深まり」

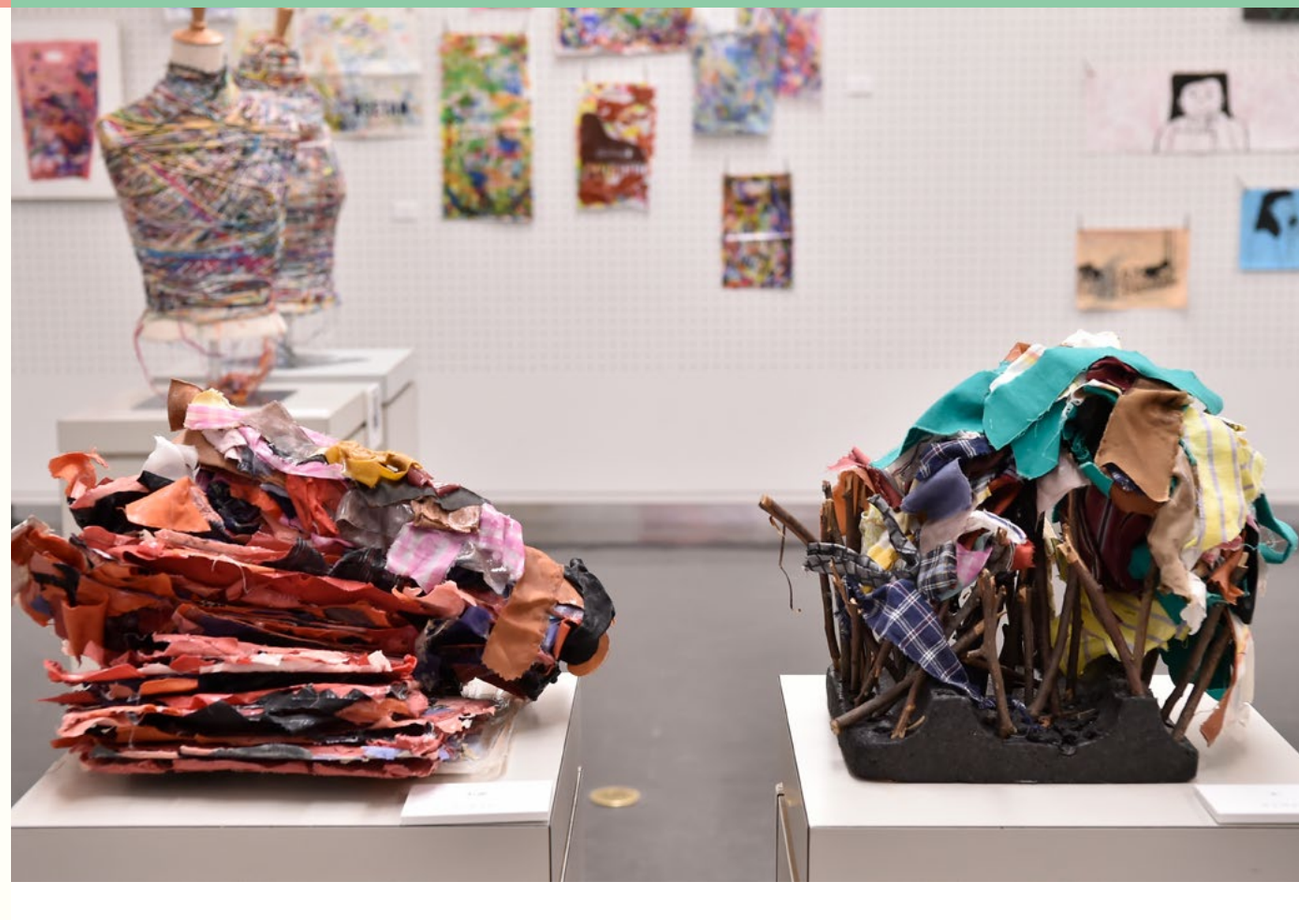
石平裕一（NPO法人カウント5代表）
野本翔平（NPO法人CILひこうせんスタッフ）
豊田亜紀（多機能型事業所わっくすスタッフ）
蒲生侑希（工房集スタッフ）

埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±〇の立ち上げや
活動についてメンバーが実践者の立場で話しました。

6.ディスカッション「アートの本質とは?」

前山裕司（埼玉県立近代美術館学芸員）
小澤基弘（画家、埼玉大学教育学部教授）
酒井道久（彫刻家、元埼玉県立大学教授）
中津川浩章（美術家、アートディレクター）

詳細は→P50



支援者育成公開プログラム

第7回埼玉県障害者アート企画展 関連イベント

障害者アートマネージメントセミナー

さらに広く、変化をチカラに

― みんなで障害者アートの未来を考える ―

平成21年に始まった「埼玉県障害者アート企画展」では、福祉施設職員等が運営に携わりながら学ぶ実践的な人材育成に加え、関連イベントとしてアートマネージメントのセミナーを開き、県内の多くの福祉施設職員等と「障害者アート」に関する知識や課題を共有してきました。

埼玉県から主催を移して開催した今年度は、福祉、芸術、教育、法律、商品コンサルティングなど多分野の協力委員に登壇してもらい、表現活動を支援・普及するための視点、著作権の知識、商品化の先進事例などを学び、さらに美術の専門家によるディスカッションなどを通して「障害者アートの可能性」について考えました。また、TAMAP±〇のメンバーがネットワークの活動報告も行いました。

福祉以外の教育、アート、行政、企業などからも関心のある人々が集い、表現活動をする作家の参加もありました。一日、座学のみのプログラムでしたが、最後まで真剣に聴き入る参加者の姿が印象的でした。

障害者の表現と出合いそれぞれの立場から表現活動の支援や普及に関わり続けている美術の専門家4人が、「障害者の表現の魅力とは何か」、「アートの本質とは何か」、さらに、埼玉県独自の支援活動やその可能性について、時に脱線しながら熱く語り合いました。

前山裕司（埼玉県立近代美術館学芸員、美術評論家）

1981 年筑波大学大学院博士課程中退。準備室から埼玉県立近代美術館に勤務。同館で「動きの表現」(1988 年)、「風刺の毒」(1992 年)、「やわらかく重く一現代日本美術の場と空間」(1995 年)、「トルコ美術の現在　どこに？ここに？」(2003 年)、「ロシアの夢 1917-1937」(2009 年)、「日本の 70 年代 1968-1982」(2012 年) などの展覧会を企画。また、ブダペストとモスクワを巡回した「心の在り処」(2003-04 年) をキュレーション。2009 年「障害者アートフェスティバル」実行委員を務めて以降、今年度まで「埼玉県障害者アート企画展」に携わり、また、2012 年「アール・ブリュット・ジャポネ展」を、2015 年には埼玉、札幌、高知、福山を巡回した障害者アートの展覧会「すごいぞ、これは！」を企画。2016 年、国立新美術館で開催した展覧会「ここから―アート・デザイン・障害を考える 3 日間」を全体監修した。

小澤基弘（画家、埼玉大学教育学部教授、東京学芸大学大学院教授）

専門は絵画及び美術教育で芸術学博士。約 30 年間にわたり、個展やコンクールを中心に制作発表をしてきている。また、『絵画の教科書』等、著作も数多く刊行し、絵画を中心とした理論研究も行ってきた。近年は、絵画の制作者としての経験を踏まえながら、学校教育における図工・美術教育の研究も同時に行っている。「ドローイング（主観的・表現主義的素描）」を制作の主たる手立てとし、大学教育においてもドローイングを積極的に導入し、ドローイング制作と対話を通して、学生それぞれが自らの表現の核心を主体的に探る教育を心がけている。こうした教育実践から、人間の表現の根源に関わる障害者アートの可能性に近年は着眼し、その領域の研究も始めたところである。

酒井道久（彫刻家、元埼玉県立大学社会福祉子ども学科教授）

東京藝術大学大学院修了。新具象彫刻展（東京都美術館）創立に参加。国際交流展「センツァ・フロンティエーレ展」、「彫超兆　彫刻 8 人展」、その他、個展、グループ展などを行ってきた。また、埼玉県立衛生短大、埼玉県立大学社会福祉学科で美術関連教養科目、保育関連科目を担当し、障害者アートの研究指導（ゼミ、卒業研究）や、不登校児童と家族のためのアートプログラム、若年性認知症の患者と家族のためのアートセラピー（科研、学内奨励研究）などに携わってきた。彫刻家としての主な作品：大島小学校創立 50 周年記念「まだ見せない宝物」、千駄ヶ谷小学校創立 120 周年記念「大発見」、「中西悟堂像（日本野鳥の会）」（軽井沢ホシノ、野鳥の森）、伊能測量 200 年記念「伊能忠敬像」（富岡八幡宮、江東区）など。

中津川浩章（画家、美術家、アートディレクター）

記憶・痕跡・欠損をテーマに自ら多くの作品を制作し国内外で個展やライブペインティングを行う一方、アートディレクターとして障害者のためのアートスタジオディレクションや展覧会の企画・プロデュース、キュレーションを手がける。「できないことからつながる社会」を目指して福祉、教育、医療と多様な分野で社会とアートの関係性を問い直す活動に取り組む。障害者、支援者、子どもから大人まであらゆる人を対象にアート WS や講演活動を全国で行っている。2012 ～ 14 及び 2016「埼玉県障害者アート企画展」、2016「ビッグ・アイアートプロジェクト」(国際障害者交流センター)、社会福祉法人みぬま福祉会・工房集ほかのアートディレクションや、川崎市岡本太郎美術館「岡本太郎とアール・ブリュット」展のキュレーションに携わる。NPO 法人エイブル・アート・ジャパン理事、NPO 法人アール・ド・ヴィーヴル理事、一般社団法人 Get in touch 理事。

彼らの〝知性〟が美術教育を変える

中津川　それぞれアートの側面から障害者の表現と関わってきた中で、自身の価値観などに変化はありましたか。

酒井　私は、大学で教えていた頃、実習で保育を学ぶ学生を連れて表現活動をしている福祉施設を訪れ、障害者アートに関わるようになりましたが、私個人は、それとはいわば対極のアカデミック教育をみっちり受けた作家です。創作活動を続ける中でいつも、障害者アートをうらやましく思って見てきました。彼らは、教育を受けた者にはなかなか使えない色を使って表現しますよね。色の取り合わせとか、こだわり方とか…、本当にうらやましい。ジェラシーを感じるくらいです。実際、盗んだりしたこともありますが、あのようにはいかず、いつも悔しく思っています。

小澤　私は、埼玉県の支援事業「障害者人材育成資金」（平成20年度より美術、学術など5分野の発表活動を補助）の審査委員をしていた時に、毎年、すごい作品を出す団体があり、5年目に知りたい衝動が止められず訪ねたのが工房集でした。そこで一番驚いたのは、重度の障害のある方々が一様にいい作品を作っていること。そして、今日の展覧会を見ても、表現の強さに打ちのめされますよね。どの作品にも強度がある。一方、大学の学生は、あれだけの強度のある表現ができない。どっぷり美術教育を受けているのに、いったい美術教育とは何なのか、必要なのか、考えさせられます。美術教育をほとんど受けていない人たちの作品は、ユニークで強烈で、しかも造形的にバランスがとれ、知的ですばらしい。造形力が知性だとすれば、すべての展示作品に知性がある。

中津川　障害者の作品を語る時、「内面的なエネルギー」とか「原始のチカラ」といった紋切り型の言葉で本能のまま描き客観性はないように評されることが多く、なかなか〝知的〟という言葉は聞きませんが、小澤さんは、ドローイング論の著書で、彼らの作品には〝止めどころ〟があり本質的なところに客観性や知性があると論じていますね。

小澤　作品、特に抽象的な絵画は「筆をどこで止めるか」だといわれますが、それを判断するのは知性。それと同様に、彼らの作品も自己省察であり、内的に何かが起きて止めている。つまり、それが知性。アートがそれを健在化させているのです。障害者のアートを知ることで、その人間に秘められた何か新しい知性が暴ける。彼らの作品と出合い、そういったことを研究して教育に還元したいと思うようになりました。

従来の美術と彼らのアートの相違点

前山　私は、2009年の「埼玉県障害者アート企画展」以降、「アール・ブリュット・ジャポネ」「すごいぞ、これは!」など障害者アートの展覧会を開催し、その作品選考もしてきましたが、作品を選ぶ基準には、基本的に現代美術と障害者の変わりはないと思っています。私の世代は「作品を作者から切り離せ」と教育を受けたので、どんな作品でも基本、作家は二の次です。学芸員は、作家に深入りせず、一旦、冷めた目で作品を見る。一方、福祉の方々は、作家が発想の基本にある。ところが、私もやってみてわかったことですが、良かれ悪かれ作家や家族や施設の人たちと関わってしまう。その人たちの人生に踏み込んでしまうと感じました。それが自分の変化でもあり、違いを感じたところです。大抵は喜ばれ、「家族の作家を見る目が変わった」などと聞くと私もすごくうれしい。けれど、いいことばかりではないかもしれない、という思いもあります。

中津川　障害のある作家がニュートラルな状態で創作できるよう、ほめたりもしないアトリエもありますが、支援する立場では、どうしても人生に踏み込んでしまう。特に、表現を自分で社会化できない作家の場合、施設の哲学などで作品の方向性も変わってくる。どこまで関わっていいか、みなさん距離を試しながら、役割を模索していると思います。

酒井　作品選考で「作品と作家を切り離す」という点については、私もそう思っています。なるべく作家の背景を知らずに作品を見た方がい

い。が、知らないと判断を誤ることもある。今回の出展作の一つ、写実的な汽車の風景画を学生たちと見た時、「この人どこが障害なんだろう」「写真を見て描いたに違いない」と話していたのですが、後で実は、記憶で描いていると聞き驚きました。知っていたら、見方が変わっていたかもしれません。

前山　「すごいぞ、これは!」展で、「作家が見えた方がおもしろい」「制作中の映像も流すとよりおもしろい」という意見が出た。「作品と作家を切る」に反するというか、そこが通常のアートと違うところかなと思います。私は障害の程度は、解説にも特に入れなくていいと思っていますが、どのように制作したのか、現場の雰囲気みたいなことは、出した方が、理解も共感も深まるのでは、という気がしています。

酒井　制作の様子は私もみたい。ただ、反論ではありませんが、その点は、健常者の作家についても同じです。ピカソの制作風景のビデオなんかは、本当におもしろいですよ。

「障害者アート」の枠は過渡期のあらわれ

中津川　先程の酒井さんの「彼らがうらやましい」といった話は、小澤さんの「新しい知性の発掘」にもつながりますよね。僕も長年、彼らの表現に関わってきて、記憶や光を感じる力が優れていたり、色の感覚がとても豊かだったり、例えば聴覚が過敏で生き辛さはあっても僕らと違う感覚の広がりを持ち、いざ、表現するとそれが強度のある作品になる。しかし、そういった側面で、やっぱり「障害者アート」と区別されてしまう。別に、全部が「アート」でいいと思うのですが、まだまだ、住み分けがありますよね。その点については、どうお考えですか。

前山　この用語の問題を、会議で話していると、それだけで終わってしまうくらい、立場でいろんな考え方があり、主張も違う。私の考えでは、アート全般、グルーピングしない方がいい。ただ、「～派」とつけた方が、美術の世界で突破力が出る、と話す作家たちもいます。それにより、歴史化もしやすい。つまり、グルーピングすることの利点もある。が、弊害も多い。すべて何の境界もない状態で展開するのが理想で、そうありたい。しかし、現状では、過渡期かなと思います。グルーピングして物事を考えた方が、考えやすく、美術関係者の中には、そうしないと考えられない人もいます。

誰もが根っこに輝きを秘めている

小澤　私も同じで「障害者アート」というべきではないと思う。スポーツでは、明らかにハンディーキャップがあるが、アートには、ありません。表現に関しては、たぶん健常者も障害者も根っこは一緒。その中で、振り切れているのが、障害者の表現だと思っています。私は高校の時、脅迫神経症で一年休学し、その治療の一環で絵を描かされ、絵かきになった。施設で毎日、同じ絵ばかり描いている人がいると聞きましたが、私も毎日、同じ絵を描いています。その私の動機と障害者の動機とは、とても重なる。どこに障害者の線を引くのか。恐らく、違って見えても同じ地平で、連なっているから区別する必要はない。きっとみなさんにも、彼ら同様、根っこにはキラキラ輝く何かがある。しかし、慣習とか規制とか教育などによりフタをされ、出てこられない。が、フタを外せば、スポンッと出てくる。それを出てこられるようにするのが、教育なのかなと思っています。美術教育が必要だとすれば、それがわかる人間、その地平まで下りていける人間を、育てることだと思います。

彼らの表現に人間の本質がある

中津川　毎日描いている障害のある人は多いです。それを考えると、それだけ集中力があり、その反復の中から、ポンッと飛び出したり、反転したりして、おもしろい作品が生まれてくるのかもしれません。そこに、実は知性みたいな何かが働いている。言語化できない言葉（思考・意思）や、芸術の大切なコンテンツが入り込んでいる。

小澤　私は、それに気づいてから授業では、毎日ドローイングをさせています。主観的素描、いわば落書きです。それを見ながら一週間に一度、全員でぼんやり話をする。すると、自覚が芽生え、表現も本人も変わります。

前山　そういえば昔、ある現代アート作家のワークショップで、わら半紙の束にとにかく、苦しくても描き続けると、最後に本当の興味の部分が出てくる、と教わりました。

小澤　量の集積は質の変化を生む。これは、真実です。たくさん描けば、質が変わる。ルーティーンワークでもいいから描く。するとある時、突然、変わります。不思議なくらい。学生、ほとんどそうです。描けない人も描けるようになる。表現教育とは、そういうもの。それは、落書きでいい。

中津川　障害のある人たちの表現には、かなり本質的なものがありますね。自閉症の人など、緑の植物を描くのに、最初からいろんな色を使う人も多い。美術教育では、これを印象派の技法として学びますが、彼らは、そんな方法論を知らなくても、本能的にできる。きっと彼らには、そう見えている。そう感じているのだと、思います。聴覚が過敏な子が、「朝からミミズの声がうるさい」といったりするのは、きっと何か僕らと違う知覚があるから。僕らよりきっと何倍も世界の現象に過敏で、それがアートに転じた時、すごい表現になる。じゃあ、それが僕らとまったく切り離されているかというと、そうでもない。自分たちの中にも、その要素がある。それを押さえつけ、まともな人間に近づけて、暮らしたり表現したりしている。そう考えると、やっぱり同じ。しかし、まだまだ「障害者アート」として区別される。この矛盾は、やっぱり過渡期。これから変わって行くのでしょう。

それを踏まえ、現時点での「障害者アート」の課題や展望について、何かありますか。

「障害者アート」を広げる危うさ

酒井　今の「障害者アート」の現状（課題）として一つ気になるのは、施設の職員が手を持って描かせるような作品も含まれてしまうこと。それは、本人の意欲にも喜びにもつながるかもしれない。けれど、それを含めて「障害者アート」としていいのか。それは、機能回復や家族の喜びのためではないのか。作品は、作家の意図や意欲があったものとするなど、最低ラインを考えていくことも、必要ではないかと思う。

中津川　「障害者アート」が、過大評価されているところもある。

酒井　すべて素晴らしいというのは、違う。例えば、時々「子どもの絵は純粋だ」など、ほめちぎる人がいるが、5歳位になると、人の目を気にしてうまく描こうとする。結構、あざとい。それも含め、すべて純粋というのは、違う。すべての作品を、アートとして語るのは、違うと思います。

中津川　人が関係し合い、影響し合う中で、表現が変わったりする点も、障害者と健常者のベクトルは、ほとんど変わらない。違いはむしろ、障害者の表現には、「表現の本質的なものがある」「アートの原点がそこにある」という点。しかし、社会の事情で「障害者アート」とされ、「障害者アートはこういうもの」「だから促進しなければならない」といった固定観念から、さらに分断してしまう恐れもある。それにより、とんでもない誤解や偏見を広めてしまう危うさを、支援の活動でも考えていかないといけないと思います。

言語化できない表現がアートを開く

中津川　よく「どれがいい作品か」「作品の評価基準は」などと聞かれることがありますが、その点については、いかがでしょう。

前山　私の評価基準は、物欲を感じるか、自分が欲しいかどうか、です。美術館には、評価を文字に頼る専門家も多いが、自分の目でこれがおもしろい、きっとこの良さをわかる人がいる、という思いがあるから、作家の選定ができる気がします。

中津川　結局は、個人的な感覚判断に基づく。そこには、経験知があり、そのバイアスがかかって、作品を見分けられると思います。そして、アートは開かれているので、誰もが自分の感覚で見ていい。

酒井　先程、TAMAP±〇の活動報告で支援担当者が、「自分以外のスタッフはアートに興味がない」と悩んでいましたが、美術や芸術を理解するには、別に絵を描けなくてもいい。見て楽しめればいいと思います。福祉の学生には、「それで80%わかったことになる」と教えてきました。例えば朝、起きて化粧して、ネイルして、お弁当の色合いを考える。それもアート。だからもっと自信をもっていいと。前山さんが話されたように、「自分が、どうか」と考えれば、もっと作品の選定も支援も、楽になり、楽しいものになると思います。

中津川　美術の世界には批評言語というのがありますが、アール・ブリュットを研究する批評家が、彼らの作品は、「一般の美術の知識では語りきれない」「語りえないものがあるからおもしろい」といっていた。「欲しい」という志向も含め、一般の言語では、解説できない。かなり作品に入り込んで、そこに至る精神病理学や障害など、人間本来の特性を言語化する能力がないと、批評言語として成立しない。たぶんアートの世界では、そんなコンテキスト（文脈）で批評する時代は、終わりつつある。その点に肉薄しないと、アート全般がみんなのものにならないと思います。

未来のアートを育む埼玉を誇ろう!

中津川　この「埼玉県障害者アート企画展」をはじめ、「障害者アートフェスティバル」や小澤さんが審査委員をしていた「人材育成資金」など、世間のアール・ブリュットといった一つの流行とは違う文脈で、埼玉県では表現活動をサポートしてきた。それが、今回のモデル事業やTAMAP±〇にもつながっています。最後に、この埼玉独自の取り組みについて、意見や展望などがあればお願いします。

小澤　取り組みは、すばらしい。が、それを掘り下げ、まとめ、発信することも、大事だと思います。障害者の特性と作品との相関など、大学がデータを集め、現場へフィードバックする。そんな地道な啓蒙活動も、必要だと思います。そういった連携のためにも、私がTAMAP±〇に加わりたい。もっと私たちを、利用してほしい。

前山　TAMAP±〇の活動報告で、「埼玉は自慢が下手」という話がありましたが、「自分たちの活動は素晴らしい」と自覚する能力も、埼玉県民は、少し足りないのかもしれません。全国から評価を得ていても、「埼玉県の取り組みは実はすごい!」と、自分たちで適正評価できていない。毎年、県が続けている「表現活動調査票」など、非常に貴重な情報です。が、その価値がわからなければ、使用済みの紙切れとして処分されてしまうかもしれない。過去の調査票もぜひ、大切に保管し続け、今後に活かしてほしいと思います。

中津川　この展覧会の初期の段階では、「表現活動調査票」を基に、気になる表現について作品にして、展覧会を作ってきました。今、全国各地で障害者のアート展が開催されていますが、ほとんど作品は応募です。それ自体に問題はありませんが、いかにもアートっぽい作品が多くなります。施設職員や親が美術の知識があったりして、例えばアール・ブリュットがテーマだったりすると、それらしい作品に偏ることがある。支援者の裁量で作品が決まってしまう。その点、埼玉は、調査票なので、作品だかわからない、驚くような表現が出てくる。今回の出展作でいえば、ティッシュを微細に丸めた作品。あれは、「これがアート」と誰かが決めたのではなく、ここにいる美術の専門家とTAMAP±〇の福祉現場のメンバーが、一緒に選考会で考え、「やっぱり、何か心を揺さぶるものがある」「みんなに考えてもらおう」と出すことを決めた作品です。

　みなさんの中には、美術展の作品は、答えや回答だと思っている方もいるかもしれませんが、実は、いつも問い。世界に対する問いかけです。表現や、人間に対する問いかけとして存在している。そう考えると、僕らの想像を超えたものが、

彼らの表現の中にあり、埼玉はそれを、ちゃんと発掘しながらやっている。

　福祉とアート、そして教育も含め、異なる者がつながり、線になり、面になるような取り組みを、今後も広めて行きましょう。

■質疑応答

【質問1】レジュメの議題にあった「人間にとって表現とは?」についてお聞かせ下さい。

小澤　表現するとは、自分の内的なものの痕跡、それを残すことがだと思う。それによって自分を客観化でき、自己理解を深め、さらに促進されると思います。

酒井　表現を個性として置きかえたとすれば、個性とは、押さえつけても、押さえつけても、出てくるものと理解しています。

中津川　人はみな、障害や欠損、何か足りないことで表現する。そして、障害者の表現は、表現のデフォルト（初期段階）だと思う。仏の文学者、ジャン・ジュネが、彫刻家ジャコメッティについてのエッセイで、「美は傷口からしか生まれない」「その傷が美を生む根源である」と語るのを学生時代に読んで、これこそ本質的な言葉だと思いました。障害者の表現に出合った時、その言葉がよみがえり、自分の中にもそれがある。足りないものがあるから、埋めようとするし、分かってもらいたいし、見せたいと思う。それが、表現の根本だと思いました。

前山　その話で、アーティストたちが「私たちって、たとえ無人島に行っても何か作っているよね」といっていたのを思い出しました。誰かに見せるシステムがあろうがなかろうが、何か作らざるを得ない人たちが、やっぱりいる。それが、表現の原点だと思います。

【質問2】作品を出しています。「仕事として」頑張っていきたいと思い、作品を作ってきました。私や私たちみたいな作家は、今、仕事をしているとみていいのでしょうか?

中津川　仕事には、金銭的でない、自分としてのミッションもあると思う。それは、創作活動が、仕事として成立してない、という不安感があるということですか?

質問者　就職しないといけないのか、でも、やっぱり自分の作品を評価してもらいたいという気持ちとの、葛藤に駆られています。どうしたらいいか、考え中です。

前山　美術業界では、お金にならない仕事をしている人がたくさんいます。特にアーティストは、お金がかかるので、みんな人生の節目の度に悩んでいます。

中津川　その悩みは、普遍的なもの。就職してもしなくても、僕は構わないと思います。それでも、湧き上がってくるものがある。その中で、作品を作る営みを続け、成長していく。そして、それに伴う評価には、タイムラグがある。いい作品であっても評価は、10年後に追いつくこともある。あきらめずに続けてほしいです。

小澤　海外では、買う人がいるから作品が売れる。けれど日本人は、買わないから、作家が食えない。作品が売れるには、買う人を育てないといけない。ですから、みなさん、買いましょう!　飾って楽しみましょう。いいサイクルを作ることは、我々の責任でもある。

前山　80年代にあるアーティストの作品を3千円で買ったのですが、いまだに感謝されます。初めて売れた作品だったそうです。そんなこともあるので、みなさん買いましょう!

酒井　みなさんがおっしゃった通りです。私も創作活動を続けていますが、妻からはいまだに「趣味でしょ」といわれています。最後に、暗い話ですみません。

※掲載にあたり発言の一部を要約したり順番を入れ替えたりなどの編集を加えました。

障害者アートマネージメントセミナー「障害者アートの可能性について」1

基調講演

「豊かに生きる・幸せに生きるを考える」

松本哲（社会福祉法人みぬま福祉会「川口太陽の家」施設長）

大学卒業後、生活協同組合職員を経て 1983 年より神奈川県内の通所施設に勤務。1985 年、無認可作業所「太陽の家」を発足。翌年、知的障害者通所更生施設として認可された「川口太陽の家」の指導員を経て 1992 年、施設長に就任。現在は、法人の総合施設長、事務局長を兼務。また、障害の重い人たちの労働について取り組んできた経験を活かし、埼玉県発達障害福祉協会副会長・研修委員会委員長、埼玉県セルプセンター協議会理事、川口市自立支援協議会委員、川口特別支援学校学校評議員、越谷特別支援学校学校評議員、川口市障害者団体連絡協議会事務局長も務めている。

経済効率・成長至上主義の中、一人ひとりが地域社会や組織の中で細分化されてきました。
その結果、社会のシステムから外れる人は、「負け組」などといわれるようになりました。
表現活動を通して、豊かに生きること幸せに生きることを、あらためて考えていきます。

私は、美術が苦手でアートについては素人ですが、約40年の障害者福祉の実践と、その表現活動を通して、「川口太陽の家」に通う障害のある仲間や家族、さらに私自身がどう変わったか、お話ししたいと思います。

誰もが働く権利がある

現在、工房集プロジェクトとして「川口太陽の家」、その従たる事業所「工房集」、「アトリエ輪」の3つの事業所で、多くの仲間たちが5つの班（アトリエ）に分かれ表現活動をしていますが、みぬま福祉会では、その表現活動も「労働の一つ」と考えています。

憲法でも障害者の権利条約でも「働くことは権利」と謳っています（左上図参照）が、私たちは「太陽の家」発足時より、その働く権利を保障する支援に努めてきました。障害が重いからといって「働けない人」「働かなくていい人」と家族や施設職員が決めてしまうのは、権利侵害ではないか。それは、養護学校設置義務化（昭和54年度）以前、多くの障害児が「教育効果がない」と就学猶予を与えられ、社会から疎外されてきたことと、同じことではないかと思っています。

これまで、〝既成のものさし〟を当てるとうまくいかない仲間たちとの関わりの中で、働くとはどういうことか、職員たちと長い年月をかけて議論を重ねてきました。その結論として私たちは、仲間の活動に対して「社会につながる」「お金になっている」「生き生きしている（発達している）」の3つの要件を満たせば「労働」とみなそうと決めました。表現活動もその一つとして仲間も職員も「仕事」という共通理解をもって、日々、各々の創作・制作に励んでいます。

みぬま福祉会は、浦和養護学校の一期生5人が卒業後、障害の重さから福祉施設に受け入れを断られたことをきっかけに、1984年、無認可「太陽の家」として発足。「社会から孤立させない」「身につけた力を伸ばしたい」という当然の願いに応える進路保障の取り組みが、「希望すれば誰でもいつでも利用できる施設づくり」の理念に発展。以後、様々な困難を抱えた人々を受け入れ、現在、「川口太陽の家」をはじめ多様な障害や状況に応えた22の施設及び事業を展開しています。

■憲法 27 条
（勤労の権利と義務、勤労条件の基準及び児童酷使の禁止）
①すべての国民は、勤労の権利を有し、義務を負う
②賃金、就業時間、休息その他の勤労条件に関する基準は、法律でこれを定める
③児童は、これを酷使してはならない

■障害者の権利条約 27 条
（労働及び雇用についての権利）
国は障害者が等しく労働及び雇用についての基本権利を有することを法的に認める。この権利は障害者が開かれた利用可能な労働市場や労働環境の中で自由に選択し受容した労働によって生計を立て得る機会を有する権利を含む。国は差別の禁止、平等を含む公正かつ良好な労働条件の確保などその他の実効的で適切な措置をとることにより、労働にかかわるこの権利の実現を保障し促進する。

発足当時は、他に重度の障害者の労働実践をしている福祉施設がほとんどなく、まして表現活動など誰も考えていませんでした。

当初、仕事は軽作業が中心でしたが、割り箸の袋詰め作業では力の加減ができず破れてしまうなど、仕事にならないことばかり。しかし、「障害の重い人でも、配慮すれば労働参加が可能になる」と信じ、取り組みを続けていった結果、量、質、役割の「3つの見通し」（下図参照）を設けるなど、個別に細かな配慮をすれば「うまくいく」という結論に至ったのですが…、自惚れていました。人間は、多様です。これでは対応できない仲間と出会うことになります。

一人ひとりと向き合い生まれる仕事

一人の女性が入所した時のことです。重い知的障害と重い自閉症がある彼女は、通所しても玄関に腰かけるとテコでも動かない。何とか仕事に参加してもらおうと、彼女を男性職員4人で持ち上げ、作業室に連れて来てはパニックになる。そのくり返しでした。「もう、どうしていいか、わからない」と涙する担当職員と何度も話し合い、「まずは、仲良くなるしかない」と、私か担当職員が、彼女とよく散歩に行くようにしました。

仲間たちが汗水流して働いている中、私たちは田んぼのあぜ道を歩いて行く。後ろめたさを感じながらも、彼女と共に時間を過ごすうち、いろいろな変化が起きました。

【三つの見通し】
見通しの設定
求める努力とする配慮

①量の見通し…ウエス作業など始めと終わりの明確化

②質の見通し…織物、絵画など自分が能動的に対象物に向き合う中で、対象物の質の変化への気づき

③役割の見通し…古本販売など自分が所属する集団の中での役割を自覚

例えば、道端に咲いている花を見て、私が「何の花？」と聞く。すると、ずっと喋らない、笑わないと思っていた彼女が、とても誇らしげに花の名前を全部、教えてくれました。私は感心して「へぇ～」という。また、歌をリクエストすると、彼女は楽しそうに季節の歌を口ずさんでくれる。その度に、私がまた感心する。その経緯で、何が変わったのか。たぶん彼女ではなく、彼女に向ける私たちの眼差しや想いが、変わったんですね。それにより少しずつ彼女が、内包する「私は」という〝可能性のカード〟をきり始めてくれました。

そして、お母さんから絵が好きだと聞いていたので、バザーのポスターか何かの絵を「ちょっと描いてもらおうか」ということになり、担当職員が彼女に頼んでみた。すると、それまで何か頼まれるだけで大パニックを起こしていた彼女が、嬉々として描き始めたのです。

私は、自分が苦手な絵を、その後も楽しそうに描き続ける彼女を見て、「これは、すごい才能じゃないか」と実感し、「だったら、この才能で、社

憶で機械的に作業ができてしまう人もいて、「この作業は、この人にとって意味あることなのか」「これが社会参加なのか」といった疑問が生まれ始めていました。

そんな最中、バブルが崩壊。発注元には、「仕事が遅い、量ができない、正確でない」とはっきり断られ、仕事がゼロになりました。

そういった状況の中、同じ物を短時間で大量に作ることが苦手な仲間たちが「自分らしく活動に参加でき、労働になり得ること」として、自主製品の制作を始め、さらに職員が一人ひとりの興味や関心を探り、得意や長所を見つけることに時間を費やし、それに応じた活動に気持ちが向くよう関わっていった結果、一人ひとりに合った作業、そして表現活動と出合えるようになっていきました。

「表現は仕事」への理解の広がり

しかし、表現活動を始めて数年は、当法人でも「遊ばせていいのか」「甘やかしていいのか」といった意見が大半でした。2002年、「川口太陽の家」の従たる施設としてアトリエやギャラリーを備えた「工房集」を開所した時もそうでした。仲間の作品を通して関係を深めたアーティストなどに協力してもらい、建物を作り、壁や床は仲間たちとみんなで塗ったのですが、県の検査員には「これで完成ですか⁉」といわれ、理事会では「あんなに汚くして」と叱られました。

私たちは、「一年間、時間をください。その間、仲間の姿を見てください」と頼み、まず、作品展を開きました。これが、ことのほか、多くの人が見に来て結果として収入にもつながり、評価を得られました。また、表現活動の中で、仲間の問題と思われていた行動も、少しずつ軽減。仕事として誇りをもって自分の表現活動に向かう姿が、中心になっていきました。

すると一番怒っていた人たちが、頭を下げに来てくれました。「申し訳なかった。この活動は正しい」と。手前味噌ですが、ここが、みぬま福祉会のいいところです。そういった周りの理解があって、今があります。

日々、仲間たちの表現活動に寄り添う支援の中では、「障害がどんなに重くても、一人ひとりが人権や人格の主体者だ」と気づかされる出来事が、たくさんありました。織物をする仲間が、糸がたくさん並ぶ棚の前で、暫く佇んでいるのを見て、「早くして、いい加減に決めて、とはいってはいけないよね」といった話を随分、職員たちとしました。「そこに時間がかかるのが障害であり、障害の重さではないか。彼らのその主体的になっている時間を、大事にしよう」と。ですから、「工房集」のアトリエに来たアーティストが、「ここには、一人ひとりの時間が流れている」といってくれた言葉は、とてもうれしかったです。

その一方、個性を尊重するあまり、みんなが好き勝手にバラバラになってしまわないか、といった心配もありました。しかし、実態は、真逆でした。仲間たちは、お互いの長所短所を認め合い、しっかり連帯感を培っています。

表現がもたらす出会いと気づき

私たちのもとには、入所時、肯定感を失って来る人がたくさんいます。前述の絵を描き始めた彼女の場合、お母さんがそうでした。「うちの子は、迷惑しか掛けていない」と泣き、行事があれば休ませる。私は、彼女と撮った写真を見せては「娘さんもいい表情してるでしょ。私のことも好きだし、ぜんぜん迷惑じゃないよ」と伝えるようにしていました。

そして、彼女の作品が「銀座セゾン劇場」で展示されることになった時、私たちは、彼女やお母さんと一緒に見に行きました。その日の出来事は、今も詳細に覚えています。

車を降りて、彼女とお母さんと一緒に会場に入ると、スタッフの人たちが彼女のもとへ駆け寄って来ました。私はその瞬間、「あゝ、これで今日も終わりだ。またパニックになる」と思いました。ところが彼女は、スタッフたちが差し出す手に、応えた。一人ひとりに握手をして。私は「おい、ちょっと待て！初対面なのに握手させるの⁉　俺と仲良くなるのには、あんなに時間を費やしたのに…」と心で叫びました。そして、後でスタッフからその時の心境を聞いて、強く打ちのめされました。「障害があるかないかではありません。こんない絵を描く人に会ってみたかったんです」。私自身、どんな障害かばかりを考え、一人ひとりに気持ちが向いていなかったことを、気づかされる一言でした。

仕事と仲間に育まれる肯定感

その日、もう一つ大きな出来事がありました。「絵の近くで評判を聴いてみて」と私にいわれ、娘の絵に対する「線がきれいね」「色がいいね」といった来場者の感想を聴いたお母さんが、さめざめと泣いた時のことです。その姿を見て私は、単純に「あゝ、喜んでくれて良かった」と思ったのですが、お母さんはいいましたが、「この子を産んで初めてほめられた」と。想いはずっと、深かった。「これが障害者福祉の現実だ」と改めて気づかされ、未熟児だった私の子が小児医療センターに入院していた時に、出会ったお母さんたちが泣きながらいっていた言葉を思い出していました。「我が家の血筋には、そんなのはいない、産んだお前が悪いと、舅や姑に怒られるんです」。

たぶん彼女のお母さんも、苦しい想いを独りで抱えながら彼女を育てて来たのでしょう。その人生の中で、初めて「やっぱり我が子はいいものだ」と思えたので、素直に想いを語れたのだと思います。今や「我が家の宝」と話してくれます。

また、入所時「親以外は敵」といった目をしていた彼女も、今では私たちに「大好き」といってくれます。一時、病気で入院して歩けなくなったのですが、退院して私たちと再会するなり、車イスから立ち上がり歩き出し、お母さんがびっくりしたくらいです。

作品が売れたり社会的評価を得たりすることももちろんうれしいですが、表現活動を通して、仲間たちや家族の肯定感が培われていることが、何よりもうれしいです。孤独感から解放され、他者との関係が良好に育つと、自身の病気や家族との別れなど人生の苦難を迎えた時に、ものすごく大きな力を発揮します。そのことを最近、身をもって痛感しました。

成長と他者への思いやりに助けられ

私は今、難病指定も障害指定も受けられない国内で十数例しかない病気です。5年前、その宣告

を受けた時、本当に絶望しました。それが今では周りに「病気なのにお気軽そうな顔をして」といわれるまでになれたのは、活動の中で職員や仲間に大切にされた仲間たちが、私を大切にしてくれたからです。

私が、絶望した気持ちで出勤した時のことです。一人の仲間が、玄関で私を待っていてくれました。以前は、光り物を振り回して暴れることもあった人ですが、時を経て、今はしっかりステンドグラスを作るようになり、自分の作品にも愛着を持てるようになりました。その彼が、私に駆け寄り、笑いながら、頭を撫でてくれました。「松本、生きてたか」と。そして「よかった」といって走り去りました。その背中を見た時、「あゝ、30年分のご褒美ってこういうことか」と思いました。彼は入所時、大きな困難を抱え、本当に手を焼いたけれど、私も職員も彼のことを人一倍、大事にしました。

みぬま福祉会の合言葉は、「困難は宝」です。職員が、彼の好きなこと、できることを一生懸命探し、肯定感が育ったことで、私を救ってくれた。その時、「みな死ぬのは平等に一回だ」と気づきました。誰が早く逝くのかわからない。だったら今、生きている間、この期待に応えればいい。それが、彼の教えてくれた答えです。

理屈ではなく実践の中で、人格を育んだ仲間たちが、人生の困難に遭った私を迷いもなく、支えてくれています。

生き生きとした表現があふれる豊かさ

最近、職員から「まるくなった」といわれますが、仲間と共に過ごす中、私の人生の彩りも豊かになりました。文化を享受しながら生きる大切さを、改めて感じています。

アートについては、相変わらずよくわかりませんが、彼らの表現を通して、「わかるかわからないかではなく、自分の気持ちがどう揺れるか。それを楽しめればいいじゃないか」と思うようになりました。職員には、「いい作品かどうかではなく、生き生きしているかどうかが大事」といい続けています。

「工房集」を、アーティストを育てる場と思ったことは、ありません。仲間には、素朴に、幸せに豊かに生きる隣人になってもらいたいと願っています。そして、そう願う関係性の中で、実は私が幸せに豊かになっている。契約という行為だけでは、この豊かな関係は生まれません。仲間が生き生きとできる活動があり、そこに寄り添い励まし合い、関係も豊かに育っていく。その結果、仲間自身の人格も豊かに育つ。そのために工房集を中心とした表現活動もあるのだと思っています。

仲間や、我が子を誇りに思う親御さんの変化はもちろん、こうやって障害のある人のために、活動を理解しようと多くの人が集まっている事実も、とてもうれしく大事なことだと思っています。

障害のある人は、哀れみや施しの対象ではありません。しっかりとした環境と理解と活動の場があれば、立派な社会貢献者になれる。社会の一員として生きていける。その事実を作っていきたい。

表現活動や支援を通して、社会に新しい価値観を創る。みなさんも、その大切な仲間だと思っています。

※掲載にあたり発言の一部を要約したり順番を入れ替えたりなどの編集を加えました。

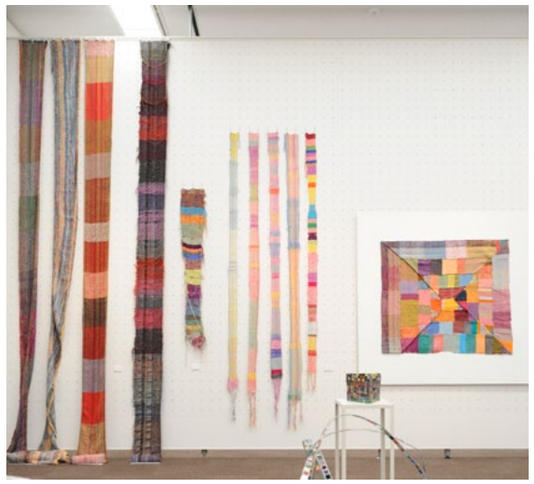
困難や例外的な状況にある人を切り捨てない。
つないだ手を離さない姿勢は、
人間の「よりよく生きたい」という
当たり前の願いと共通して
個や集団を発達させる力になります。
他者の痛みに共感し、怒りや不安、
危機感を同じように感じることが、できるかどうか。
仲間も家族も職員も、一人ではありません。
多くの人と手をつなぎ、たくさんの力が合わさって
きっと社会を変えていく力になるのです。

みぬま福祉会　施設・事業

【障害者支援施設】
■ 入所施設・生活介護事業
・太陽の里
・大地

【障害福祉サービス事業】
■ 通所施設・生活介護事業
・川口太陽の家
・川口太陽の家・工房集
・アトリエ輪
・大宮太陽の家
・白岡太陽の家にじ
・蓮田はすの実作業所
・新白岡作業所そよかぜ
■ グループホーム共同生活援助事業
・オレンヂホーム
・ケアホームサンライズ
■ 相談支援事業
・川口市障害者相談支援センターみぬま
・さいたま市大宮区障害者生活支援センターみぬま
・さいたま市北区障害者生活支援センターみぬま
・埼葛北障害者生活支援センターたいよう
・埼葛北障害者生活支援センターきらら
■ 児童発達支援事業
・シャイン
■ 短期入所施設
・しらゆりの家

【地域生活支援事業】
■ 日中一時支援事業
・白岡市障害者デイサービスセンター
■ 地域活動支援センターⅡ型
・地域活動支援センターたいよう
■ 居宅介護事業・行動援護事業・
移動支援事業・生活サポート事業
・サポートセンターたいよう
・生活サポートセンターたいよう



Ⅲ 事業成果まとめ

セミナー等に参加された方々の意識の変化
展覧会をご覧になった方々の感想
相談窓口に寄せられた相談や依頼
関係者による事業の振り返りなど
アートセンター集で実施した事業活動における
様々な“声”をまとめました。

1. 相談支援　事例・内容分類
2. 参加者意識調査
3. 展覧会アンケート×4
4. 振り返り

障害者アートマネージメントセミナー　参加者感想

■セミナー全体について
・午前午後ともに時間の経つのが大変早かったです。登壇者の方の熱い想いやそれを聞いている人たちの熱は、理想を共有しているからこそ、一体感を感じさせてくれました。
・日々作家さん、利用者さんと向き合っている職員の方々の話、アートの可能性について、専門家の方の話、どちらとても刺激に富む気づきの多いものでした。
・驚くほど私が小学校現場での課題と思っていたことが盛り込まれていました。前へ進む迷いに光がさしました。
・障害者雇用の観点からヒントを得たいと思い受講しました。自分の仕事にも活きるヒントがたくさんありました。
・多方面から福祉やアートについて聞けて、大変面白かったです。作家さんも何人もみえていたようで、本人に会うこともできて良かった。
・福祉現場やアートの専門家、両側とも理解し合い、リスペクトし合える良い機会だったと思います。

■基調講演「豊かに生きる・幸せに生きるを考える」について
・この業界に入って約5年になります。今の支援（自分の所属法人の）は本当に利用者のためになっているのか、振り返るきっかけになりました。
・とても勉強になりました。松本先生の講演は、福祉に携わる人間として改めて考え直す機会となりました。「アートの本質」もとても良かったです。
・松本施設長の言葉。「他者が好きになる」。他者との関係が良好になり、本人にとって生きやすい環境を作っていきたいと思います。
・利用者さんとの関わり、表現活動とは、幸せで豊かに生きるとは…ジンとくるものがありました。自分に、他者に丁寧に向き合えているだろうか、と振り返るきっかけになりました。レジュメ4の〝専門性との連携〟〝作家としての位置づけ〟がどんなものなのか、聞きたかったです。

■各論①「福祉施設がつくる商品とは」について
・プロデュースはどんな風にやっているのか？お二人が今のcon*tioを設立するに至った経緯を詳しく聞いてみたくなりました。

■各論②「著作権はコワくない！」について
・障害者の作品の著作権について、今まで意識したことがなかったので勉強になりました。

■TAMAP±〇活動紹介「埼玉県内の施設間のつながり、広がり、深まり」について
・TAMAP±〇の集まりをとてもうらやましく、かつ力強く感じました。
・はじめて参加しました。埼玉県内の施設職員さんたちが障害者アートについて熱い心を持っているのを知り、とても嬉しく感じました。
・施設で具体的な取り組み（アート活動）はしていませんが、素敵な絵を描く人がいるので、たくさんの人に見てもらいたいと思っていました。埼玉県内で、施設間のつながりがあることを知り、背中を押してもらったような気持ちです。
・今年の4月に入職し、職場施設の芸術活動に先月から関わることになり、他の施設や地域ではどのような活動があるのだろうと、全く未知の状態でセミナーに参加させていただきました。自分や自分の施設では何ができるんだろうと探っている中で、TAMAP±〇のお話を聞き、施設同士のつながりが広いことにまず驚きました。自分の施設は他施設・機関とこれほどのつながりがあるのか、定例会など話し合う共有し合う機会はあるのだろうか、と考え、自分の施設と今日お話しいただいた皆様の活動を比較しながらこれから私（施設）にもできること、発信させていけることが多くあることに気づくきっかけをいただいたように思います。

■ディスカッション「アートの本質とは？」について
・すべてのコンテンツとても良い刺激と励みになりました。特に最後のディスカッションは、とても勉強になりました。自己表現活動を支える環境を整えていくためのヒントをたくさんいただけました。
・最後のディスカッションには、本当に多くのこれからどうすればよいかが詰まっていました。持ち帰って語りたいです。私も熱く活動します。（もっと自信を持って）本人からの質問は重いけど常に悩むべきところです。
・最後のディスカッションで先生方のお話を聞き、一緒に研究をしていけたら、本当に良いと思いました。障害者アートには知性があるとは、まさに目からうろこで、自然と涙が出てきてびっくりしました。
・ディスカッションは、色々な点が出てきておもしろかった。「障害者アート」というテーマを考え直す時期かもしれない。
・現代アートとの相違点、共通点、「ない」「なくしていくべき」といいつつ障害者アート企画展と銘打つことで、何か見えてくるのではないか。色んな事を考えるタネをいただき興味深かった。
・ディスカッションがとても面白かったです。たくさんメモをとりました。家に帰ってまた考えたいです。

※アンケートから一部を抜粋しました。

相談事例×5

相談事例①

相談者	知的障害のある方のご家族（母）、相談支援専門員	件名	「活動場所を探している」という相談

内容　知的障害のある方のご家族（母）から表現活動を行っている「川口太陽の家」に通いたいという相談が市の相談支援専門員にあり、アートセンター集へ連絡があった。10年間自宅で過ごしており、日中通う場所を探している。

回答・対応

1. 情報収集
市の相談支援専門員から、本人の支援状況などについて詳細の情報収集を行う。また、当法人の通所施設で実習経験があるということで、施設職員と連絡を取り、実習時の本人の状況や支援の必要性について等、情報を収集した。

2. 面談
ご家族、市の相談支援専門員、本人が関わりのある発達支援センターの相談支援専門員と共に、工房集にて面談を行う。ご本人の生活の様子や本人・ご家族の思いを丁寧に聴く。また、川口太陽の家は既に定員がいっぱいで、体験や見学ができても入所という対応が難しいことを伝え、県内には表現活動をしている施設も増えているので情報を提供する。

3. 情報の共有
市や発達支援センターの相談支援専門員と情報を共有すると同時に、モデル事業の協力委員でもある埼玉県発達障害福祉協会相談支援部部長とも情報を共有して、連携できる体制を整えた。

相談事例②

相談者	福祉施設職員	件名	施設見学・創作環境についての相談

内容　来年度から、新たに施設を立ち上げる。そこでの日中活動として、表現活動を考えている。長年、表現活動を行なってきた、みぬま福祉会の理念や工房集立ち上げの経緯、また具体的な表現活動におけるノウハウ、契約書の取り交わし方等について教えてほしい。

回答・対応

1. 施設見学の対応
実際にみぬま福祉会のアトリエを見学する機会を設けた。3施設5ケ所のアトリエを周り、様々な障害のある利用者たちの表現活動に取り組む様子、職員との関わりを見てもらう。また、絵画・織物・ステンドグラス、そういったジャンルに当てはまらないビニールテープを使った作品や糸を使った作品など、多くの作品を見てもらう。

2. 情報提供
施設見学後、みぬま福祉会の表現活動の取り組みについての話や、支援の中での関わりの延長線上に表現活動があること、具体的なノウハウに関する質疑応答等を行なった。

3. インターンシップ研修の実施
後日、相談者からもっと深く現場を見てみたいとの依頼があり、1日アトリエの現場に入って学ぶインターンシップ研修へとつなぐ。5人の職員が4つのアトリエで、利用者一人一人に合わせた環境設定や、職員・利用者との関わりの中で作品が生まれている現場を実体験。その後、工房集にて振り返り・質疑応答を行い、情報提供した。

1 相談支援

埼玉県障害者芸術活動支援センター「アートセンター集」では、7月から相談窓口を開設しました。本年度の相談件数は、7月～3月15日までの集計で330件。県内が154件、県外が176件です。

県内からの相談の特徴としては、福祉事業所や作家・家族からの相談が多く、商品化や著作権に関する相談等が多数ありました。当法人の取り組みや事例を伝え、弁護士による著作権に関する勉強会等を企画しました。また、作者・家族からの相談では、「作品を発表したい」、「活動の場を探している」等の相談があり、適宜、協力委員会でもある美術の専門家や相談支援専門員と連携しながら対応しました。

県外からの相談で突出していたのは、「見学したい」という要望で、その都度対応し、相談窓口開設前の件数を含め69件304名の見学を受け入れました。また、企業や美術館・ギャラリーからは、展示機会や作品の2次利用に関する相談がありました。

アートセンターとして立ち上げたことで、今まで当法人の自助努力で行ってきた芸術に関する相談支援を、しっかり体制的に整備することができました。

相談件数*1 330件（県内154・県外176／2016年7月～2017年3月15日）

相談 ベスト17　誰からのどんな相談に多く対応したか

1	作者・作家	作品を発表したい	32
	福祉事業所	見学したい	32
3	福祉事業所	作品を商品化したい	29
4	福祉事業所	作品の取扱について	21
5	企業・市民	展覧会を開催したい	18
6	大学・研究機関	取材したい	16
7	企業・市民	作品を商品化したい	14
	企業・市民	見学したい	14
9	福祉事業所	取材したい	11
	報道関係者	取材したい	11
11	福祉事業所	充実させたい	10
12	企業・市民	取材したい	9
13	美術館・ギャラリー	展覧会を開催したい	8
14	作者・作家	見学したい	7
	企業・市民	関わりたい	7
	企業・市民	作品を売りたい	7
	大学・研究機関	見学したい	7

相談内容 ベスト8　全体で多かった相談

1	見学したい	64
2	取材したい	49
3	作品を商品化したい	45
4	作品を発表したい	33
5	展覧会を開催したい	32
6	作品の取扱について	21
7	関わりたい	15
	充実させたい	15

相談者別件数　相談が多い順に

c	福祉事業所	126
f	企業・市民	85
a	作者・作家	56
g	大学・研究機関	31
e	美術館・ギャラリー	14
h	報道関係者	11
d	国・自治体	7
b	特別支援学校	0
z	その他	0

＊1 相談件数は、「障害者の芸術活動支援モデル事業」連携事務局の集計方法に従った相談対応件数です。

相談分類表

2016年7月～2017年3月15日

相談内容					相談者 a 作者・作家	b 特別支援学校	c 福祉事業所	d 国・自治体	e 美術館・ギャラリー	f 企業・市民	g 大学・研究機関	h 報道関係者	z その他	合計
1	創作環境に関する相談	1	法的助言を要しない	1 はじめたい	2	0	3	0	0	0	0	0	0	5
				2 充実させたい	4	0	10	0	0	1	0	0	0	15
				3 関わりたい	4	0	3	0	0	7	1	0	0	15
				4 特定の作家に会いたい	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
				5 見学したい	7	0	32	1	3	14	7	0	0	64
				6 作品の保存について	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				その他	4	0	4	0	0	0	0	0	0	8
		2	法的助言を要する相談		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小計			21	0	54	1	3	22	8	0	0	109
2	展示機会に関する相談	1	法的助言を要しない	1 作品を発表したい	32	0	0	0	0	1	0	0	0	33
				2 出展を依頼された	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3
				3 展覧会を開催したい	0	0	3	1	8	18	2	0	0	32
				その他	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
		2	法的助言を要する相談		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小計			33	0	6	1	8	19	2	0	0	69
3	作者の権利保護に関する相談	1	作品出展	1 出展契約を締結したい	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
				その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小計			0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
		2	作品寄託（寄贈）	1 寄託（寄贈）したい	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				2 寄託（寄贈）を受けたい	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小計			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		3	作品の二次使用	1 二次利用を依頼された 1 商品化	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
				1 二次利用を依頼された 2 写真掲載	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				1 二次利用を依頼された その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				2 二次利用したい 1 商品化	0	0	29	2	0	14	0	0	0	45
				2 二次利用したい 2 写真掲載	0	0	1	0	0	1	0	0	0	2
				2 二次利用したい その他	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
				その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小計			0	0	31	2	0	17	0	0	0	50
		4	作品売買	1 売りたい	1	0	0	0	0	7	0	0	0	8
				2 買いたい	0	0	0	0	1	3	0	0	0	4
				その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小計			1	0	0	0	1	10	0	0	0	12
		5	1 作品の取扱全般に関する相談		0	0	21	0	0	0	0	0	0	21
			2 成年後見制度利用に関する相談		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		小計			0	0	21	0	0	0	0	0	0	21
4	取材	1	取材したい		0	0	11	1	1	9	16	11	0	49
		その他			0	0	3	1	0	6	5	0	0	15
		小計			0	0	14	2	1	15	21	11	0	64
その他の相談					1	0	0	1	0	2	0	0	0	4
合計					56	0	126	7	14	85	31	11	0	330

相談事例③

相談者　精神障害のある方

件名　「作品を見てほしい」という相談

内容　一般就労（バイト）をしながらイラストを描いている。イラストの2次利用や、作品を展示する機会がほしい。芸術に関して支援してほしい。

回答・対応

1. 面談
工房集にて面談を行い、相談者の思いを丁寧に聴きとる。アートセンター集の事業について説明し、公募展の情報を提供。埼玉県の表現活動状況調査について説明し、12月の「埼玉県障害者アート企画展」等の情報を伝えた。

2. 情報収集・共有
相談の件を協力委員でもある美術の専門家と共有し、作家を社会につなげるためにどんな方法があるか助言をもらった。また、実際に相談者の絵を見てもらう日程調整等を行った。

3. 美術の専門家とつなげる
アートセンター集の担当者が仲介し、美術の専門家に作品を見てもらう機会を設けた。また、具体的に芸術に関する助言をもらった。さらに、今後についても一緒に考えた。

相談事例④

相談者　福祉施設職員

件名　契約終了に関する覚書についての相談

内容　契約していた株式会社から契約終了の連絡があり、利用者の作品の所有権が、施設に戻ることになった。それに関する覚書の内容について問題はないか。

回答・対応

1. 契約終了の状況確認
当初の契約内容の確認をした上で、契約終了自体に問題はないか確認した。また、法的知識が必要な相談のため、弁護士の助言が必要と考え、弁護士につなげることを確認した。

2. 弁護士とつなぐ
協力委員でもある弁護士に連絡し、情報を共有。また、覚書の書面に問題がないか確認を依頼し、相談者から直接連絡できるように調整した。

3. 経過の確認
相談者と弁護士との間で何度かやり取りを行い、助言をもとに覚書の内容を訂正。契約終了に至った経緯を後日確認する。

相談事例⑤

相談者　飲食店経営者

件名　「展覧会を開催したい」という相談

内容　経営しているパン屋を地域の癒しの場にしたい。アール・ブリュットを知り、「東京アール・ブリュットサポートセンターRights」に問い合わせたところアートセンター集を紹介してもらった。今後、展覧会等も開催したく協力してほしい。

回答・対応

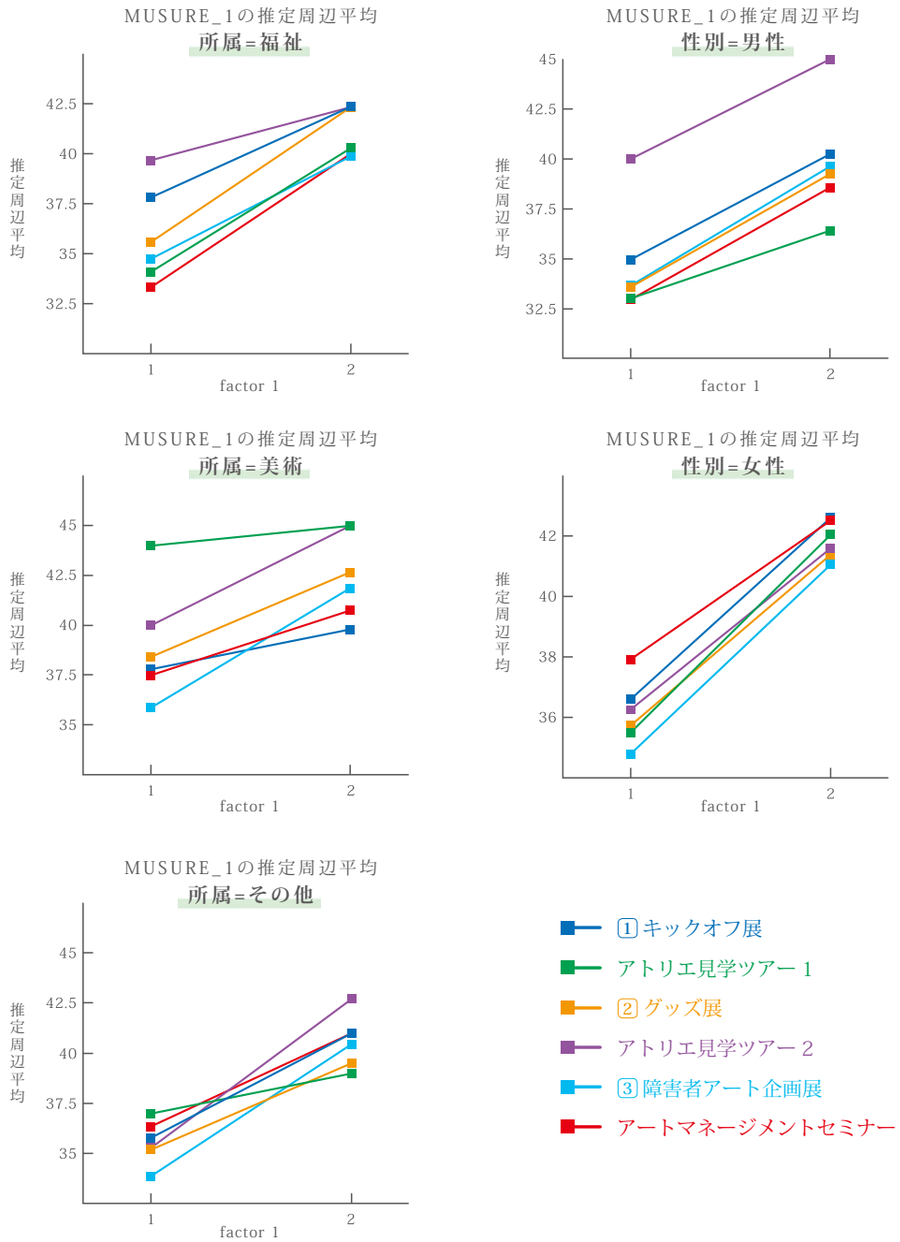
1. 情報提供
本事業の「3ヶ所同時開催展」が間近だったので、まず県内でどんな作品が生まれているのか知ってもらうために展覧会やイベントの情報を伝えた。実際に展覧会を見てもらい、「改めて展覧会を開催したい思いが増した。今後も協力してほしい」との連絡があった。

2. 面談
工房集のアトリエを見学してもらい、詳細な内容と思いを聴く。みぬま福祉会、アートセンター集、埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±○の活動や県内の取り組み等を説明した。

3. TAMAP±○で情報共有し、つなぐ
TAMAP±○の定例会で相談内容を共有。店舗と同じ地域にあるメンバーの施設が開わりながら展覧会等を企画したらどうか等の前向きな意見が出て、その後、メンバーが訪問。具体的な企画を一緒に考えながら対応を続けている。

調査結果対象別集計

性別・所属別の意識の変化



考 察

グラフの様にすべての調査において右肩上がりの結果が得られました。性別（右列上から男、女）や所属（左列上から福祉、美術、その他）を問わず、どの活動（展覧会・アトリエ見学ツアー・セミナー）でも、すべての設問において平均的に意識の深まりや変化が見られました。

今後も調査を進め、分析・考察を深めて、事業運営に活かしていきたいと考えています。

2 参加者意識調査

アートセンター集では、協力委員でもある埼玉大学教育学部（絵画及び美術教育）小澤基弘教授の指導のもと、展覧会やセミナー、アトリエ見学ツアーといった事業の参加者を対象に、障害者アートに対する意識の深度をはかる「プレ／ポスト調査」を実施しました。

展覧会等の前と後で、どの程度、障害者アートに対する理解や認識が変わったか。関心の深まりや、自身の心の変化、可能性への期待値など、具体的な設問をあげて回答を求めています。

分析はこれからですが、継続することで、障害者アートやその支援の意義を、明らかにしたいと考えています。また、この調査を行い、具体的な設問で障害者アートへの理解を求めること自体が、障害者アートの普及につながると考えています。

展覧会・セミナー・アトリエ見学ツアーなどの参加者を対象に、障害者アートに対する「意識の深まり」をはかる独自の「プレ／ポスト調査」を行いました。

対象分類

性別 （ 男 ・ 女 ）　　所属 （ 福祉関係 ・ 美術関係 ・ その他 ）

年齢 （ 10代 ・ 20代 ・ 30代 ・ 40代 ・ 50代 ・ 60代 ・ 70代～ ）

設 問

1、（以前よりも）障害者アートへの理解が深まった

2、障害者が表現（創作）することは障害者本人を支えることになると思う

3、障害者アートを鑑賞したり、関わったりすることで、回答者ご自身が豊かになると思う

4、障害者アートには人をつなげる可能性があると思う

5、障害者アートを通じて、回答者ご自身の障害者に対する見方が変わった

6、障害者アートを通じて、社会の障害者に対する見方が変わると思う

7、障害者アートが社会全般を変える可能性があると思う

8、（以前よりも）障害者への支援の仕方についてヒントを得ることが出来た

9、障害者支援の仕事はクリエイティブな仕事だと思う

プレ／ポスト測定値

見る前	1	2	3	4	5
見た後	1	2	3	4	5

※各設問について見る前と見た後で意識がどの程度変わったか、各数値に○を付けてもらいました。

③展覧会アンケート

①キックオフ展

来場者数 522人

UFU SAITAMA キックオフ展

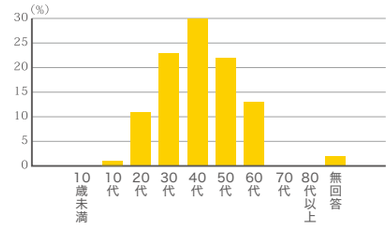
特徴的な感想

- 県内の施設が連携されていて素晴らしいと思いました。
- 制作現場も見学でき、アトリエの雰囲気を感じることができて良かったです。
- 作品がとても良い！普段見ることのできない感じで新鮮で面白かったです。
- 表現することは生きることだなと改めて感じました。
- 人それぞれ表現の仕方って色々あるなと思いました。
- 自由に自己表現をする場や時間を保障することの大切さも改めて感じました。

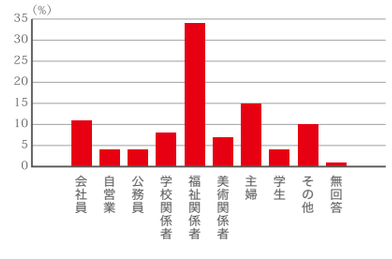
主な課題

- 会場の前を通る学生や地域の方たちに立ち寄ってもらえるといい。
- 展示に使用しているアクリル板を触ってしまう方が多く危なかった。
- 作品購入の依頼もあったが、今回は販売しない施設が多かった。販売後の取り決めが話されていない施設も多い。その点も課題。

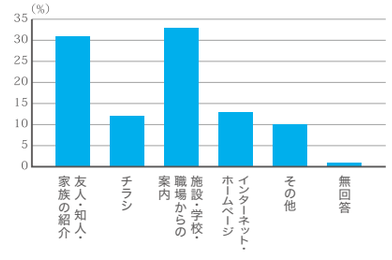
年代



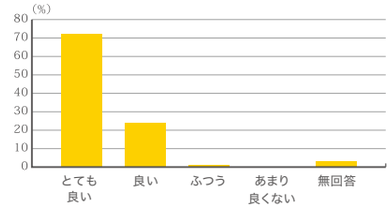
職業



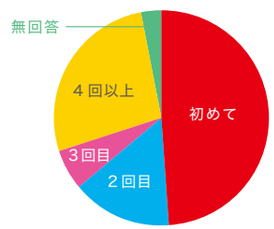
来館きっかけ



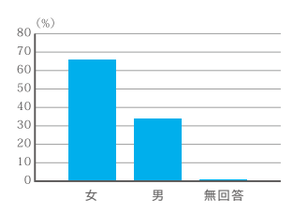
展覧会評価



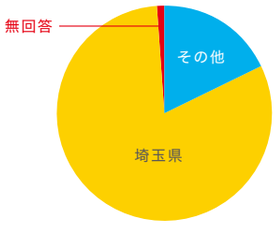
工房集への来場回数



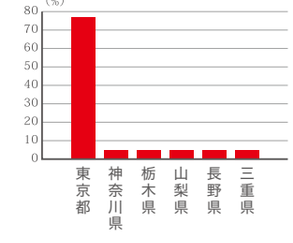
性別



どちらからお越しですか



その他（都道府県別）



UFU SAITAMA キックオフ展

ご意見・ご感想など

※各展覧会のアンケートに寄せられた感想を抜粋しました。どの声も今後の支援活動のプラスになると考え、ほとんど修正せずに掲載させていただきます。

○とても良かったです。利用者さんの笑顔がとても良かった。
○県内の施設が連携されていて素晴らしいと思いました。各地域に良いアーティストがいるこの豊かさは、障がいの有無に関わらず、私たちにとって、とてもありがたいことだと思います。皆さんに感謝です。他の方の作品もまた見てみたいです。
○自由な空間で利用者、一人一人が生き生きとしてとても良かった。
○かっこいい
○みんなの作品が見られて楽しかった。
○今日はお忙しい中ありがとうございました。制作現場もまさか見学できるとは思っていなかったので、実際にどのような雰囲気でつくっているのか見ることができて良かったです。怒ったり、思い通りにいかなかったり、みてとみせてくれたり、それぞれのお仕事をそれぞれのその時のままに皆「仲間」として一緒の空間を共有している場所だと感じました。「障害者アート」ときくとソワソワモヤモヤしますが、うまく言えませんが、おもしろいものやおもしろい皆さんのエネルギーが元気をくれるなと感じています。
○施設のつながりの大切さ、作品を介しての交流はありそうでなかった試みだと思います。
○それぞれの作家が、それぞれの表現をしているところに感動しました。「障害者アート」との距離のとり方、見方に迷うところもあるのですが、（いわゆる「健常者のアート」と）公平にすることが適当なのかなと思いました。とても面白かったし、勉強になりました。
○以前は、障がいのある方との関わりがあり、月に1～2回ボランティアをしていましたが、ここ20年ぐらい遠のいています。又、チャンスがあれば、というより作るものですが、どこかで彼らと関われればと思っています。
○もともと障害者と健常者一緒のグループ展をした事で今は福祉の仕事をしています。楽しみだけではなく、「せねばならぬ」のような苦しさを持ちながら描いている方もいて、見方は当初と変わる事もありますが、一人一人にあった表現方法や素材を提案して進めていくのにはワクワク感があります。どうか「障害者なのに素晴らしい！」と言われる世ではなく、先入観も壁もなく、ステキなアートとして広がる世界でありますよーに！
○障害児の美術活動と関わっているので、子どもの将来の表現の可能性をどんどん広げていきたい。アート作品として人に見られる機会を作っていきたいです。
○自分にはないチカラなので、純粋に「表せるチカラ」を素敵にそしてうらやましく思います。みなさんの作品を見ていると、自分の視野も広げてもらえる気がします。脳みそがやわらかくなるような…
○障害者が自立するために様々な個性を見つける活動はとても素晴らしいと思います。同じ障害を持つ子供の親として、いつ来ても感動をいただいています。正直、自分の子供は何も出来ないと思っていましたが、ここへ来ることで、可能性、才能は誰にでもある、表現が出来ると気づかせていただきました。
○普通高校で教員をしています。特別支援教育の勉強を始めようとしています。今思えば幼いころから障害者の方々にふれあっており、作品も身近で、とても魅力を感じていました。こうして素晴らしい展示がなされるようになり、社会にとって新しい風が吹き出しているのだなと希望を感じます。これからも楽しみにしています。
○カフェ、ワークショップ、ショップも作品と共に楽しませていただきました。ありがとうございます。
○カフェで地域の方が生き生きと仕事をされている事、地域のお店で作家さんの作品を展示している事を見たり聞いたりしたので、そうした活動を広めたいと思いました。工房全体が手作り感があり、暖かみを感じました。
○アートで障害者が自立できる実感をひしひしと持ちました。障害者と健常者の違いというのは何でしょうか？私たちは世間の中でいろんな垢にまみれて生きているのでしょうか？心が洗われました。ありがとうございました！
○関口さんの書が気に入ったそうです（5歳）
○絵は色々な場所で見させていただいたことがありましたが、工房は初めてだったので興味深かったです。いつか仲間が活動しているところにお邪魔したいです。
○少し遠かったのですが、来たかいがあり、楽しかったです。東浦和からの道も自然と歴史があって、良い環境だなと思いました。とてもみなさんが楽しそうなのもよいです！
○初めてお邪魔させていただきました。障害者の無垢な表現に圧倒されっぱなしでした。小学生の息子が特別支援学校に通っていまして、アール・ブリュットに触れる機会を作りたいと思い、家族で来てみました。今日は息子の機嫌が悪く、少ししか居られませんでしたが、またいつか来られたらいいなと思います。
○僕らが普段いかにリミッターにしばられているのかを考えました。何かを表現する時に今回のことを思い出したら違う表現ができるようになるのかなと思いました。
○作品がとても良い！普段見ることのできない感じで新鮮で面白かったです。
○普通に働いている人たちがここへ遊びに来たらみんな癒されて帰ると思う。もっと広がればいいな。
○色々な方面から視点を変えて見てみることが大切だなと思いました。
○今は予算、参加メンバーのモチベーション、工賃とのバランス等でそこまで熱さを持ち続けられない面もありますが、続けることの大切さを感じます。
○このような場が社会の中で増えていくことが、社会の懐の深さにつながり、みんなが幸せに生きていきやすくなっていくことにつながると思います。それを体現しているのが集の存在。とても嬉しいです。ありがとうございます。
○障害があるなしではなく、アートそのものだと思いました。
○障害を持っている方の内面の心模様が、このような表現活動であふれ出てくることを改めて感動しています。まだまだご本人たちの内面を引き出す私たちの力づかせていただきました。
○普通高校で教員をしています。特別支援教育の勉強を始めようとしています。今思えば幼いころから障害者の方々にふれあっており、作品も身近で、とても魅力を感じていました。こうして素晴らしい展示がなされるようになり、社会にとって新しい風が吹き出しているのだなと希望を感じます。これからも楽しみにしています。
○カフェ、ワークショップ、ショップも作品と共に楽しませていただきました。ありがとうございます。
○カフェで地域の方が生き生きと仕事をされている事、地域のお店で作家さんの作品を展示している事を見たり聞いたりしたので、そうした活動を広めたいと思いました。工房全体が手作り感があり、暖かみを感じました。
○アートで障害者が自立できる実感をひしひしと持ちました。障害者と健常者の違いというのは何でしょうか？私たちは世間の中でいろんな垢にまみれて生きているのでしょうか？心が洗われました。ありがとうございました！
○関口さんの書が気に入ったそうです（5歳）
○絵は色々な場所で見させていただいたことがありましたが、工房は初めてだったので興味深かったです。いつか仲間が活動しているところにお邪魔したいです。
○少し遠かったのですが、来たかいがあり、楽しかったです。東浦和からの道も自然と歴史があって、良い環境だなと思いました。とてもみなさんが楽しそうなのもよいです！
○初めてお邪魔させていただきました。障害者の無垢な表現に圧倒されっぱなしでした。小学生の息子が特別支援学校に通っていまして、アール・ブリュットに触れる機会を作りたいと思い、家族で来てみました。今日は息子の機嫌が悪く、少ししか居られませんでしたが、またいつか来られたらいいなと思います。
○僕らが普段いかにリミッターにしばられているのかを考えました。何かを表現する時に今回のことを思い出したら違う表現ができるようになるのかなと思いました。
○作品がとても良い！普段見ることのできない感じで新鮮で面白かったです。
○普通に働いている人たちがここへ遊びに来たらみんな癒されて帰ると思う。もっと広がればいいな。
○色々な方面から視点を変えて見てみることが大切だなと思いました。
○今は予算、参加メンバーのモチベーション、工賃とのバランス等でそこまで熱さを持ち続けられない面もありますが、続けることの大切さを感じます。
○このような場が社会の中で増えていくことが、社会の懐の深さにつながり、みんなが幸せに生きていきやすくなっていくことにつながると思います。それを体現しているのが集の存在。とても嬉しいです。ありがとうございます。
○障害があるなしではなく、アートそのものだと思いました。
○障害を持っている方の内面の心模様が、このような表現活動であふれ出てくることを改めて感動しています。まだまだご本人たちの内面を引き出す私たちの力

が不十分なのだと感じました。ありがとうございました。

○制作現場を見学させていただいて嬉しかった。すごい作品がたくさん生まれている。

○表現することは生きることだなと改めて感じました。

○見るたびに力強い絵にパワーをもらい、豊かな気持ちです。ありがとうございます。

○今年のこれからの活動も楽しみにしています。

○その人らしさが出ていて、製作途中の様子(アトリエ)もみていて楽しい。自分を表現する方法に出会った人たちは幸せですね。SAKURA HEARTのように作品がすてきな商品になって、そのアイデアが素晴らしいと思います。

○作者の皆様の発想力などとても豊かであると感じました。

○ご丁寧に案内していただきました。ありがとうございます。

○キックオフ展とのことなので、今後も楽しみにしています。人と人がアートを通じてつながることは、本当に素晴らしいことだと思います。

○初めて出会う作品が多く、埼玉には素敵なアートが沢山あるけど、まだ世に出ていないものも多いであろうと思いました。このような作品展が多くひらかれると個人的にはとても嬉しいです。あたたかく迎え入れていただき、ありがとうございました。とてもいい時間を過ごせました。

○個性的な作品群に接して、大きな刺激を受けた。作品の裾野もどんどん広がっており、より多くの才能が発掘されることを期待する。

○集カフェ大好きです。ケーキもおいしいです。作品も感激ですが、集(Café)もステキです。

○どの作品にも今まで見たことないようなオリジナリティーがあり、自分の内側から何か湧き上がってくるものがあるのだなと感じました。

○他人から見たら少し曲がっていても自分に対して真っ直ぐな芸術を行なうことの良さを見た。

○一人ひとりの可能性に向き合って、日々活動しておられることを感じ、なかなかできない積み重ねに脱帽する思いです。私達も自分たちの独自色を探って、これからも活動していきたいと思いました。

○もっとたくさん見たいと思いました。次回も楽しみにしています。

○アトリエの作りもとても良かったです。展示の仕方もとってもいいなと思いました。

○人それぞれ表現の仕方って色々あるなと思った。

○パンフレットの地図が分かりにくかった。見ていて楽しかった。

○見ていて、とても楽しかったです。自分の施設でも「できたらいいなあ」と思いました。

○心が満たされました。感謝します。

○実際に作品を制作している現場を間近で見ることができて良かったです。

○素晴らしい作品で購入できないのが残念。ほとんどの作品が非売品なので…。買って応援とかも出来るといいです。いつも色々なインスピレーションありがとうございます。

○どの作品からも深く響くものがあり、居心地の良い空間。作者のみなさんの日常の暮らし、これからのくらしも豊かであって欲しい。

○今回このイベントに来られて良かったです。また伺いたいと思っています。このようなイベントをしてくださり、活動をしてくださり、ありがとうございます。

○自由に表現を楽しむ皆さんの素晴らしさ、それを引き出すサポーターの皆さんの素晴らしさ、両者あってのアートなのかなあと思いました。教育関係者として、社会に出るために必要なことを身に付けられるために、と仕事をしている毎日ですが、自由に自己表現をする場や時間を保障することの大切さも改めて感じました。素敵な表現の中に、ちょっぴりのユーモア、とても楽しく観させていただきました。ありがとうございました!!

○作家さんご自身のことを知ることができれば理解がもっと深まったかなと思います。

○工房集の建物の周りが、工房らしく彩られてとても良くなりました!!

○小さくてもこういう展示会が何度も重ねて開かれることが大切で、意義のあることだと思う。

○卒業生の作品やお手伝いのお母さんに会えるのが毎回楽しみです。

○ミニ展示でも継続してやれると良い。(作業所ごと、まとめてやってもよいかも)。新しい作家・作品が発見(?)されると思う。

○今後も施設の中で表現活動を維持していけるよう、ネットワークづくりが大切だと思いました。ありがとうございました。

○作品作りをするのに、環境が整っていて、恵まれていると思いました。ここまで来るまでに、色々と努力されてきたのだと思います。家庭的なあたたかい感じがしました。

○埼玉県戸田市で造形教室を開いています。障害のある子供達も参加してくれており、今回の展示を見て、様々な広がりがあるな…と思いました。

○ひとりひとりの力を引き出せていて、とても素晴らしい活動だと思います。がんばってください!

○多彩な表現が揃えられて展示されていたので驚きました。どれも各々の世界があり魅力的です。工房集の作品だけでも多彩ですが、埼玉県内の施設の活動の中からも、これだけ素晴らしいものが見出せますので、今後ももっといろいろなその人らしい表現が見られるのでしょう。楽しみです。

○以前、展覧会に来たときも思いましたが、とにかく作品からあふれてくるエネルギーがすごいと思いました!見ていても全く飽きの来ない素敵な空間でした。次回も来たいです。ありがとうございました。

○またぜひ来たいです。

※各展覧会のアンケートに寄せられた感想を抜粋しました。どの声も今後の支援活動のプラスになると考え、ほとんど修正せずに掲載させていただきます。

Ⅲ事業成果まとめ ③展覧会アンケート

② グッズ展

UFU♥SAITAMA土ツグズムズ9展

来場者数 720人

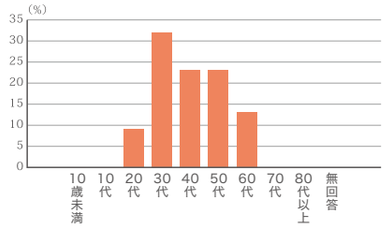
特徴的な感想

- 素敵な作品にたくさん出合うことができました。
- 実際に作家にあってファンになった!
- 自分の施設のグッズも、もっと完成度の高いものにしたいと思った。
- 同じカレンダーでも事業所ごとに色があり、比べる楽しさがありました。
- 各施設さんのいろんなグッズが見られてとても楽しかったです!

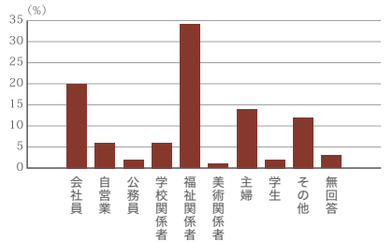
主な課題

- 来客が重なると駐車場が足りなくなってしまった。臨機応変な対応が必要。
- 予約がなかなか入らないイベントがあった。告知に工夫が必要。
- グッズ展開近のグッズ研修に参加した施設は、グッズの改良までは至らなかった。早い段階から研修に参加できるように声を掛けていく必要がある。

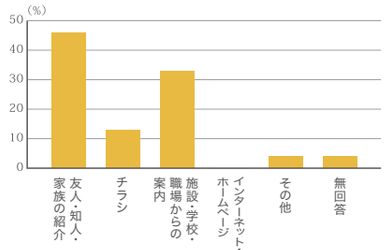
年代



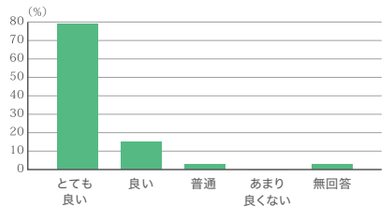
職業



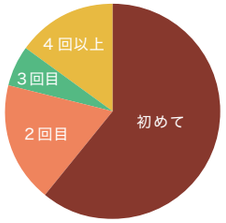
来館きっかけ



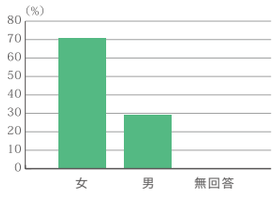
展覧会評価



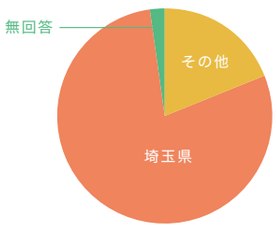
工房集への来場回数



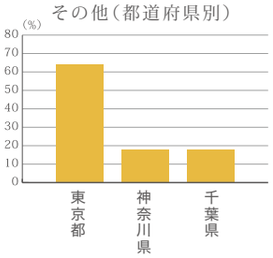
性別



どちらからお越しですか



その他(都道府県別)



③ 障害者アート企画展

第7回埼玉県障害者アート企画展

UFU SAITAMA 展

来場者数 1,313人

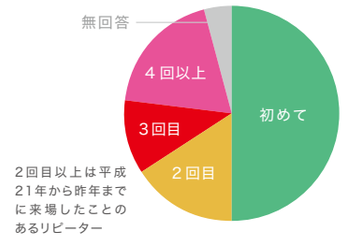
特徴的な感想

- 毎年楽しみにしています。新しい作家が増え、作家の進化も見られて、楽しかったです。
- こうした展覧会は継続化が一番大切だと思います。今後も続けてください。
- より全国的に、世界にも広げていってほしい。
- もっとたくさんの人に見てほしい。
- こんな物も画材になるんだ!と驚きが沢山ありました。
- 思いがけず作家さんご本人に会えてお話が聞けて本当に良かったです。

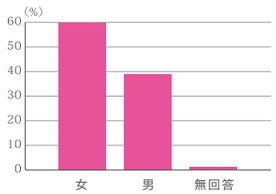
主な課題

- 立体作品に見学者(施設利用者)が触ってしまい破損があった。展示方法にもう少し配慮が必要だった。
- 県との連携の部分で明確に役割を割り振っていく必要があった。
- 広報が不十分な点があった。県に記者発表等をしていただいたが、新聞等の掲載は残念ながらなかった。

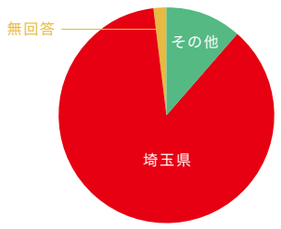
本展覧会への来場回数



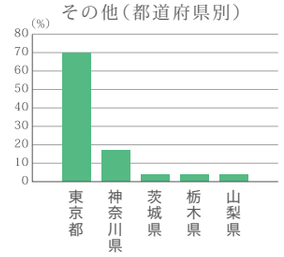
性別



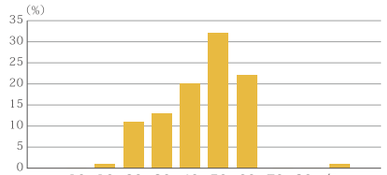
どちらからお越しですか



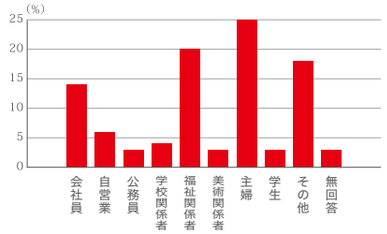
その他(都道府県別)



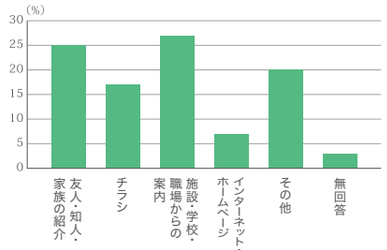
年代



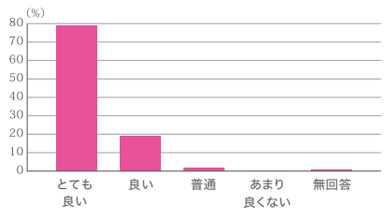
職業



来館きっかけ



展覧会評価



ご意見・ご感想など

※各展覧会のアンケートに寄せられた感想を抜粋しました。どの声も今後の支援活動のプラスになると考え、ほとんど修正せずに掲載させていただきます。

○知的障害の娘がいて、現在生活介護の施設に通っています。娘の可能性を信じていきたいと思いました。表現する力を持ち出して頂けるスタッフの皆様に感動します。
○初日に来たのはストールを狙っていました。会場、BGMを流しながら皆さんが作品と向き合っている空間はとても穏やかな空間でした。知人の作品(中村愛之助くん)もありました。ステキな時間を過ごせました。
○土日以外でも集カフェがあったらいいなと思います。
○みぬまは流れ仕事ではなく、その人にピッタリの仕事や才能を引き出してくれて、いろんな人の向き不向きを見ていて目の付け所が、やはり他の施設とは違います。
○工房集には以前から来てみたかったので、ツクズムズを見に来られてよかったです。素敵な作品にたくさん出会うことが出来ました。金子さんのぼやきを頂くことも出来ました!! 素晴らしい展覧会を有難うございました。違う職種の人に自分の仕事(障害児支援)をクリエイティブと言われたことがありました。本当にそうだと思います。
○利用者さんの自己表現について仕事を行なう中でいつも考えています。工房集さんの作品が好きで、一度どんなところで、どんな風に作品が生み出されるのか見てみたいと思っていました。実際に施設を見せて頂き、ご本人達にお会いして自分の目指しているものがなんとなくわかった気がします。
○アートは気持ちを表現したり、他者と関わるすてきな手段だと思います。今後もこのような活動を発信してください。
○事前に広報があれば見学しやすいのでは。駅からの道が分かりにくいので、地図があると嬉しい。
○いろんなコミュニケーションの場となり、ありがたい展覧会と思います。継続して頂ければと感じます。
○それぞれの作品のクオリティが高くてとても感動しました。ぜひまた来たいです。
○金子さんのぼやきを見て色々なものに目を向けていて感心したり、共感できるので、とてもファンです。お会い出来てしかもぼやいてもらえるということでとても楽しかったです。他の作品もオシャレで素敵でした。部屋が片付いたら飾りたいです。
○①全体的に作品、商品として成立するのにもう一工夫必要。利用者よりも、職員＝デザイナーの問題。 ②もっと「買う側」の身になって発想する必要がある。③展示方法＝施設の情報がもっとあってもいい。個々の作品の商品タグにもその配慮が必要。作品のキャプションに1画材・素材、2制作年、施設の名前がない。④今後、アートセンターとして機能していくうえで集まる各施設の取組みの特色、施設の情報提供ももっと丁寧にしていくべきだと思いました。
○何度か施設がやっている展示やショップに行ったことがありますが、工房内でこのようにOPENで大々的にやっているところに行くのは初めてだったので新鮮でした。作っている人と話しながらグッズが見られたので良かったです。
○障害のある方も自由に展覧会会場を動いて話も出来てとても良かったです。楽しく過ごさせて頂きました。有難うございました。
○障害者アートは福祉に理解を持ってもらうための入り口だと思います。そこからどうやって支援に繋げていくか。
○シフォンケーキが美味しかったです。
○利用者さんの織った布で作品を作ったりしていますが、もっと作品として完成度の高い物を…という気持ちになりました。
○どれもこれもみなさんが丁寧に作品をつくっているところが目に映るようです。
○この会場での出会いや感じたことが、その場だけのもので終わらないような「場」であってほしいと思います。
○利用者さんの想いをきちんと受け止めお手伝いしていきたい。
○ようやく来ることが出来ました。本当に素敵です。商品の見せ方、アイデア、とっても参考になります。どの作家さんの作品も目をひくものばっかりでした。幸せな時間をありがとうございました。
○マフラーなど個人作品にして名前(イニシャル含む)などつけた作品が気に入りました。
○小学生の息子が現在特別支援学校に通っています。将来のことを考えると就労の他にもアートとして活かせる活動も将来的ビジョンとして視野が広がるように思えました。素敵な作品に出会えて楽しかったです。またお邪魔させて頂きます。
○障害を持った方がイキイキと表現できること、そしてそれをクリエイティブな仕事となるように支えている方々の力がとてもすごいことだと思います。ただ、障害者アートと言わず、作品として、商品としてふつうに広まったり、素敵だから購入するとなる世の中もいいなと思います。私はいつも楽しませてもらっていて作品を観るたびにときめいたり刺激を受けています。
○ネットワークをつくる機会を設定することはとても大切なことだと思います。
○はじめていろんなものをみてすごいなとおもいました。
○落ち着きのある空間で居心地がよかった。
○同じカレンダーでも事業所ごとに色があり、比べる楽しさがありました。華やかなグッズ展でわくわくしました。
○くぼやまにんぎょうのさくひんがよかったです。
○県内の各地の施設がつながってよりパワーアップしているように感じます。もっと多くの方に見て頂けるよう(市役所・コミュセンなどで)機会があると良いと思います。
○色々お話が聞けて良かったです。
○息子が障害を持っています。息子と来ます。
○障害者アーティストの方が自由にご自分を表現なさることが、作品を観る側の自分を変えてくれると感じました。僕自身、製造業をしており、日々製品を作っていますが、他人を自由な気持ちや楽しい気持ちにしてくれるこのような製品を一度にたくさん見たのは初めてでした。有難うございました。
○今、障害者の方に対する社会の目がとても次元が低くなっていると思います。障害者とか健常者という言い方は無くていいと思います。
○自由な作品を作れて羨ましいです。
○もっといろんなところでの発表が増えると良いですね。県内の様々な団体がアートに関わっていて、見に来られて良かったです。
○各施設さんのいろんなグッズが見られてとても楽しかったです!
○常設のショップがあればいいのに!!と思うくらい素敵な作品が一杯でした。
○素敵な作品がたくさんあり驚きました。
○本当に鳥肌が止まりませんでした。また、明日から頑張っていこうと思えました。
○とても素敵な作品ばかりで、買い物に町へ出た感覚になり、とても楽しめました。
○今日の一歩を機に障害者の作品のみならず芸術作品に対して興味が深まりました。
○一度お邪魔したいと思っていた願いが叶いました。仲間の持てる個性を職員さん方が最大限に引き出し、アート・作品として世の中に発信していることに感動しました。

ご意見・ご感想など

○障害のある方が自由に豊かに表現し、それを各施設などで大切に支え、そしてアートとして広く外へ発信しているこのような企画は素晴らしいと思います。ありがとうございました。
○本当は一人ひとりどの人の中にも、その人の世界や空気があるんだろうけど、誰もがこんな風に自分の世界を表現できるわけではないので、普段はそんなことを忘れている。この展示会の出展者さんたちは、自分の世界の空気をこんなにも他者に感じさせてすごい。世界が楽しいことを思いだせます。
○今年は新しい作家が増えてさらに楽しく見させていただきました。
○アメリカのアール・ブリュットやヨーロッパのアール・ブリュットとの交流。マーケットへの参加、橋渡しを期待したいと思う。埼玉県から世界へ。
○こうした展覧会は継続化が一番大切だと思います。運営者は代わっても毎年開催をお願い致します。
○皆さんの進化しているのに圧倒されます。
○スタッフがおしゃべりしすぎ。
○このような企画はとても楽しく力をもらえる。しかし、知名度、県民に知らしめる努力がほしい。継続し、新しい作家を探し出してほしい。展覧会で見るのみではなく、より全国的に世界にも広げていってほしい。アメリカやヨーロッパの障害者展との交流、他国の作家さんも招待してほしい。この作家さんたちも世界の展示につなげていってほしい。
○他にも展示を企画してほしい。
○なお丸さんの作品は独創性が秀でていて面白い。あと小林カオルさんの絵はシンプルだけど参考になる。
○よいことだと思う。
○もっと大々的に行ってもよいと思いました。作風が自由でとても楽しかったです。
○素敵な作品がたくさんありました。以前から、障害者の方のアートに興味があり、こちらの美術館でも何度か展示（別の企画展）に来ていますが、もっと多くの方に足を運んでいただけるとよいと思います。また、来たいです。
○初めて寄らせてもらいました。2周しました。それでも足りないくらいずっと観ていたい作品ばかりでした。
○参加者への励ましなど、伺いたいと思った。
○楽しい展覧会なので、ポップなＢＧＭを流してくれればもっと盛り上がり話題になると思います。
○素晴らしい！の一言です。何かお力になりたいです。
○企業とのタイアップで多くの人々にアピールできるとよいと思います。
○多種多才な作品群にびっくりしました。工房集以外にも多くの施設で創作活動が実行されていることがわかり、アール・ブリュット、エイブルアート、ポコラート等、障害者が制作する作品を愛する者として心強くも嬉しくもあります。各施設のスタッフの方々には今後も頑張っていただければ幸いです。
○立体作品をもう少し目線の高さで展示して下さるといいかな。
○私は田中悠紀さんと納田さんと同じ施設で働いています。私も飛行機の絵を去年展示させていただきました。やっぱりみんなの作品一人ひとり素晴らしいと思います。その中で一番、田中悠紀さんとヤマダジュンヤさんの作品がよかった。
○こうした展覧会で飾られて、たくさんの方に観に来てもらって、本人や親などはとても嬉しいと思います。これからも素敵な作品づくり頑張って下さい。
○作者の年齢を明記していただくとなお興味がわく。
○いくつくらいの方の作品か知りたかった。
○みんなのさくひんがとてもよかったしなんかすごいなとおもいました。さくらさんのおみせのみてきれいでした。
○たのしそうでした。えらばれているひとはよいです。
○とても楽しかったです。素敵な作品ばかりでした。（上の書く欄がいっぱいなので・・・ほんとはもっと気に入った作品がありました。）それぞれの作品に画材、素材の説明を付けてもらえるとありがたいと思いました。
○毎年楽しみにしています。力作が多くて励みになります。
○西川さんの“花”はとても惹かれるものを感じます。うちに飾りたいと強く思いました。ありがとうございました。
○素晴らしい!!どれもが独創的でオリジナリティーに溢れている。思わず笑ってしまう、ユニークで奇をてらわない、飾り気のない作品ばかりで、内から爆発するエネルギーを感じる。色彩感覚の素晴らしさにも感動した。鋭い感性の中で作られた作品の中には、所有したいと思うものがたくさんあった。今後の展覧会にも期待したい。
○自由に表現する楽しさが各々作品から伝わって来ました。このような企画は貴重です。鑑賞の機会をありがとうございました。
○今回の作品は芸術的にレベルが高い作品が多かった。
○作品が沢山ありどれも素敵でした。細かい作業を必要とする作品が多く、一点一点じっくり見入ってしまいました。
○常設展にしても良いのでは！作家の年齢を紹介文の中に入れていただけると嬉しいです。
○制作者様の年齢がわかれば、またいろいろと違った見方が出来るのではないかと。
○素晴らしい作品を見せて頂きありがとうございます。また、来たいと思います。
○すべて個性があって楽しかった。
○東上線、副都心線、日記。どれも目にはっきりうかぶ作品でした。
○その他、今村明美、柴可南子、田中貴之。それぞれの感性、個性が出ていてすごいなと思いました。また、来年も楽しみにしています。
○それぞれが違っていて個性を強く感じました。
○どの作品もそれぞれ個性があって、見ていて夢中になるくらい素敵でした。こんなにたくさんの作品を見るのは初めてだったのでとても感動しました。またぜひ来たいです。
○見てワクワクする作品ばかりでした。表現することで、本人の気持ちや心が軽くなるのか知りたいと思いました。
○自分の子供と同じような絵の描き方の方が何名かいらっしゃったことに驚きました。
○作者自身の中からわいてくる衝動を感じる。
○僕もアーティストとして負けていられません。とても楽しかったです。また、来たいです。
○トラックがとてもかっこいい。
○皆さんがハッピーな色づかいでよかった。
○身体的にイスがほしい人もあると思うので、イスがあると良いと思います。
○初めてアート企画展に来ましたが、色々な作品に触れ豊かになりました。ありがとうございました。
○選べないほど輝く作品ばかりでした。ありがとうございました。
○とってもオリジナルな作品がたくさんでした。
○障害者の方が毎日豊かに送っているのがわかって、大変感銘を受けた。
○とてもよい！
○多くの作品、各施設の作品を見ることができて、とてもいい。
○一人一人個性あふれる作品で、世界が広まりました。あっという間に時間が過ぎました。
○表現すること。そのための環境を整えることはとても重要だと思います。ありがとうございました。
○本当にレベルの高い作品展で、障害に関係なく普通に面白い作品ばかりでした。野本竜士さんの作品も好きで、お金を出して買いたいなと思いました。（アートとして強いと思いました）
○本展を県内の障害者（在勤・在住）の公募展にしたらどうでしょうか。毎年出展者がほぼ固定されている気もします。（作品は良いのですが）大阪堺市のビッグアイ展は公募展であり、年々水準の高い作品が選ばれています。（国際公募的）
○うふ、と思う作品。それぞれの思いが込められていると思われる作品が多くて、見ていて楽しかったです。埼玉県内にきっと、もっともっと多くの芸術家がいると思うので、たくさんの人の作品を紹介して欲しいです。今後も年に何回か、このような企画があると良いと思います。
○今回の展覧会、ずっと楽しみにしておりました。企画してくださりありがとうございます。
○こんな物も画材になるんだ！と驚きが沢山ありました。たくさんの個性的な絵や作品がとても面白かったです
○作家紹介のパンフレットを一人一人確かめながら見ることができ良かったです。私も絵を描きたくなりました(笑)
○会場にいた人が偉そうにスタッフの人を、個人名に白い紙を張っている作品のところに連行してきて「こういうのは福祉の倫理で美術ではない」「こうするなら出すべきではない」「この人（モデル）に言っておけ」などと一方的にデカい声で言っていたのが、大変不快かつ疑問に感じた。まず、「美術ではない」とは誰が決めるのだ。木の枝の「作品」はこうして並べているから美術なのか。並べてるのは「作者」ではないのに。別に障害者であるとかではなく、美術、展示という枠組みについては常に考え続けるべきことであり、少なくともこの人のように一方的に決めつけることは、それこそ「美術ではない」。そして、「出すべきではない」とは何事だ！お前のほうが表現制限をしているのではないか。スタッフの人も「はい」と言ってしまっていたが、モデルの人たちに言う必要はないと思うので、屈することなく頑張っていただきたい。個人的にはこの白い紙の貼り方は雑で露骨なので、よくないと思いました。むずかしい。皆さんで考えてください。
○表現力のすごさ、伝わり方、すべてにおいて素晴らしい。〝無題〟は本人が伝えられていないんだろうか。見た私には何となく理解できた。
○どの作品も興味深く、作者の感じていることをもっと知りたくなる気がします。
○すっごく素敵でした！
○どれもみな素晴らしかったです。
○作者の年齢も知りたいね。作品の素材についても。木、粘土、ほか…知りたい。
○この展示はやっぱりいいですね。
○様々な作品があり、また見に来たいと思いました。
○またこんどいきたいです。
○〝これからの社会〟、〝人が生きること〟を体現しているような、エネルギーを感じることができ。とてもうれしいです。
○知人に勧められて初めて来ました。絵を見ること、描くことが好きなのでとてもワクワクした感想を抜粋しました。どの声も今後の支援活動のプラスになると考え、ほとんど修正せずに掲載させていただきます。

※各展覧会のアンケートに寄せられ

ワクして見せていただきました。作家紹介の文章を見ながら、とても刺激的で有意義な時となりました。皆さんにお会いしてみたくなった。また来たいです。ありがとうございました。

○今回の展覧会を本当に楽しみにしていました。今回も素敵な作品がたくさんあって、ついつい見入ってしまいました。また次の展覧会にも来場したいです。ありがとうございました。

○目立つようにもっと宣伝したほうが良いと思います。

○この展覧会もっと宣伝してもいいと思います。思いがけず作家さんご本人に会えて本当にお話が聞けて良かったです。（石井章さん）

○作品を利用したグッズなどがあるといいと思います。

○どれも素晴らしい！！

○いつもみんなの絵を見て、自分の中の表現？とかしてみたいものの、無さに気が付くんです。勉強？ヒント？になります。素晴らしいです。

○地元で障害者サポート団体さんとかかわる機会があり、利用者の方たちの自由な表現にとても興味を持ちました。こういった展覧会はもっともっと多く開催されたら楽しいですね。今回の会期はとても短かったですが、もっと長期間開催されてもいいものですね。とても楽しかったです。

○毎回多彩な表現が表れていて、とても良いと思います。それぞれの施設などで、活動を継続していることの現れだと思います。個人の作家さんでも、以前と表現が変化しているのも見て取れる方もいて素晴らしいと思います。

○一人一人の方の内面や思いがほとばしるように表現されていて、引き込まれました。表現することを心から楽しんでいるのだろうと想像しています。

○小林ちゃん、無題で何かを書いている。何を書いているかなあ？聞きたいなあ。

○以前にも書きましたが、もっとたくさんの人に見ていただきたいです。そのために福祉関係者内にとどめず、教育・学校関係者にもチラシを配布（各学校、特別支援学級・学校へ）してほしい。見る価値があるから、広報活動をしっかりやってください。お願いします。

○作品の中から商品にしても、ステキなものがいっぱいでした。

○色遣いがとてもきれいな絵が多く、見ていてとても幸せな感じになりました。ほっとするあたたかい作品がたくさんありよかったです。

○とても個性的な作品ばかりで、見ていて心が和みました。

○今日は偶然立ち寄ることができ、とてもよかったです。もっと多くの人に知ってもらい、素敵な作品を見てもらえる機会が増えることを望みます。

○たくさんの個性がありました。作品として展示されていると、〝作家〟になれて息子が嬉しそうでした。素敵な作品がたくさんありました。

○デパートとか百貨店など人が多いところでは。

○楽しかったです。

○毎回楽しみにしています。

○創作発表の場を与えていただき大変ありがたく思います。本人も生きがいとして努力できています。

○ボリュームがあって見ごたえがありました。

○素晴らしい作品がたくさんあります。これだけの仕事をする人たちです。各人が自己表現している訳で感心しました。何が障害者なのでしょうか？私にはこれだけの作品は作れません。そんなことを考えると（思うと）私のほうが障害者です。障害者!!表現の仕方を変えたらどうですか？

○表現活動は指導者他の人間関係によるところも大きいかもしれません。多くのチャンスが皆が得られますよう願っています。

○初めて見させていただきました。あふれるような才能が満ち溢れて感動しました。何と発色の良いことでしょう。どうぞこれからもどんどん作品を発表してください。そして、ご指導の先生方に感謝です。又、お目にかけたいです。

○ふつうの人ではおもいつかない作品でした。

○作家紹介にはふりがながありわかりやすかったのですが、作品には無く作家がどのようにしてこの作品に取り組んできたか？など。小幡さん、おばたさん？こはたさん？など探しにくい方がいた。

○材料はどんなものでやったか。絵具、コラージュどんなふうに作ったか。

○今回で3回目です。私も表現活動やってみたいと思いました。

○絵の指導や造形の指導が入ることで、画一的になってしまった団体があるのは残念である。一定の自由度があるとより生き生きして面白いです。

○どの作品も素晴らしかったです。胸に迫ってきました。

○6歳の息子も楽しんでみていました。

○ありがとうございます。来て本当に良かったです。

○正面入り口にももっと目立つお知らせを出してもいいのではと思います。

○今回初めてこのような企画展に来ましたが、どの作品も作家の方の思いが込められていて、すべての作品から生きる喜び、自分を表現することの幸福感が伝わってきました。障害のある方から、その秘められた独自の力を見出し、大切にする職員の方々の見守りも素晴らしいと思います。この企画展を開催するための様々なご苦労もお察しいたします。ありがとうございます。継続していくことも大変だと思いますが、今後もできる限り作品を観に足を運びたいと思います。これから楽しみにしています。
（作家紹介の冊子も良かったです）

○色彩感覚にすぐれた子。丁寧な作品。ただただ感心しました。ありがとうございました。

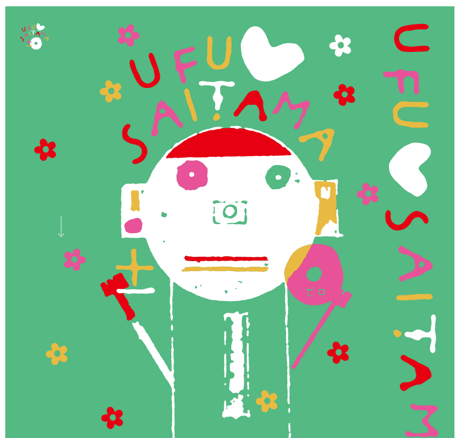
○どれも素敵な作品ばかりでした。政策の様子なども拝見したいです。

○丁寧な表現はどれも見入ってしまいました。

○とても楽しいです。時間配分のミスをした自分がうらめしいくらい・・もっとじっくり観たい作品ばかりです

○素晴らしかったです。さらにもっとたくさんの方に見てほしいと思いました。

○母の紹介で初めて来ました。自分には表現できないようなものばかりで面白かった。驚くような作品ばかりで次回の作品も楽しみです。



4 3ケ所同時開催展

UFU♥SAITAMA ±0³（参上）展 川口・川越・春日部

来場者数 1,844人

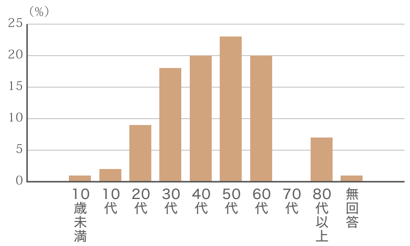
特徴的な感想

- 施設の方が丁寧に説明してくれたので、楽しくのびのびと観ることができました。
- 県立美術館より、小規模でじっくりゆっくりみせていただくことができました。
- 複数の会場や異なる展示方法で、多面的に作品を鑑賞できたのでうれしかったです！
- アーティストトークすごく楽しかったです。
- 美術館での開催も良いですが、今回のような喫茶等での開催も気持ちが落ち着ける感じで好きです。

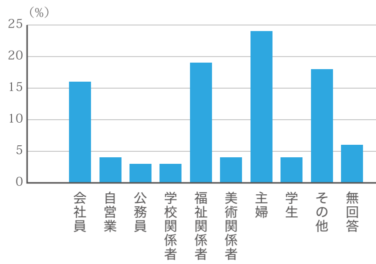
主な課題

- 3ヶ所同時に開催したことで、搬入や設営、監視委員など運営側の割り振りが難しかった。
- 川越の会場が一番広いことを意識したことで、作品数・作家数に偏りが出てしまった。
- 会場によってアーティストトークの参加作家に差が出てしまった。

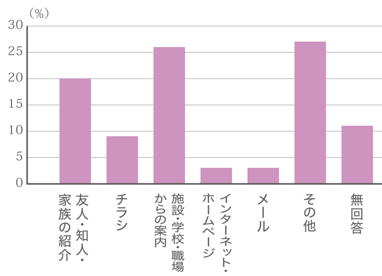
年代



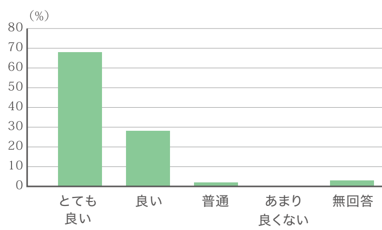
職業



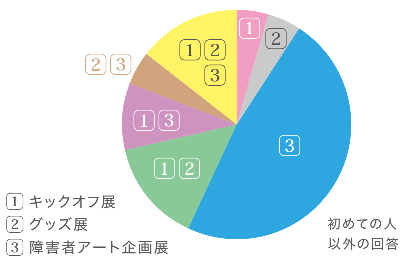
来館きっかけ



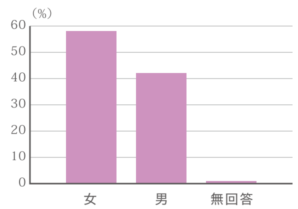
展覧会評価



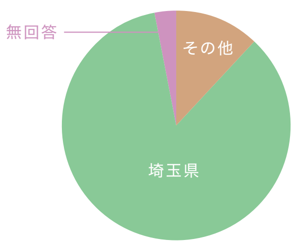
本年度来場した展覧会



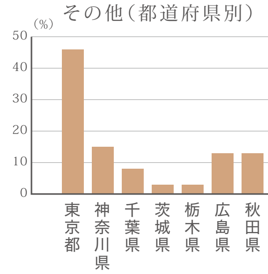
性別



どちらからお越しですか



その他（都道府県別）



ご意見・ご感想など

川口会場

○工房集の作品展は、私のなごみTIMEです。
○猫の写真をたくさん貼っている作品がとても可愛らしいです。石井章さんの作品がとても細かく描かれていて、春花と小鳥たちが綺麗な絵だと思いました。
○工房集の雰囲気が暖かくて素敵でした。
○作品を見せあう事による刺激があると思うのですが、石井さんの作品は他の2カ所にもてんじしては。また逆も川越の作者のものをここで展示するような試みもどうでしょうか。
○楽しく拝見させていただきました。
○わくわくして何か作りたくなりました。
○さをりの織の糸がカラフルできれいだった。
○ギャラリーを作るっていい！
○伊藤裕さんの作品。とても大変な作業だし危険な作業かも知れないのですが、もう少し値段が安いと手に入れやすいのでは？
○何人の方が「こんにちは」と挨拶をしてくれて気持ちが良かった。
○工房集のことを知ることができて良かったです。
○機会があったらまた来たいと思います。良い時間でした。
○このような場を見る機会があって来てみて良かったです。普通に生活していたら、知らないでいる世界が沢山ありますね。又、伺いたいと思いました。
○昨年12月に、近代美術館の展示を始めてみました。感動しました。作品が生まれる場所に来られてよかったです。その時に石井章さんと少しお話をしました。近くにこういう場所があることを知り、嬉しく思います。
○制作している様子を見学したい。作家さんとお話ししたい。どんな人たちが作っているのかもっと知りたい。
○施設の方がていねいに説明していただいたので、楽しくのびのびと観ることができました。
○また来たいです。こんな素敵な空間で制作ができてうらやましいです。
○ステキな作品に出会えてうれしいです。
○素晴らしい作品の数々に感動しました。次回も楽しみにしています。
○作品の種類が増加したと思う。
○この様な展覧会をこれからもどんどん続けてください。
○前から工房集に来たいと思っていました。毎日の生活・仕事の中でアートと一緒に歩いていけたら幸せだとここにきて思いました。今度はお母さんたちと一緒に来たいと思いました。

川越会場

○外に出てから記入するので、イメージが薄れて残念です。
○アンケートは外へ出てから書くので、その都度チェックできなかったから残念。とても印象に残る作品もいくつかありました。障害は全然関係なし。作品は見事でした。
○障害を持った方のアートに参画していきたい。
○とてもよかったです。観に行ってよかったです。
○毎回楽しみにしています。
○とても表現力が豊かで吸い込まれるような作品でした。
○もっと展示する場所が増えると良い。
○色々なタイプ(立体・平面)の作品があり、とても楽しめました。たくさんの人に見てほしいなと強く思いました。支援の仕方について具体的に知りたい。(現場の様子など)
○とても良かったと思います。これからも機会があったら来たいです。
○毎回、驚かされています。
○県立美術館より、小規模でじっくりゆっくりみせていただくことができました。
○拝見していて、作品の中に入っていける作品と、そうでない作品、これは苦手と感じる作品、それぞれです。それがとても強い個性なのでしょう。必ずしもすべての作品に対してではありませんが、障害者作品としてという意識なしで見ている自分に気づきました。
○普段見られないような作品があってよかったです。
○3ヶ所で同時開催ありがとうございます。今回は2カ所を巡りました。工房集では参加さん本人とお話をすることができました。美術館では大型の作品を沢山拝見できました。複数の施設や異なる展示方法で鑑賞させていただけたおかげで、多面的に作品を鑑賞できたので嬉しかったです！
○①絵、作家紹介に番号を入れるとアンケートに答えやすい。②筆記の机を。
○今日観ることができて良かったです。
○全ての作品がカラフルで、非常にクリエイティブなしごとと感心しました。
○とても素晴らしい作品でした。力を頂きました。
○表現活動にはルールや決まりはなく、ここの作品が何かから解き放たれて輝いていてずっと見ていたくなる。その人を周囲が大切にしている世界が見えてきて、心が落ち着きます。ふじみ野市でもそういう場所ができてほしいし、作りたいです。
○なんでも作品になると思った。
○皆さん個性的で、これからも創作活動を頑張って下さい。
○様々な関わり方で、ご本人の新たな楽しみ、新たな一面が引き出されるんだな～と思い、大変刺激を受けました。すごい大切なお仕事だと思います。ありがとうございました。
○障害があるから描ける、できるのではないかな？
○心が純粋で、人間臭さと、人間らしさの出ている飾り気のない作品が多いと感じました。
○たくさん創って命燃やしてください。
○美しい。心が豊かになる。
○どの絵も色彩がとても美しいと思いました。非常に細かく描かれている絵が多く、しかも統一性があると感じました。
○この様な表現活動をもっと世の中に広めてほしいです。私にもできることがあったらぜひ仲間に入れていただきたいです。楽しみにしています。元気もらいました。
○自由で本能的で良かった。
○これからも頑張って下さい。
○思いがけず、色々な作品に接して楽しかったです。
○とても色彩が豊かで素晴らしい作品だと思います。
○皆さん。自分の世界を表現されていて素晴らしいと思います。
○作業所や暮らしの場での生活が、作者たちの人生を豊かにしていることが作品を通じて伝わりました。
○年を重ねるにつれて表現の幅が出てきていると感じました。
○これからいきたいです。他のものも見たい。
○自分では表現できないであろうと思える色彩感覚。何とも言い表せないですが、美しいと思いました。又、機会があれば見せていただきたいです。ありがとう。電車の模型とあの絵は素晴らしい。びっくりしました。
○ただただ続けられることの凄さを感じました。
○天才。元気で頑張れ。
○細かな表現、大胆な表現、素晴らしいものを見せていただきました。技術向上のために苦労している様子も分かると。なおよいかと思いました。初期作品→最近の作品と時系列にみせるなど。
○「自由」とは何か。「生きる」とは何かを目の前でつきつけられた。答えは「楽しむ」だった。
○高谷さんと大串君と横山君と箭内君の作品がカッコいいと思いました。
○障害を持った人が、何気ない動作でできたものは、本当に価値のあるものだと感じさせてくれました。今後も障害を持った人たちが社会に繋がれる展覧会をどんどん作っていってください。
○とてもステキな作品が多く、自分の家に置きたいなと思いました。
○作家さんの表現の変化がわかるような展示も見たいです(立体や平面の同時展示)。個人で活動されている方の展覧会情報も知りたいです。アーティストトークすごく楽しかったです。できたら全員のお話も聞きたかった
○とてもよかったです。ありがとうございました。
○トークが楽しかったです。
○たのしかったです。
○一般の方にたくさん見て頂けると嬉しいです。
○皆さんの個性が感じられます。
○参考になりました。
○アート展というと絵しかないイメージでした。しかし、今回観て絵に限らず何でもアートになるのだと感じた
○美術館等に飾っていただけることは本人の励みになり、とてもありがたいことだと感謝しています。ありがとうございました。
○何とも言えない愛情や優しさを感じる作品が多く、本当に良いものに出会った気がします。ありがとうございます。
○とてもよかったです。作者の紹介が、作品を身近に感じられました。
○一周周ってもう一度一つひとつ見ました。発想がすごいと思います。
○ポストカードにしてほしい。
○認識能力が所詮「健常者」と呼ばれる人よりもはるかに優れている上に、作品に仕上げる技術も世間の言う「芸術家」より本質的に素晴らしいと感じた。
○なかなか凄い作品ばかりです。色づかい、形がユニークできれいです。
○自分も描きたくなりました。
○とても感動しました。これからも素晴らしい作品を作って下さい。
○圧倒的な集中力、観察眼、純粋さ、そして、それを見守り支える人々の愛が感じられて(それなくして作品は作れないので)、言葉を失い感動しました。
○どの作品も素晴らしかったです。
○よかった。
○細やかな感性に驚きました。
○自由で素敵な作品がたくさんありました。市内の中学生には「福祉体験」の授業がありますが、多くの中学生に見てほしいと思いました。作品、作家のプレートに制作時もしくは現在の年齢があると鑑賞の参考になると思います。
○楽しそうに熱中して取り組む姿が目に浮かびます。独創性、想像力が素晴らしい。
○ぐうぜんみせていただきました。明るくて一生懸命で楽しい気持ちになりました。ありがとうございました
○どの作品もとてもすてきでした。
○色彩鮮やかでハッピーな気持ちになりました。全てとてもよかったです。
○いっぱい楽しんでください。
○作家紹介の順に展示されていると見やすい。
○個性あふれる良い作品ばかりでした。
○ワンダフル！！の一言。この発想力、表現力、スゴイ！彼らの大いなる活動を祈る。
○自由に形作っている作品と、誰かの手(手伝い)が入っているのかと思う作品と・・・小さなものをコツコツ描いていくエネルギーを感じる作品といろいろ観られて楽しかったです。
○色づかいが素晴らしい。
○色とりどりできれい。手ぬぐいなどのグッズにしたらステキかもと思いました。

春日部会場

○ゆっくりできる雰囲気の中で作品が見られて、とても良かったです。コーヒーも美味しくいただきました。ごちそう様でした。
○喫茶のランチも美味しかったです。アートに囲まれてお昼を食べられるのも良いです。
○全体的に良い作品があった。
○みなさんの作品が繊細でとてもすばらしかった。ありがとうございました。
○抽象的な絵が多かったと思いました。
○明るい清潔感のあるお店での展示で、とても良かったと思います。
○私の願い。うさぎと馬の絵を飾って欲しいです。
○また書きたい。楽しいです。
○作家さんひとりひとりの個性が表現されていることに感動するとともに、作家に関わる人の想いや考え方で大きく変わってしまうと思う。アートは生きることと思うが、それしかできないと思う人がいるとか・・・。
○色々な画材を使った作品があり、発想の自由さが感じられた。絵画だけではなく、色んな種類の作品があり、観ていて楽しかった。作品の販売もあって良かった。
○日常の忙しい時間から切り離された"ホッコリできる空間"と展示された作品は輝いていてパワーを感じることができて、作品展を続けてほしいと思いました。
○これからも自由に表現していってほしいです。
○作品全て、素敵な物ばかりです。いつも楽しませていただいています。美術館での開催もとてもアートな感じで良いと思うのですが、こうした喫茶等での開催も気持ちが落ち着ける感じで私は好きです。これからも楽しく笑顔で頑張って下さい。
○自由にのびのびと表現されていて、とても良いと思う。心の中を映し出すようにそれぞれ感じていること、見えていることが違うのだなと感じて面白かった。
○ひとりひとりの作品をとても大切にしてくださっていることにとても嬉しく思いました。たくさんの人が見られるようにと思いました。
○作家紹介で誰がどこの施設で活動しているのかわかるとよかった。全体的にとても良い作品展でした。
○楽しかったです。
○みんなの絵は上手でした。
○絵画の展示会ですが、まだ続けてほしいです。

※各展覧会のアンケートに寄せられた感想を抜粋しました。どの声も今後の支援活動のプラスになると考え、ほとんど修正せずに掲載させていただきます。

Ⅲ事業成果まとめ

4 振り返り

協力委員12

五十音順

（社福）昴＆NPO法人カウント5　代表

石平裕一

協力委員として、作品選考会などに参加させていただき、作品の豊かさに驚きました。また委員のみなさんとのお話の中では、これまでに自分になかった視点や情報などを得ることができ、自分の学ぶ場にもなりました。とても貴重な経験をさせていただきうれしく思いました。

モッキンバード法律事務所　弁護士

岩本憲武

この1年間に勉強会や講演を通じて著作権と障害者アートとの関わりを考える機会を与えられたことは、私にとって「法律は何のために存在するのか」に立ち戻って考える契機となりました。障害のある人がいきいきと暮らし、そこから生み出されたアートが多くの人を楽しませるためにこそ、法律という「ルール」が活かされなければならないことを再確認しつつ、今後も障害者アートを法律の専門家という立場で支えていければと思っています。

（一社）埼玉県セルプセンター協議会副会長

大畠宗宏

私は日頃障害の重い人たちとかかわっていますが、障害の重い人たちだからこそ、働く場が保障されることが大切ではないかと思っています。埼玉県アートネットワークのこれらの企画で、アートが障害の重い人たちも主体的に取り組む活動になっていて、他の人との多様なコミュニケーションが生まれたり、グッズに生まれ変わったり、ある時はアーティストトークを通して学びの場になったりと、まさしく多様なものが生まれていると感じました。障害の重い人も絵や作品を通して社会との交流が可能となっていることに、大きな期待を感じています。

埼玉県福祉部障害者福祉推進課　課長

荻原和代

「アートセンター集」が設立され、障害者アートに関する多くの相談に的確に応じられる体制ができたこと、県内施設が連携して質の高い美術展・研修会を開催し県内外から好評を得たことは、平成21年度から障害者芸術活動を積極的に推進してきた本県の新たなムーブメントとしてうれしく感じています。今後とも創作・鑑賞の両面で障害者アートがしっかりと根付くよう、効果的に連携したり役割分担して進めていきたいと考えております。

埼玉大学教育学部教授（絵画及び美術教育）、画家

小澤基弘

一年間委員として協力させていただきましたが、十分なことはできなかったと思います。自分がこれまで培ってきた絵画に対する考え方や感性を通して、障害ということを度外視して、純粋に平等な表現として障害者のアートを捉えてきました。特にアート表現については、その質の良し悪しは障害のあるなしに全く関わらないと私は考えています。いいものはいい、ただそれだけです。学ぶことが多々あった一年だったと思います。セミナーのディスカッションもとても勉強になりました。これからも工房集さんの仲間たちを始め、埼玉県下の同じような仲間たちの表現を見せていただき、吸収させていただければと思います。

彫刻家、元埼玉県立大学教授

酒井道久

この十数年、埼玉県立大学で学生と共に障害者アートを学んできましたが、今回、協力委員として多くの作品に触れ、またセミナーでは改めて多くの施設でアートが取り上げられ、素晴らしい成果を挙げられていることを再確認できました。私はアートを分野で分けることは好まないのですが、障害者アートがこのように注目され、さらに今後の展開を計るなら、障害者アートの定義をもう少しはっきりさせる必要があるかなと思いました。

con＊tio（コンサルティング事業）

杉千種

埼玉県障害者アートマネージメントセミナーでのサポート役に始まり、今回のアートセンター集では毎月の定例会とグッズ会議など、みなさんの取り組みの発展を身近なところで見させてもらえることをうれしく思っています。表現活動や商品作りの〝担当者〈複数職員のチーム体制〈施設全体〈地域の複数施設…〈社会全体〝日常の仕事の中での変化は、簡単ではありませんが、意識を共有する協力者が増えればそれだけ大きな力になります。この当たり前の図式が、時間をかけて地道に実現されていく気配を感じています。ひとつひとつは小さな課題解決でも、目的を持つことで、どれも社会を動かすことに通じているはず。今後も楽しみです！

美術家、アートディレクター

中津川浩章

5つの展覧会をキュレーションして感じたことは、スタッフ一人ひとりの資質が大きく変化してきたことです。企画展に関わり活動していく中でたくさんのアートに触れ、作品の見方が変わり、それを言語化することや互いのコミュニケーションの場が生まれることで、作品をより深く理解する力が養われていく。それぞれが主体的に動き、ポイントを絞って的確な判断をする。おのずと展示のスキルも向上します。表現活動をサポートしていく経験によって、スタッフ自身もクリエイティブな存在に変わっていったといえます。埼玉県障害者アート企画展ディレクションを3年間担当してきましたが、そこで蒔かれた種子は、いつの間にか芽吹いてゆっくりと成長していました。その果実はスタッフたちだけでなく、それぞれの職場を含め周りの人たちの中にも、思っていた以上の化学反応を引き起こしたのではないかと実感しています。

NPO法人CILひこうせん職員、行田市議会議員

野本翔平

埼玉県では平成21年の「障害者の自立と社会参加のための芸術・文化を核とした施策への提言」を起点として、アーティストの発掘と支援、そして施設職員の育成などに取組んだことによって、沢山の人材が育ち活躍していることを実感しました。障害者アートを通じて多様な人たちが緩やかにつながり活動している埼玉の状況は大変興味深く、今後も継続的な活動をしていくことでさらに大きな成果が得られると思います。

埼玉県立近代美術館学芸員

前山裕司

いま日本の障害者のアート活動の領域で、何が必要なのだろう。華々しいアピールではなく、地道な活動を積み重ね、ネットワークを密なものにしていくことだと思う。それが2020年の先に続くレガシーとなるはずだ。「アートセンター集」の設立、「UFU♥SAITAMA±〇」展および3ヶ所同時開催の「UFU♥SAITAMA±〇³（参上）」展と、一見華やかに見える今年の活動だが、本質はこれまで築いてきたネットワークと埼玉県の調査活動などを土台とした着実な歩みといえる。

（社福）みぬま福祉会工房集管理者

宮本恵美

工房集を立ち上げて15年。内外ともに認められた存在になり、モデル事業の実施団体として位置付けられ、アーティストセンター集が設置されたことは夢でもあったので、大きな喜びです。この1年間の事業展開が予想以上の成果がありましたこと、協力委員でもありますが、この事業の統括の立場として、多くの方のご協力、ご尽力のおかげだと感謝しております。ありがとうございました。これからも障害のある方のアート活動のために歩んでいけたらと思っております。引き続き宜しくお願いいたします。

（社福）みぬま福祉会総合施設長
埼玉県発達障害福祉協会相談支援部部長

山路久彦

障害者の芸術活動モデル事業にご参加、ご協力いただきました皆さま、1年間ありがとうございました。協力委員ではございますが、受託法人総合施設長及び埼玉県発達障害福祉協会相談支援部部長として感謝申し上げます。埼玉県ではみぬま福祉会工房集他多くの事業所で障害のある方の芸術活動を支援し展開して参りました。今までは地域で生活されている方からの相談もありましたが十分応える事が出来ませんでした。しかし、モデル事業を受託した今年度は相談支援とモデル事業が連携し細やかな対応が可能となりました。こんなにも埼玉県内で充実した活動が出来るとは思いませんでした。これからもみぬま福祉会工房集の専門性と機能、地域ネットワークを生かし更なる展開を図っていけたらと思っています。

（社福）みぬま福祉会　アトリエ輪

赤羽幸治

アートネットワーク会議を通して、多くの人とのつながりが深められ、また1歩前進し、より多くの方々に障害者アートを発信した1年だったと思います。実施されたすべての企画展では、作者やその家族、施設職員に大きな励みや自信へとつながっています。これからもたくさんの方々を巻き込んで、この埼玉の障害者アートを盛り上げていきたいです。

（社福）昴＆NPO法人　カウント5

石平裕一

TAMAP±〇の活動では主に西部地区の取りまとめを務めさせていただきました。何名かの新しい作家さんの出展のお手伝いをさせていただき、本人だけでなく家族、事業所のスタッフの皆さんにも喜んでいただけたことがとてもうれしく思います。また作品展も大勢の

TAMAP±〇メンバー26

五十音順

方に観に来ていただき、様々な反響をいただきよかったと思います。力足らずでしたがとても充実した活動でした。

NPO法人なまずの里福祉会　ひだまり
石原麻衣

事業所毎に活動を行うことは難しいが、今回のようにそれぞれが集うことで幅広く深みのある企画展やセミナーを開催出来た。また、集団で運営し分担できるという安心もあったおかげで、作者の方とゆっくり話をする時間もてた。活動を知っていただく中で、より身近で新しい出会いや発見があり、ご意見も多くいただいた。一方で、所属している市内ではまだまだ活動が浸透していないことを痛感した。今後はその方々とともにつながり、アートを広める活動を行っていきたい。

川口市心身障害福祉センター　わかゆり学園
奥山　勝

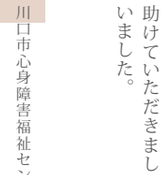
埼玉県全域からメンバーが集まって、アート活動について自由に情報を発信したり共有したりする場となっており、色々な表現活動の取組みを知ることができました。また県内でアート活動が盛んに行われていて、一般の方の注目度も高まってきているということを強く感じました。今後はアート活動をしてみたいという方のサポートと、このアートネットワークの力を自分たちの事業所でどう活かしていけるかが課題と感じています。

（社福）新座市障害者を守る会
多機能型事業所　こぶしの森
久保昌隆

今年1年を振り返るとこぶしの森から12月に開催された「第7回埼玉県障害者アート企画展」並びに先月開催された「3ヶ所同時開催」展に2名の利用者が初めて選ばれました。今後とも楽しくアートを描く事をモットーに頑張ります。

NPO法人ゆりかご
上原秀一

TAMAP±〇の実行委員会に年度の途中から参加させていただいて、正直知らないことばかりでしたが、企画会議から作品選考、作品展示、搬出までイベントの流れを経験させていただき、勉強になりました。会議など休みがちでご迷惑をおかけしましたが、温かい皆様に助けていただきました。ありがとうございました。

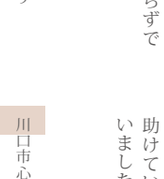


（社福）めだかすとりいむ
小林千穂

私達の施設では、以前から障害のある方たちの表現活動に興味がありましたが、メンバーの作品をどのように形にしていったらよいか分からず、模索していました。TAMAP±〇には途中からの参加で、月1回の会議に参加する度に、県内から集まった施設の方々の表現活動に対する考えや熱い想いに触れ、その強い団結力に頼もしさを感じました。実際に2月に行われた展示会では、私達の施設のメンバーの作品を展示し、施設の中でも障害のある方の表現活動に対する考え方に変化がみられ、日々の支援の中でもできることが広がったように思います。今後もこの活動に参加させていただき、メンバーの表現の可能性を模索し、日々の支援に活かしていきたいと思います。

（社福）皆の郷　川越いもの子作業所
小林玲子

今年度、初めて表現活動を行っている部に移動しアートネットワークに参加しました。福祉とは？アートとは？と考える一年だったと思います。毎月あった定例会や、4度の展覧会を通して他の施設でどのような事を行っているのか、大切にしているかが分かり、また展覧会を開くには何が必要か等、大変勉強になりました。施設内の意識の向上と、地域とのつながりを大切にし、障害のある方の表現活動が広がっていくことを願います。

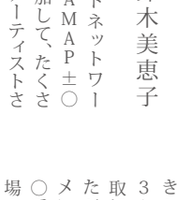


（社福）皆成会　光の園
田邊純子

光の園では17年前から表現活動をしています。その人らしさを表すことを目的に始まった活動は、14年前に美術指導の先生を迎えさらに活発になっています。独自に作品展を開催してきましたが、埼玉県の障害者アートに作品を出展するようになってから多くの外の方に観ていただく機会が増え、利用者の皆様の励みになっています。これからも素敵な作品をたくさんの方々に観ていただくように私達支援者も応援していきたいと思います。

（医）双里会　多機能型事業所わっくす
豊田亜紀

できる限り主体的に関わろうとする中で、それぞれが必要な役割を担おうとする積極性。マンパワーを補い合いながら施設間に自然と生まれるサポートの体制。そういった連携と一種の統率感をもってTAMAP±〇のネットワークが広がっていると感じる。また、自分の施設や利用者のアピールのみにとどまらず、当事者アーティストを含めたすべての参加者で企画を盛り上げようとする一体感がある。様々な施設が参加する中、こうしたフラットな関係性を保ちながらボトムアップの仕組みが形作られ、を持った「仲間」に会える。同じ方向を向いて生産的な会話ができる。雑談のような会話の中に学びがある。素敵な場だ。



（社福）新座市障害者を守る会
生活介護事業所　けやきの家
鈴木美恵子

アートネットワークTAMAP±〇に参加して、たくさんのアーティストさんと出会う機会をいただきました。企画展に選ばれた人以外にもたくさんのアーティストさんがいます。みなさんの作品はどれも素晴らしく、表現方法はいろいろです。これからも新しいアーティストさんに出会い、出会えたみなさんの作品を、よりたくさんの人に知っていただけるような活動を目指していきたいと思います。

（社福）みぬま福祉会　大宮太陽の家
佐藤佳織

今年度は近代美術館での展覧会の他にも3ヶ所同時開催という新たな試みは準備が大変だったかもしれないけれどたくさんの作品に出会う事ができる良い機会となったと思います。埼玉県の施設が集まって表現活動について意見を交換し合う機会はなかなかないので、TAMAP±〇の活動を通じてこれから参加する施設が増えて仲間の表現活動がたくさんの人たちに知ってもらえる様になっていくとうれしいです。

（社福）戸田わかくさ会
清水征也

TAMAP±〇の魅力は、表現活動の支援者としての活力を得られる場だということだ。私の法人には80人余りの職員がいるが、その全員が表現活動の取り組みに関心を持っているわけではない。無関心な職員の様子を目の当たりにすると、心が折れることもある。そんなとき、月1回のTAMAP±〇の定例会に来ると、同じ志

埼玉県社会福祉事業団　あげお
関　大友

今年、初めてTAMAP±〇に参加させていただきました。あげおは、表現活動を始めて間もないため、わからないことばかりでしたが、作品展や会議を通して、障害者の表現活動の意義や重要さを学びました。今後はネットワークを活かすとともに、もっと多くの方にこの活動を知っていただきたいと思います。

（社福）さいたま市社会福祉事業団
髙橋ルミ

より良いアート支援に向けてメンバーがともに考え、悩みを共有できたことで連帯感が生まれた。また、3ヶ所同時開催という過去に例のない取組みにより、多くの県民の方に見ていただけたことで、埼玉県らしいムーブメントを起こせたと思う。TAMAP±〇で生まれた利用者・利用者ご家族・来場者のつながりを今後も継続し、アートによる社会参加が普通のこととして定着してほしい。

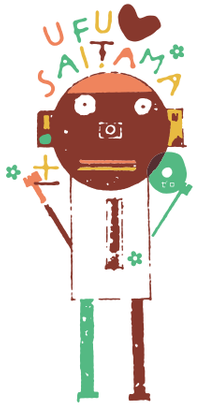
埼玉県社会福祉事業団　あげお
多田美奈子

あげおでは、表現活動を始めて3年目。今年は研修の形での参加ではなくTAMAP±〇メンバーとして月1回会議を重ね、企画から参加することができた。展示会がどのように実施されていくのか体験でき、グッズ会議では自施設の商品開発の場となった。表現活動を始めて20年の施設、自施設のように3年目の施設が一緒に話し合う場が持て、学ぶことができることが素晴らしいと考えます。施設内の意識の向上と、地域とのつながりを大切にし、障害のある方の表現活動が広がっていくことを願います。

皆で力をつけてきた印象が強い。この先はそれぞれの施設の特色や強みも活かして、ネットワークにおける役割をある程度細分化できるような組織作りも期待できそうだ。活動の根幹にあるものを常に意識し共有できる場を設けながら、埼玉県の障害者アートやＴＡＭＡＰ±〇のさらなる発展を目指していきたい。

ＮＰＯ法人　ゆめたまご
中島　恵

障害をもつ方達の表現活動を広げていきたいという同じ思いを持つ人達との出会いの場であり、ここに参加できたことをとても感謝している。互いの活動を知り、互いに学びあい、単独の施設ではとても開催できない展覧会という大きな舞台にも参加することができた。日々の業務の忙しさや、遠方で参加できない等の理由で、志を持った施設職員の思いがつぶされないよう、浅く広いサポートを願いたい。



（社福）皆の郷　川越いもの子作業所
中田　勉

今年度より新たに国の補助事業として始まった埼玉県アートネットワークに参加しました。グッズ展に始まり、埼玉県立近代美術館のアート企画展、３ヶ所同時に開催した川越市立美術館の展覧会などに関わり、多くの事を学ばせていただきました。展示会を通して、なぜこの作品を施設職員は展示したいのかといった思いや考えを知り、またアーティストトーク等で作家自身に会い、作品を理解することに役立ちました。また県内のアート活動を行っている作業所や作家たちを知ることができ、今後の地域ごとの展覧会や巡回展につながって行くことと思います。

ＮＰＯ法人　ＣＩＬひこうせん
野本翔平

この１年間で改めてＴＡＭＡＰ±〇のパワーを実感しました。今年度はキックオフ展、グッズ展、障害者アート企画展、そして３ヶ所同時展を行いましたが、これだけ多くの活動ができたのはＴＡＭＡＰ±〇メンバーの豊富な経験と、技術の高さがあったからだと思います。本当に一人ひとりが障害者アートのプロフェッショナルで、ともに活動していく中で、私自身も大変勉強になりました。

ＮＰＯ法人織の音アート・福祉協会　織の音工房
萩野えり子
村山明日香

『活力をもらった!!』という想いでいっぱいです。途中からの参加でしたが、毎回のネットワーク会議で、職員さん達の熱量の凄さを感じていました。展覧会を通して、観客の皆さんの眼から心に響き、感情に揺さぶりが生じたのなら本望ですね。このような機会に巡り合い、携われることに感謝しております。今後も、一人ひとりがまっすぐな想いを表現していることを素直に伝えてゆけたら、と願っています。

（社福）ウィング　ワーク&ライクのびっこ
平川文子

私は3年前「利用者の絵をお金に換える！」という志で、勤務する法人でＴシャツ等のプリント販売を行う作業班を立ち上げました。ＴＡＭＡＰ±〇に参加して、障害者アート普及のために、私よりも何年も前から活動している皆さんと出会うことができ、とても刺激になっています。この活動と勤務する現場との両立が今後の課題になりますが、参加するメンバー1人＋1人＋…＝∞（無限大）になるＴＡＭＡＰ±〇を通して、私自身も飛躍できたらと思っています。

（社福）啓和会　久喜市いちょうの木
吉田美智

12月の企画展からの参加で初心者ですが、個性ある多くの作品に出合い、その作品に携わるＴＡＭＡＰ±〇のメンバーの心意気に感動しています。作品を沢山の人に見てもらい、認められることで意欲が沸き、人生が豊かになる。そんな今まで見たことのない利用者さんの変化を見ることができました。表現活動を通して心の声が見える、そして人と人がつながっていけるようなお手伝いができるといいなと思います。

川口市心身障害福祉センター　わかゆり学園
増田喜成

展示が増え、仲間も増え、より開かれたイメージを持っています。さらに、ここでできたネットワークを使いながら違う場所にも活かしていける等、着実に進めているように思います。グッズに関しても会議や展示を通して、同じ方向に向かって力を合わせている印象が強くあった一年でした。最初の一年としてはとても良かったですが、来年度以降は展示の場所や時期、お互いの強みを出し合ってもっとたくさんの人に見てもらう機会を負担のない形で作っていけたらと思っています。

アートセンター集 事務局4

五十音順

（社福）川の郷福祉会　おれんじ
渡邉貴子

「刺激をもらいました」。アートネットワークの活動が始まって1年、毎月1回の会議とグッズ会議に参加させていただき、いいものを作るために本気で会議して、自分のできることを自分からやっていくまわりのみなさんからたくさんの刺激をもらいました。毎日の施設の支援の中で忘れてしまいがちな大切なことを再確認できる大切なネットワークでした。また、この活動を通じて新たに、施設の仲間がアーティストとして成長したこと、みんなの作品がグッズとして商品化できたことも大きな収穫でした。

（社福）みぬま福祉会　工房集
蒲生侑希

今年度モデル事業に関わり、実際に作品が生まれる現場との兼務は上手くいかない時もあった。しかし、だからこそ見えてくることも多く、仲間との関わりがあるからこそ分かることもあり、他施設の職員さんたちと共有できることが多くあった。熱い想いを持った職員さんがたくさんいて、活動を通して良い変化が見られれば、皆で共有して喜べる。ＴＡＭＡＰ±〇らしさだと思う。事務局としては、反省は多いが、事業を通して多くの方たちと共有した時間はとても濃いものだった。

（社福）みぬま福祉会　工房集
小嶋芳維

この度、微力ながらアートセンター事務局として1年間、関わらせていただきました。携わらせていただき感じたのは、埼玉県内の施設間のつながりの強さだけでなく、毎月開かれるネットワーク会議に参加された皆様がとにかく熱い！ことでした。参加いただいた皆様、現場職員として日々の仕事に忙しい中、貴重なお時間を割いてＴＡＭＡＰ±〇を盛り上げていただきありがとうございました。この熱さ&つながりが埼玉県内だけでとどまることなく、芸術文化発展の寄与につながればと思います。

（社福）みぬま福祉会　工房集
中村亮子

事務局では広報や制作物、記録等に携わらせていただきました。今回の事業を通して、埼玉県内の福祉施設のネットワークなどを中心に多くの方と関わらせていただき感謝しています。ネットワークではこれまでに築いてきた施設間のつながりの強さと表現活動に対する共通の意識を感じ、業務に取り組むにあたって励みになりました。事務局での活動、ネットワークの取り組みを活かして今後も各地で活動が広がることを期待しています。

（社福）みぬま福祉会　工房集
宮本恵美

障害のある仲間たちのためのアート（表現）活動を支えたいという同じ志のある施設職員たちとの出会い、つながりは、とても心強いものです。表現活動を通して多くの障害のある方や関係する方々の幸せな場面に出会うたびに、ネットワークを立ち上げた初心を思い出します。これからもどうぞよろしくお願いします。

アートセンター集　報告書　２０１６－１７
２０１７年３月30日発行

企画・編集・発行
社会福祉法人みぬま福祉会

アートセンター集
〒３３３－０８３１　埼玉県川口市木曽１４４５（工房集内）
ＴＥＬ　０４８－２９０－７３５５
ＦＡＸ　０４８－２９０－７３５６

アートセンター集ＨＰ　http://artcenter-syu.com/
工房集ＨＰ　http://kobo-syu.com/
みぬま福祉会ＨＰ　http://minuma-hukushi.com/

構成・編集　武居智子
編集協力　杉千種（con*tio）　ＴＡＭＡＰ±〇
写真　今井紀彰　鈴木広一郎　工房集　武居智子
アートディレクション　水川史生（en design studio）
デザイン　藤沼重人（Type-f design room）　清水龍之介
助成　厚生労働省「平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業」

議事録やアンケートなど様々な記録をもとに編集しました。
事業にご参加ご協力いただきました皆様、誠にありがとうございました。

©社会福祉法人みぬま福祉会
無断転載厳禁

art center syu